

葉末の露

題字 彌富徳太

故郷能空乎幾千里 離連天武須夫草枕
散留登毛与止夜 君能多每
消由流毛与止夜 国能多每
葉末迺露登母路登毛爾

(中島長吉先生遺詠、本文二一八頁参照)



武藤太喜雄氏撮影

『葉末の露』によせて

このほど、私が深く信頼し、尊敬してやまない末次祐司先生が、三十数年の長きにわたって誠心誠意精励なされた佐賀県の県立高校の常勤教員の職を退かれ、それを一つの節目すゝめとして、この本を自費出版されることになりました。

これまで、私は長い間、同信同憂の友の一人として先生に親しくしてもらっていたので、先生の人となりや、今の世の中の諸般のことについての先生のお考えや、特にわが日本の教育についての御意見等については、ある程度承知していたつもりであります。

ところが、今回、この本の原稿を全部拝読するにおよび、あらためて、先

生の御人格がいかに気高く、教え子を思われる御心が広く、あたたかく、極めて深くあついものであるかをしみじみと感じさせられています。

先生の文章は、そのお人柄そのままに、言葉がわかり易く、澄み切っており、簡潔な表現の中に深い英知と教育的配慮が込められており、しかも、何ものをも貫きとおさないではやまない勇氣と信念と静かながらも熱烈な情熱にみちあふれていて、何回読んでも目覚めさせられ、教え励まされ、共鳴共感の念を禁じ得ないものばかりであります。

一語一行の言葉に先生の心血が注ぎ込められていて、中には思わず胸せまり、めがしら目頭が熱くなり、心の底から先生に感謝せずにはいられないものが少なくありません。

これらの、いとも尊い言葉にあふれた本を、かつての教え子達に贈られるという。贈られる人々の幸運を思うとともに、ここに盛られている言葉の光を、できるだけ深く、多くの人々が感じとられるようにと願わずにはいられません。

昭和五十九年六月吉日

佐賀女子短期大学教授

古賀 秀男

目次

『葉末の露』によせて

古賀 秀男

獅子吼……………	1
人生の要……………	4
智恩院の鐘声……………	7
人間の真の自由……………	9
琴ならし……………	12
感応の世界……………	15
高市黒人の歌……………	17
射の裡に神を見る……………	20
神様は在します……………	24

白い鹿の話	26
座頭と狼の物語	28
割り切れないもの	31
人間の二面性	34
一切唯心造	36
霊の教育	39
副島種臣風伯に祈る	41
千里巡拝行脚の旅	43
占領政策と戦後の日本	46
ホイットマンの精神	49
土肥慶蔵博士の言葉	52
猟師と老婆	55
アイNSTAYNの言葉	59
俗中の真	61

平常心を失はぬ事	63
人間が一生涯とり守るべき言葉	65
学問をする心得	67
鍋島平五郎の精忠	70
石田梅巖の心	72
凶歳を救ふ道	74
一日接すれば一日の親愛生ず	77
結縁の功德	80
雪山童子の捨身	83
ある偉い坊さんの話	86
独座観念	88
一人の主に逢はず	90
正岡子規の面目	92
ただ一句の講演	94

月のうさぎ	96
涙	101
一粒の豆	103
栄西禅師の教へ	108
堀尾金助の母	111
歓喜の碑	114
神道のあらまし	117
黒住宗忠翁の敬神	119
自他一如	121
一对の足跡	123
佐藤定吉博士の学問	125
老と死	131
人間の寿命	134
山火事と鸚鵡	136

無駄石	139
カーネギーと或る職工の話	141
塚原卜伝と三人の息子	144
天知る地知る君知る我知る	146
植木屋「橐駝」の話	148
「木」のいのち	150
薬師寺西塔再建の心	153
馬を観る名人の伯楽の話	157
「木鶏」の話	160
優游自適といふこと	162
いさみ	164
菊池武時の快拳	166
武士は相見互い	168
大沢勘大夫の活学問	171

最後の授業	175
河村博士と学生	178
仁戸田巧教諭の最期	183
嗚呼六士先生	199
あとがき	227

獅子吼

友清 歆真著 『天行林』より

児獅子じしが或る日、母獅子の眠つてゐるあひだに、森の中で、独り遊び戯たはむれてゐた。種々変つたものが、氣を引くので、児獅子は一寸探検ちよつとを試みやうといふ心になり、自分の家からはなれた。大世界はどの様なものか、それが見たいと思つた。やがて児獅子は遠くにさまよつて、帰路を見失ひ、いつの間にも迷兒めいになつてしまつた。

児獅子は驚いて、氣も狂はしく八方に走り廻り、悲鳴を挙げて母を呼んだが、母の答へはなかつた。つかれはてゝ、せんすべもなくなつた時に、あたかも好し、この頃兒を失つた羊がこれに出くはした。羊は憫あはれな啼なき声を聞き付け、児獅子の近くに來て、やさしく世話した上、遂つひに養子としてそれを引取つた。

羊はこの迷子を愛して育てたが、その内にそれが羊よりも大きくなり、時には何だか

薄気味悪く見ゆる様やうになつて来た。その眼の底には、羊の了解のいきぬ、不思議ふしぎな光を見る事もたびたびであつた。

当分の間は、養母と養子と共に幸福な月日を送つて居たが、或日、向うの山の彼方かなたに空を圧して、大きな一頭の獅子が勇姿をあらはした。獅子はふさ／＼とした立髪たちがみを振つて、谷間に木霊こだまとなつて鳴り響く様な吼声こゑを發した。母の羊は恐れて立ちすくんだ。しかし、この不思議な音響が、児獅子の耳に達した時に、児獅子は魔に打たれた様になり、これまでかつて覚えなない感じがして、全身がわな／＼とほとんど震ふるへ上る様な気がした。その獅子の吼声は児獅子の心の底の琴線きんせんに触れ、これまでに無き新しき力を生ぜしめた様に感じたのである。新しき欲望ともいふべき、力の不思議な自覚が發生したのだ。

新生の力は児獅子の心を動かした。児獅子は自ら何をすべきかも考へずに、ほとんど自然的に獅子の吼声に應じて吼ほえ返した。そのうちに、自己の内に勃然ぼつぜんとして起こつて来た新しい力、自ら恐怖と恐愕おそがくの念に充ちてふるへながら、一旦醒めざめたこの動物は、情深き目で母羊を見やりながら、向うの山の獅子の方に飛び去つて行つた。

(感想)

私はこの比喩話を思ひ出すたびに、何度目をさまさせられ、そして勇気づけられたか
れない。やゝもすれば、自分は羊の子と思ひこみ、自分の枠の中に小さく閉ぢこみ、弱々
しく生きやうとした時、私を励ましてくれたのはこのたとへ話である。人間はいつのま
にかこの小我のとりこになつてゐる。人は誰でもが心の底に潜む大きな力——神性・佛
性と云へるかもしれない——を持つた獅子の子である事を忘れがちである。しかし一た
んこの神性（佛性）に目ざめた時、人間は本来の人間（真我）にたちかへる。こゝが大
切だと思ふ。虚心に自然の神秘にふれ、また、先人の書をひもとく時、心の中に神性（佛
性）の聲があたかも遠い獅子吼の如く響いてくる。大きな力の湧き出るを覚える。稲は
夏に雷鳴にふれて生命を宿すと云はれる。人間も天啓の聲に接して、人が真の人になる
と思ふ。あくまで謙虚に、日々反省しつゝ、しかも自分の中に宿る神性（佛性）に目ざ
めて生きるやうに努力することが極めて大切だと思ふ。

（昭和五十八年十月二十三日）

人生の要かなめ

こゝに一つの思ひ出す好い話がございます。

かつて、日本にをりまして、日本に精通してをった立派なカトリック神父でありましたカンドーさんのことでありますが、このカンドー神父の書に、かういふ感銘深い一文がございます。自分がまだ若いフランスの将校で気のきいた制服を着て、好い気になつてをった頃のことです。或る日休暇を利用して親戚の訪問に出掛ける途中、小さな海岸の漁村の宿屋に泊りました。その宿のおかみがたゞ者でなかつたと見えまして、生意氣盛りの私と話をしてをる中に、明日の朝早く起きて海岸に出て見ませんかと申しました。何か面白いことがあるのかと聞きますと、漁夫達が漁に出掛ける前にお祈りをするから、それをお聞きになつて見ませんかといふのです。私は何だか馬鹿にされたやうな気がし

安岡 正篤著 『朝の論語』より

て、席を立ったのですが、部屋に帰って一人考へて見ると、自分は正直なところ方向を失つておる青年のやうな気がしてなりませんので、思ひ直して翌朝海岸へ出掛けを見ました。すると漁師達は小さなベレー帽を横にかぶつて、船の方に歩いてゐましたが、乗りこむ時にみなそのベレー帽をとつて空を仰ぎながら、「神よ我々の船は小さく、海は果てしなく広い。どうか我々をお護り下さい。」と祈りを上げて乗りこむのでした。生意気盛りの私にとつて、この見聞が如何に尊いものであつたか。今になつても忘れることのできないことなのです。私はその晩だけは本当に祈りました。「神よ、我等の頭脳は小さく、真理の海は果てしなく広い。どうか我等を導き給へ。」と、その時に私の人生の要ともいふべき信念を決めることが出来たのであります。

(感想)

漁師の祈りの言葉「神よ、我々の船は小さく、海は果てしなく広い、どうか我々をお護り下さい。」この言葉は常に死に直面し、死と戦つてゐる漁師の精一杯の真剣な祈りの言葉である。そこには迷ひもなく、たゞ全身を神に捧げて、御護りを祈るのみである、もは

や自己のはからひのつけ入るすきはない、神様にまかせきつた世界である。こゝにこそ全力は發揮できる。死に切つた世界に拓ひらかれた活路と思ふ。私達も人生といふ船旅をしてゐるが、この漁師の心を心として、己れのはからひを捨て、神にまかせゆだねて進んでいかねばならぬと思ふ。一日の寿命も人間の力では伸ばし得ない。明日もはかり知れない人生である。大いなる神靈のみ守りのふところに抱かれてゐる事を信じ、謙虚にしかも力強く生かさせていただきたいと思ふ。

(昭和五十九年五月十七日)

智恩院の鐘声



知恩院山門（ヤマケイガイドより）

友清 歓真著 『靈学筌蹄』より

京都大学の某教授が或る日朝早く登校して、平生の開講時間より十五分ほど早く唇を切った。曰く、「余は今日払暁眼ざめて静座してみると智恩院の鐘の音が余韻長く聴えて来た。余は神気恍惚として其の鐘声に合体してしまった。鐘声以外に余自身が心身共に無くなってしまった。世界が鐘声のみになってしまった。……さて聞く、昔からの

名鐘といふものは、その中味に黄金が鑄込んであるさうで、それが為^{ため}にこの妙音を発し、千年の後までも人心を浄化せずにはおかぬ。黄金は鐘の外面に現はれて居らぬから誰れ

の眼にも止らぬ、全く我を殺してかくれて居る。けれどもその犠牲の力、利他献身の誠が千年の後までも人心を浄化するの大功業を成してゐる。人間も此の名鐘中に鑄込まれた黄金の如くでなければならぬ。……」と、満堂の学生は水を打ったやうに静かに傾聴し、講堂の壁も黒板も硝子戸も机も学生も教授も此の瞬間たゞ鐘声に合体してしまった。その時この校舎の屋根の上は光り輝いてゐた。

(感想)

この文章を読めば、智恩院の鐘の音が聞えてくるやうな気がする。この韻々たる音は
一たび聞けばいつまでも耳にのこる。毎年、大晦日みそかの夜には、全国何処かの名高い寺の
除夜の鐘が放送される。あの音は何とも云へない。鐘の音が自分か、自分が鐘の音か、
恍惚三昧になれたらさぞ素晴らしいことだらう。

鐘の中の黄金、人間はかくありたいものだ。自分を殺し、他のために尽くす誠、これが人としての道の最高のもではなからうか。

(昭和五十八年十月二十八日)

人間の眞の自由

小林 秀雄著 『歴史と文学』より

昔、大野道賢入道といふ武士があつた。これは大阪の陣で有名な大野修理の弟であります。冬の陣の和談の際、家康が大阪城の総堀を埋めたのを見て、家康全く和談の心底にあらざ、と非常に憤つて堺の町に放火した。家康はこれを聞いて道賢を憎み、夏の陣が始ると、道賢生捕りが第一番の功名とふれ、入道はたうたう生捕りになつて了つた。家康の前に引出され、生捕りになつて恥を曝すとはたはけた奴と罵られたが、生捕は古今の勇士にもある習ひ、少しも恥でない、それよりも貴公の様なものに威張られてゐては天下心許なし、大たはけなり、と言つて平然としてゐた。堺の町人が、さういふ放火犯人は、焼跡で火あぶりにしたいから、私共にお下げ願ひたいといふ事になり、火あぶりになりました。これも成るだけ憂目を見せる方がよからうと遠あぶりと言つて、遠く

の方からあぶる事にして、七転八倒の苦しみを見物するこしらへにしたのですが、入道は柱に縛りつけられたまゝ少しも動かない、じつと動かないまゝで真つ黒こげになって了った。火あぶりでは縄が焼けて切れない様に、縄に泥を塗つて置くのであります。甚だ物足らぬでいで検視のものが、真黒こげの入道に近付いた処が、死んだと思つた入道が、ムクムクと動き出し、検視の脇差を抜いて検視の腹をグサリと貫いた。その途端に真つ黒な入道の身体は忽ち灰になったさうです。諸君はお笑ひになりますが、僕は、これは本当の話だと思つてゐます。真に自由な人生とは、有りさうな話でも有りさうない話でもないのだ。

もう一つお話しします。これは歌です。人間の真の自由といふものを歌つた吉田松陰の歌であります。この歌はお笑ひにはなるまいと思ふが、気味の悪さは同じ様なものです。松陰が伝馬町の獄で刑を待つてゐる時、留魂録といふ遺書を書いた事は皆さんも御承知でせうが、そのなかに辞世の歌が六つありますが、その一つ、

呼びだしの声まつ外に今の世に待つべき事の無かりけるかな

呼びだしのとは無論首斬りの呼びだしであります。

(感想)

人間の眞の自由とは一体何だらうか。この疑問に答へてくれた一篇である。この肉体の束縛より抜けだした靈魂たまひの世界に生きる事、これが人間の眞の自由ではあるまいか。五体の次元をこえた超次元の世界にこそ眞の自由の世界があるやうだ。ゾットする恐ろしい、こわい世界かもしれぬ。しかしそこに人間の眞面目が躍動してゐる。大野道賢といひ、吉田松陰といひ、そこに展開された世界は、もはや俗人の世界ではない。ある一つの信に生きた人の世界である。俗人の目のうろこを取り去つて凝視せねばわからぬ世界だ。一朝一夕の修養では到底到達し得ぬ。限りなく深い思ひと執念の凝結をここに見る思ひがする。永遠なるものへの信の世界であると思ふ。

(昭和五十八年十月二十五日)

琴 ならし

岡倉 覺三著 『茶の本』より

大昔、竜門りゅうもんの峽谷に、これぞ真の森の王と思はれる古桐ふるざりがあった。頭はもたげて星と語り、根は深く地中におろして、その青銅色のとぐろ巻きは、地下に眠る銀竜のそれとからまつてゐた。ところが、ある偉大な妖術者ようじゆつしやがこの木を切つて不思議な琴をこしらへた。そしてその頑固な精を和やはらげるには、ただ楽聖の手にまつよりほかはなかつた。長い間その楽器は皇帝に秘蔵せられてゐたが、その弦から妙たへなる音をひき出さうと名手がかはるがはる努力してもその甲斐かひは全くなかつた。彼らのあらん限りの努力に答へるものはたゞ軽侮の音、彼らのよるこんで歌ほうとする歌とは不調和な琴の音ばかりであつた。

つひに伯牙はくがといふ琴の名手が現われた。御しぎよしがたい馬をしずめやうとする人のごとく、

彼はやさしく琴を撫し、静かに弦をたたいた。自然と四季を歌ひ、高山を歌ひ、流水を歌へば、その古桐の追憶はすべて呼び起こされた。再び和らかい春風はその枝の間に戯れた。峽谷をおどりながら下つてゆく若い奔流は、つぼみの花に向かつて笑つた。たちまち聞こえるのは夢のごとき、数知れぬ夏の虫の声、雨のばらばらと和らかに落ちる音、悲しげな郭公かつこうの声。聞け！虎とらうそぶいて、谷これにこたへてゐる。秋の曲を奏すれば、物さびしき夜に、劍のごとき鋭い月は、霜のおく草葉に輝いてゐる。冬の曲となれば、雪空に白鳥の群れ渦巻うずまき、霰あられはばらばらと、嬉々として技を打つ。

次に伯牙は調べを変へて恋を歌つた。森は深く思案にくれてゐる熱烈な恋人のやうにゆらいだ。空にはつんとした乙女おとめのやうな冴さえた美しい雲が飛んだ。しかし失望のやうな黒い長い影を地上にひいて過ぎて行つた。さらに調べを変へて戦ひを歌ひ、劍戟けんげきの響きや駒こまの蹄ひづめの音を歌つた。すると、琴中に竜門の暴風雨起こり、竜は電光に乗じ、轟々ごうごうたる雪崩なだれは山々に鳴り渡つた。帝王は狂喜して、伯牙に彼の成功の秘訣ひけつの存するところを尋ねた。彼は答へて言つた、「陛下、他の人々は自己の事ばかり歌つたから失敗したのであります。私は琴にその楽想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、ほんとう

に自分にもわかりませんでした。」と。

(感想)

最後の文句「琴が伯牙か、伯牙が琴か」の言葉が生きてゐる。琴とそれを奏でる伯牙とはまさに一体である。琴も生きてゐる。伯牙は琴の本性にのりうつり、天衣無縫の世界に生きてゐる。琴の中に秘める無限のものを伯牙は自然に引出し表現してゐる。まさに芸術の最高の境地だ。

ふと教育のあり方をふりかへつてみた。教師が伯牙で、琴が生徒かもしれない。教師と生徒が一体となった時、すばらしい教育（授業）は展開する。生徒一人一人の持つてゐる才能を、あたかもオーケストラの指揮者の如く、引き出せたらなんと素晴らしい事だらう。三十有余年の自分自身の教員生活をふりかへり、まことに恥しい。教へ子に対し、すまない心地で一杯である。だが、教育の理想はこゝにありはしないだらうか。伯牙に教へられるところは限らない。

(昭和五十八年十一月三日)

感応の世界

友清 磐山著 『春風遍路』より

中島藤吉さんといふ人、明治時代に横浜で呉服屋をやつて相当に成功し、店を鈴木さんといふ番頭さんに譲り、幕末の剣客、斎藤弥九郎先生の代々木の旧宅を買収して移居せられました。ひろい閑静な邸宅で、庭には雑木がたくさんありました。中島老人は暇にまかせて、神道書や仏典を読み、寺で説教を聴き、不必要な殺生をやめるつもりで、かねてイギリスから取寄せた獵銃二挺ちようを売つて、その代金は附近の困つて居られる人たちへ施ほどこしました。それから後、お寺で西有禪師の話聴き、泥坊がやつて来るのは前世の借金を取りにくるやうなものだから、抵抗したりせず、欲ほしいものをやつたらいいとのことで発心ほっしんし、金丸銃砲店で買つてゐた護身用のピストル三挺も売払つて、その代金を近所の貧しい人たちへ施しました。ところが、その翌朝驚くべき光景が展開されま

した。中島さんが起床して縁へ出てみると、庭の樹立こだちへ沢山な鳥が来て嬉したはむさうに戯れ、
天空には鳶とびが舞ひ、どここの山から来たか見なれぬ鳥も種々あつて、黄金色の朝日の中に
美しい絵巻物をくりひろげた状態となりました。中島さんは「自分の殺意が尽きたのだ。」
と深く感激しました。

(感想)

感応の世界ほど不思議なものはない。世の中は万物が、目に見えない糸のやうなもの
で、心が結ばれてゐるやうに見える。中島さんの殺意のあるところには鳥も、けものも
寄つて来なかつた。しかし、鉄砲もピストルも売払つて殺意を失くしたとたんに、鳥た
ちは庭に集つて来た。まことにその感と応の早いこと不思議の一語に尽きる。親と子は
元は一体であり、その感応は一番早い、遠く離れてゐてもその思念はたゞちに通ずる。
教師と生徒の間も、たとひ血のつながりはなくても、信の世界に生き、感応しあつてゐ
る。良い思念を持ち生徒のために祈りたい。

(昭和五十八年十一月六日)

たかいちくろひと
高市黒人の歌

犬養 孝著 『万葉の人びと』より

楽浪ささなみの 国つ御神の うらさびて

荒れたる京みやこ 見れば悲しも

これはあの壬申の乱後、少くとも二十年位経つてからの、近江おおみの荒れたる京を偲んだ
回想の歌なんです。 「楽浪ささなみ」 というのは地名、大津の辺りの総名そうみょうです。 「うらさびて」
というのは、靈魂の遊離した状態をいうんです。 だから国が栄えるというのは、国に
神霊がいるということ。ところがその国の神霊がどこかにすうつと遊離してしまつて、
つまり虚脱の状態になつてしまつてゐる。 そうした荒涼としてゐるこの壬申の乱後の京
をみるとたまらない。

「楽浪の国つ御神」って、つまり現実には、たゞ荒れた姿があるだけです。それを黒人くろひとは何と理解したでしょう。楽浪の国土を支配する神が、もうどこかへすうつと行ってしまつて、そして荒れているというんです。それは目に見えない現象の背後をつかんでいるんですね。これは黒人だけの世界です。誰にでも通じる世界ではない。黒人の主観がみつめ、つかんでみせた世界といえます。国土の神がどこかへ遊離してしまつたので荒れているというふうにつかむつかみ方というのは、本当に目に見えない現象の背後、そこに自分の心をしみ通らせていってはじめてできるのです。

(感想)

「国の栄えは、国津神の御霊と共にある」と感じた万葉人高市黒人の感覚はするどいと思ふ。表面の荒涼たる現象をみて、その背後に神霊かみたまの不在を覚る感覚は、万葉人にして始めてなし得る事で、現代人はすでにその能力を失つてゐるやうに思ふ。身近に神霊を祀り、神霊と共に生活してゐた万葉人には「目に見えない現象の背後、そこに自分の心をしみ通らせる」深みのある精神生活をなし得たものと思ふ。日本の現状を見る時、

表面の物質的な栄えとは裏腹に、人の心はすさまじく荒れてゐる。背後に神霊の不在をつくづく感じ神霊に見捨てられた思ひさえする。戦後の占領政策の呪縛より一日も早く脱却して、国民こそりて御国を守る神霊を祀り、国民精神の復興をはからねば、真の日本の栄光は無いと思ふ。

(昭和五十九年五月十七日)

山は高きにあらざるも仙あれば名あり
水は深きにあらざるも竜あれば霊なり
人は智にあらざるも信あれば必らず達す

友清 歆真著 「山姥穴」より

射の裡に神を見る

友清 歡真述 『古道』誌より

オイゲンヘリゲル博士著、「弓と禪」の中に次のような劇的場面の一節がある。

「それでは先生は眼隠しをしても中あでられるに違いないでしょうね」と思わず私の口から洩れた。師範（東北大学弓道師範、阿波研造先生）は私が彼の感情を害したのではないかと、私に気をもませるような目付で私を見た。それから「今晚お出でなさい」と云った。私は彼と向いあつて座布団の上に坐つていた。彼はお茶を出してくれたが、一言も話されなかつた。そのまゝ吾々は長い間坐つていた。真赤におこつた炭火の上で、お湯がチンチンとたぎる音の外は何も聞こえなかつた。遂に師範は立ち上つて私について来るように目くばせした。

道場には明々と灯がついていた。師範は私に命じて縫針ぬいばりのように細長い蚊取線香を的ま

の前の砂地にさしこませたが塚の灯にはスイッチを入れないように注意した。真暗だったので私は塚の輪郭すら見分けがつかなかった。そして、もしも蚊取線香のちっほけな火玉がそのありかを示さなかったとしたら、私は的の立っている場所を、私は感付いたかも知れないが、はつきり見定める事は出来なかったであろう。師範は礼法を舞った。彼の甲矢は咬々たる明るみから真暗い闇の中へと飛んでいった。炸裂音で私はその矢が的に中った事を知った。乙矢もまた中った。塚の灯をつけた時、私は甲矢が黒点の中央に中り、また乙矢は甲矢の筈を砕いて、その軸を少しばかり裂き割って、甲矢と並んで黒点を突き刺さっているのを見出した。私は呆然とした。そしてその矢を別々に引き抜くに忍びず、的と一緒に持ち帰った。師範はそれをしげしげとみつめていた。やがて彼は云った。

「甲矢の方は別に大した離れ技ではなかったと貴方は御考えになるでしょう。何しろ私はこの塚とは数十年來なじんでいるので、真暗闇の時ですら何が何処に存るか知っているに違いないというわけですね、そうかも知れません。また私は云い訳をしようとも思いません。しかし甲矢に中った乙矢——これをどう考えられますか、とにかく私は、

この射の功は、「私」に帰せらるべきものではない事を知っています、「それ」が射たのです。仏陀の前でのように、この的に向って頭を下げようではありませんか」と。

この二本の矢をもって師範は明らかに私をも射とめたのであった。一晚の中にまるきり別人になつたかのように、私はもはや私の矢や、それがどうなつたかについて、心を煩わす誘惑におち入らなくなつた。

これはいつまでも心に残る光景である。それは「射の裡に神を見る」と云う純粹無垢の世界の顕現がそこにあつたと信じている。千射万箭の或る日、忽然として別乾坤が關けて、吾も無く人も無く、天地一枚、一心清明の鎮魂の極致がそこにあり、無心の射、阿波先生の「それ」が顕現するのである。

(感想)

暗闇の中での的を適確に射て、しかも同じ的中心に二本の矢が重なるやうに当たるとは、まさに神技である。たゞ練習を積んだばかりとは思へない。人間の中にある「それ」——神靈を悟つた人にして始めてなし得ることと思ふ。純粹無垢の世界といふものを教へられ

た。ふだん垢の中に住みけがれてゐる私にはこの話は驚異であり、清浄の上もない。道の深さをつくぐと思ふ。

(昭和五十九年五月十七日)

一事を必ずなさんと思はば 他の事の 破るるをもいた
むべからず 人の嘲りを恥ずべからず 万事にかえずし
ては 一の大事成るべからず

「徒然草」より

神様は在をします

森繁久弥の話 NHKテレビより

伊豆の戸田の港で、ある青年に船に乗せてくれと依頼された。船の中で酒を汲みかはしつゝ、青年は次のやうに語った。

「神は在をします。十六歳の時に南方マリアナ方面の海域に、数百隻の船と共に鯉かつおを獲りに出かけた。台風に遭ひ、ほとんどの漁船は沈没し、溺死者が多数出た。三日間海洋の中を木片にしがみついて漂流し、三日目に救助船に救けられた。その船は油も乏しくまさに母港に帰らむとしてゐた。救けられてから暫しばらくして、自分を救けてくれた木片を神棚に飾らうと思ひ、その木片を捜してくれるやうに船長に頼んだ。その木片のあったところまでは四時間の距離があつた。だが、船長も偉かつた。四時間の距離を戻つてくれた。サーチライト（探照燈）で搜索したが、終に木片は見つからなかつた。しかし

そこには筏いかだに乗った六人の人々が生き残つてゐた。神はその人々を救はむとして船を戻したのだった。神はをしますと思ふ。」と。

青年の言葉はまさに感動に尽きる。

(感想)

この話は、ある青年の実感だ。偶然といへば偶然ですませるかもしれない。救ひを待つてゐる尊い生命のことを思ふと偶然とは到底思はれない。救ひを待つ人々の神への祈りがまさに通じたのだ。見えない神の御導きによつてとられた船長の行動としか思へない。救はれた人々の喜びはいかばかりであつたらうか。感動的絵巻物である。この奇蹟的な出来事に、神の存在を知った青年の心が、こよなく清く尊く思はれる。

(昭和五十八年十月二十九日)

白い鹿の話

小林 秀雄著 『感想』より

或る獵人が白い鹿に逢った。

「白鹿は神なりと云ふ言伝へあれば、もし傷けて殺すこと能はずば、必ず崇あるべしと思案せしが、名譽の獵人なれば世間の嘲りをいとひ、思ひ切りて之を撃つに、手応へはあれども鹿少しも動かず。此時もいたく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時の為に用意したる黄金の丸を取出し、これに蓬を巻き附けて打ち放したれど、鹿は猶動かず。あまり怪しければ近よりて見るに、よく鹿の形に似たる白き石なりき。数十年の間山中に暮せる者が、石と鹿とを見誤るべくも非ず、全く魔障の仕業なりけりと、此時ばかりは獵を止めばやと思ひたりきと云ふ。」（柳田国男著『遠野物語』）

(感想)

何かこの世の次元を離れた別世界にすひこまれた心地がする。「魔障の仕業」と感じたその瞬間に、獵人は常人に返つたに違ひない。それまでは超次元の世界で、生きた白鹿を見、格闘をかさねてゐた。全く物のけにつかれ常人ならぬ境にさまよつてゐたと思へぬ。山にはこのやうな神気ただよふ世界があるのでなからうか。現代人は理性でこれを拒否するけれども、私は自然の神秘を思ふとき、古人が山や海の神性を畏れてゐた事が真実の事としか思へない。虚心に神気にふれ、神を見る心を持たなくては、日本の古典、古事記等は真に理解し得ないのではなからうか。この夢幻とも思へる世界に、私は人間の心の故郷を感じる。現今の神を畏れぬ高慢さが人間社会の破滅を迎へてゐるのではなからうかと思ふ。

(昭和五十八年十月二十九日)

座頭と狼の物語

友清 歆真著 『靈の世界観』より

ひとりの座頭が山路に行き暮れ踏み迷ひ、遂に山中に一泊する覚悟をきめ、大木の根もとに坐し、誰も居らぬところだけれど、一宿の礼儀だからと挨拶して、一曲の琵琶を弾いたのである。山中無人、たゞ明月は皎々こうこうと冴え渡さつて居るのが座頭の六感に感ずるばかりであつた。

すると突然、空中に声あつて、「むゝ面白い、もう一曲弾ぜよ。」といふ。座頭は驚き恐れたが、度胸を据すゑてさらに一曲を弾じたのである。すると人の気配がして膳を運んで来て、「さあ召しあがれ。」と云ふ。気味が悪いが座頭も逃げもならず、愈々度胸を据すゑて食事をとつたが、空腹でもあり、且つ相当の御馳走でもあり、充分いただいて有難く謝意を陳のべて、やがて木の根を枕に睡眠したが案外に美睡し、眼の覚めたときは夜も

ほのほのと明けわたる頃ほひであった。そこへ一人の獵人が来合せて事情を訊き、山麓の里まで案内するからと親切に手を引いて呉れた。ところが、全く夜が明けて山里に近づくと、其処へ通りかゝった柴刈の子供が二三人大きな声で、「おゝ、あれを見よ、あしこに座頭が狼の尻ツ尾をつかまへて出て来た。」とわめき立てたので、案内役の獵人は、いや狼は飛んで山中に姿をかくした。座頭は柴刈の子供に連れられてその里の豪家へ行つて事情を話すと、その主人はまた驚いて、「いやそれでわかつた。實は昨夜子供が神憑りになつて、吾れは此の山の神だ、珍客があるから大急ぎで食事を一人前こしらへて前庭の拝石の上に運んで戸じまりをして寝よ、とのことで疑ふのもどうかと思つて、俄かにその通りの用意をしたのぢや。」といふのであつた。

(感想)

世にも不思議な物語りである。あの小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が著した『怪談』の中の「耳なし法一」の話を思ひ出させる。人間界と靈界との交流を描いてゐる。

ここに出て来た靈は狼であり、十分に人間になりすまして、これだけの事をやつてのけ

るしたたかな霊だ。狗も狐も狸も霊を持つてゐる。しかし人間は万物の霊長と云はれる通り獣とは位が違ふ。最高の尊い霊を持つてゐる事を忘れてはならない。動物霊の邪霊どもに、たぶらかされてはならない。じつくり腰を据えてかゝらねばいけない。人は神から与へられた霊をミソギハラヒにより鍊へ、鋭ぎすまし、神代ながらの尊い神霊に導かれ、つながるやうに努力せねばならぬと思ふ。

(昭和五十九年二月十六日)

身の死すを恨まず、心の死するを恨む

大塩平八郎

割り切れないもの

友清 磐山著 『続春風遍路』より

例の方丈記で知られた鴨長明の書いたものにこんな話がある。

或る坊様が琵琶湖畔（瀬田か石山辺であつたらう）をあるいて京へ帰るときに威勢よく漕ぎ寄せた漁船がある。中にはびっくりするやうな巨大な鯉が元氣さうに横たはつて居る。坊様が慈悲心を起して助けてやらうと思つたが、金の持ち合せがないので行李こよりの中の小袖を売つてその鯉を買取り琵琶湖へ放してやった。ところがその夜の夢に、冠を著けた老人が現はれて、「自分は昨日あんたに助けて貰つた鯉だが、あんなことをせられた為に自分は非常に迷惑した。」といふのである。そのわけを坊様が聞いてみると、「自分はある罪業によつて長年の間、鱗属うろこに墮おちて居たが、やうやく時節が到来して、昨日はあの漁師どもの網にかかつて、糺ただすの森もり（現在の下賀茂神社）の神供になつて鱗属を脱

することになつてゐた。そこへ運悪くあんたが通り合はせて、あんなことをしてくれたから、また数年間湖水に居らねばならぬ。」といふのである。坊様としては、小袖まで売つて、怨みごとを云はれたりしては、算盤そろばんに合はぬことであるが、人間の考へといふもので、——人間の眼でみることも、耳で聴くことも限られてゐて、せまい波動の中に蟄居ちつきよして居て、一つのイズムを絶対的なものと思ふのは滑稽こっけいである——割り切れないことはたくさんある。「思惟する人間の美しい幸福は、探究して得るものを探究した上は、探究し得ざるものを静かにながめることである。」といふゲエテの言葉こそおだやかなものであらう。

(感想)

神の世界はまさに天衣無縫にして、たくみなく広々たるものである。そこには到底人智ではかりしれないものがある心地がする。神界の経倫（政策）といふものを垣間見る思ひである。人は一般に道德律を守るべきものとして単純に考へるが、神の目より見た時は逆の場合もあり得るのだ。この事を知り、人はますます謙虚に道を踐まねばならぬ

と思ふ。独善は危険である。人間の限られた智慧でわからぬ割り切れぬものがある事を知る事、そして「静かにそれをながめる事」が生きて行く上に必要であることを教へられる。

(昭和五十八年十一月十八日)

宝暦五年六月、豊後の国中島郡池泉寺門前の砂の上に詩
歌を落書して斃れて居た乞食の女があつた。

漸く乞食界を去つて、今日上天に昇る

捨つ破れ簔かみと破れ笠とを

暁夢寺門の前

「泥舟随筆」より

人間の二面性

友清 歡真著 『春風遍路』より

ミラノのお寺にある「最後の晩餐」の図は、申すまでもなく、ダ・ヴィンチの名作で世界的な宝物の一つであります。これを描きかけたのは一四九五年ごろで、まづその図の中のキリストのモデルをさがすのに骨を折り、漸く或る教会で歌手をしてゐた青年を見つけて、これだと直観して、それをモデルにして描き上げ、あとの十二人の弟子たちも殆ど描きましたが、主殺しであり守銭奴であるユダのモデルがなかなか見つからず苦心して年月を経、やうやく或る日に、場末の街角に坐つてゐる乞食こじきの中に、邪悪そのものの魂ひの浮び出たものを発見して、これこそユダのモデルだと僅かの金を与へて引張つて自分のアトリエへ伴ひ、このモデルを見つめてゐたダ・ヴィンチは愕然がくとして驚いて絵筆を取り落しました。なんと此の男こそ、かつてキリストのモデルになつた青年

歌手で、彼は其後に道楽に身を持ち崩して、そのなれの果ての姿でありました。

偉大なる靈感的天才、ダ・ヴィンチにさへも、これほど大きな、これ以上のないほどの観察のまちがひがありました。いや、この大天才のまちがひではなく、モデルの青年の变色でありませう。しかしそれにしても、魂ひの奥まで見ぬくダ・ヴィンチに此の皮肉な場面があることはいろいろの意味にて深く考へさせられるところでありませう。あしたにはキリストとなり夕べにはユダとなる。この青年歌手は俳優ではないのであります。

(感想)

キリストの相を宿した青年が本物か、それともユダの相を宿した青年が本物か、実に考へさせられる課題と思ふ。この二つの相反する人格が一人の人間の中に混在するから人間ほど複雑なものはない。この二つの相はどちらも真実であり、ダ・ヴィンチの目にはくるひはない。たゞ神のみ守りを祈るのみである。

(昭和五十九年五月二十日)

一切唯心造

『友清欽真全集』第二卷より

唐の文明元年洛陽に王氏（明幹）といふ人が病死して幽界の旅程に入り、まだ勝手がわからぬので淋しい野を歩くともなくあるいて行くと、どこからともなく一人の僧形そうぎやうの者が出て来て（いはゆる此の王氏の守護神だ）、

「余は汝に少々因縁いんねんあるものぢやが、汝は生前の業因ごういんによつて地獄へ落ちて来たのだ。業報ごうほうぢやから詮方せんかたないのぢや。これから少し往けばいよく、汝の落ちつくべき地獄がある。そこへ行つたならば、

「若人欲もしニ了知すれば。一三世一切佛。應觀法界性。一切唯心造。」

といふ偈げを唱となへよ。そしたら地獄の苦を免かれることが出来るのぢや。」と、訓しんへた。

王氏は進まぬ足を引きずつて行くと、大きな黒い門があつて、獄吏から色々の訊問を

受け引きずり廻されて大きな火坑のところへ連れて行かれた。みると天に沖する炎々たる火柱の中に、熱鉄の煮えたぎる釜が王氏の運命を物語つてゐた。兩人の獄卒が恐ろしい顔をして王氏をとらへて釜の中へ投げこもうとしたので、此の時なりと、王氏は一心に右の偈を唱へると、あら不思議や、火も消え、釜も消え、獄吏も消え、王氏みづからその苦を脱したのみならず、他の罪人等も王氏が一心不乱に絶叫した右の偈を聴いて同様にその苦を脱した。しかしこんな所でぐずぐずしてゐては、またぞろ何が出てくるかわからぬ、いづこへ逃げたものかとほとんど無分別に野原を走つてをると、先刻の僧形のものが出て来たので、王氏はかつて経験したことのない真の感謝と信頼の心をもつて、その足下にひざまづき拜んだ。しかるにその僧は、「汝の露命今少しあり、これより家に帰つて三宝を恭敬し、善根をもつばらとし、この偈を唱へまた人にも教へて唱へさせよ。余は六道の導師、地藏菩薩なり。」と言つて姿をかくした。

王氏はやがて家に帰ると思ひ、眼を開けば家の中は親族故旧等打集ひ、葬式の準備の最中であつた。が、さあ死人が三日目に蘇生したといふので一同驚喜したといふことである。やがて王氏は病氣全快後、その空觀寺の定法といふ僧を訪問して事の始終を語り、

それよりもつばら右の偈を唱へ、善根を修し、人にも教へて唱へさせ、年をへて後に安らかに帰幽したといふ話だ。(右の偈は華嚴經の夜摩宮中偈讚品の結勧の文で八十華嚴によつたので、東晋訳の六十華嚴では、若人欲レ求レ知。三世一切佛。應當如是觀。心造諸如来。となつてをる。どつちも同じ意味で要するに一切唯心造の五字なのだ。)

(感想)

この偈(ほとけの徳をほめたゝえた韻文)の意味は、過去・現在・未来の三つの世は一切み佛の世界である。この事をさとらむと思へば、この世の姿といふものは唯心の造つたものだといふ事を心でしっかりたしかめてみよ」といふ意味と思ふ。「三世一切佛」と「一切唯心造」とは一对だ。説明には百万言を要する言葉と思ふが、要するに目に見ゆるものも目に見えないものも一切が心の陰だといふ意味と思ふ。己れの心が佛の心になれば佛の姿が見えるわけだ。そこに一切の救ひがある。ひたすら慈悲心をおこし、善根を積む事を教へた言葉と思ふ。

(昭和五十八年十一月二十一日)

霊の教育

梅原 猛著 『学問のすゝめ』より

教育というものは、私は結局、たましひ霊の乗り移りであると思う。教育というものは子供にすぐれた霊を乗り移すことである。子供の時から、すぐれた人の話を聞けば、その霊が自然に子供の心に入り、すぐれた人になる。たしかに知識の伝達も必要であるが、教育というものは、たゞ知識を増すためのものではないのであり、すぐれた霊にめぐりあい、その霊の力で教育を受けた人も高い霊力をうるのが教育の真の意味ではないかと思う。

(感想)

魂と魂のふれあひが私も教育であると思ふ。人が先人のすぐれた書を読むとき、思はず感動を覚えることがある。その時は己れの魂が先人の魂にふれ、ゆり動かされ、昇華

せしめられたのである。これが広い意味の教育と思ふ。たましひとたましひのふれあひなくして感動は生まれぬ。少しでも良き人の書を読み、良き人の話を聴いて、すぐれた魂に出会ふことが大切だと思ふ。人の一生は出遭ひによつてきまるとも云へる。

(昭和五十九年一月八日)

「夫^そレ教育ハ建^こ国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和熟ハ育英ノ大本ナリ」

夏目 漱石

副島種臣風伯に祈る

谷本 富氏の言葉より

明治七、八年の頃、四谷に大火のあったことがある。畏れ多いことには、当時赤坂に
仮皇居があったが、それがちやうど風下にあたったので、火の子を浴びるといふ騒ぎに、
諸人色を失つて恐懼おくところを知らなかつた。

その時、明治維新の老臣副島種臣伯、ひとり従容として少しも驚き騒がず、衣冠束帯
の儀装いかめしく、きつと街頭に仁王立ち、風上に向つて恭々しく一通の祝詞をさづけ、
風の神を叱咤して曰く、

「よろしく謹慎して、敢へて宸襟（天皇陛下のみ心）を悩ますこと勿れ」と、
声を励まして、懇々祈禱をこゝろみた態度は、実に神々しく冒すべからざるものが
あつたといふ。

やがて天もその誠意を感受してか、風も凜いで、火も鎮まった。

このやうな事を狂言でなく、誠心誠意でなし得たところに、副島伯の一徹生真面目な人格があつたのである。

(感想)

これは郷土佐賀の生んだ明治維新の元勳副島種臣伯の逸話である。副島伯の御皇室を思ふ深い真心あふれた姿にたゞ心うたれる。風の神様を叱るこの威厳、威容は、なみたいていの人のまねできる事ではない。こゝに深き信仰の人、副島種臣伯の一面を見る思ひがする。これも至誠のしからしむるところである。外から見ればまさに狂人の態に思へたかも知れぬ。しかし止むに止まれぬ真心の発するところ、天地の神をも感應して止まぬ祈りが捧げられ、それが通じたのである。まさにその姿は鬼神をもおそれさせた姿であつたであらう。副島伯こそは神を見、神を知つた人である。常人を絶した神人とも云ふべき人であつたと思ふ。

(昭和五十八年十一月二十四日)

千里巡拝行脚の旅

影山 正治著 『千里行脚の記』より

かの日、大陸戦陣の老一兵として終戦の大詔を拝し、一たびは抗戦持久を期し、次で自決殉難を思ひ、三転わづかに生死を越え、敗戦これ神慮、再建また正に神慮、獄なれば獄に、死なれば死に、生なれば生に、一念ただただ神のまにまにわが精魂の限りを天朝護持の一道に捧げ尽さむのみと信受した。それよりおよそ一ヶ月、始めてほのかに大東塾十四士自刃の悲報を伝へき、萬感無量、若し生きて再び故国の地を踏むこともあらば、山河千里必ず歩行してその靈前に巡拝し、且つは併せて諸方大社に祖国再建維新の祈願籠めまつらむことを期した。

翌二十一年五月、敗残の身、肅として再び故国の土を踏み、まづは焼亡の家郷に氏神社と祖先、亡父の墓前を拝し、次で惨たる皇都に惨たる皇居、明治神宮並びに靖国神

社ををろがみ、更にはまた伊勢の大宮の大前に額づき、ねむごろに「かへりごとまをし」のこゝろを行つたのであるが、それより一年、追放赤貧のうち、道友とそぞろに心身を刻み、ほゞ身辺、護道の整備を了し、また祖国大勢の向ふところを覚つた。神機熟するところ、四月二十六、七、八の三日間諸友と第一回宮中勤勞奉仕を仕へ、翌二十九日天長の嘉節を選び、つひに千里巡拝行脚の旅に出発することとはなつた。

(感想)

大東亞戦争の敗戦といふ厳肅な事実に向ひ、眞の日本人の生きていくべき道をお教へにいただいたお言葉である。私の敬仰して止まぬ、今は亡き 影山正治先生の萬感溢るゝ思ひが切々と伝はってくる。この言葉を拝する時、思はず肅然として身のしまるを覚え、日本人の心の中心はまさにこゝにある。則ち一切を神慮とかしこみ、天朝護持に身心を捧げ尽くす事である。これが日本人の心の原点であり回帰点であると思ふ。これより他にまことの日本人の歩むべき道はない。一言一言に先生の面目躍如たるものが現はれてゐる。このみ心を持って生涯を貫き、昭和五十四年五月二十五日、元号法制定を祈

念して東京郡青梅市に於て自刃なされた。享年六十九歳であられた。み言葉をつゝしみ、後につづかむ事をお誓ひするのみである。

(昭和五十八年十一月三十日)

少くして学べば^{わか}壮にして為すあり

壮にして学べば老いて衰へず

老いて学べば死して朽ちず

佐藤 一斎 著「言志晩録」より

占領政策と戦後の日本

安岡 正篤著 『活学』 第三編より

占領軍の日本にとつた政策で、日本にとって何よりもこたえたのは、外科的な政策よりも、内科的な政策でありました。主なものを拾ってみますと、

先づ第一に、明治憲法を廃止して、天皇を国家の元首から国民統合の象徴に規定したこと。

第二に、教育勅語を廃止して、神道を国家皇室のみならず、学校教育から切り離してしまつたこと。そのために教師は学生・生徒を連れて神社に参拝することも出来なくなりました。

第三には、日本の学校教育・国民教育から、修身、歴史、地理といったものをすべて追放して、民族を骨抜きにする教育をやりました。実に考えたものであります。そうし

てその上に、アメリカン・デモクラシーを注射したわけです。

尚^{なほ}、その外に、思想・言論の代表機関であるマスコミに対しては、それらの政策・要求に応ずるような人間、すなわち左翼的な、反国家的、反民族的な人間を要所、要所に配置するように指示したり、或は産業界における労働組合は言うに及ばず、官公庁や教師にまで組合を作らせて、それらを占領政策の趣旨に基づいて活用するという、至れり尽くせりの手段・方法を取ったわけであります。外科的な疾患は治るのは早いですが、内科的に長い間かゝって発生した疾病は複雑且つ深刻である。少し油断すると、命取りになる危険さえある。日本の今日の状態は本当に憂うべきものがあります。

(感想)

これはまさに憂国の警鐘である。危いかな日本、物質的繁栄とは裏腹に、精神的重症にひんしてゐる。日々の新聞に見る悲惨な社会的事件、学校教育の荒廃は占領政策といふ毒矢にあたり、毒が全身に廻つてまさに瀕死^{ひんし}の状態である。日本に 天皇陛下ののみます事を忘れて、国民の心の中心を見失つてしまつてゐる。人のふむべき道の基本を述べ

た教育勅語を失って、やゝもすれば人はけだものになりさがりつゝある。なんとか戦前よりの生き残りの人々の活性により繁栄を来たしたが、その陰もうすくなり時代は変化しつゝある。道義の国日本と戦前云はれたその道義も地に墮ちつゝある。今一人一人が目覚めねば日本は滅びるかもしれない。よつて来たところを正して、一日も早く戦後日本の誤りのあるところを見直し元の姿に返へさねばならぬと思ふ。

(昭和五十八年十一月二十四日)

天の將まさに大任をこの人に降さんとするや、必らず其の心
志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の皮膚を餓えしめ、
その身を空乏にし、行なうこと其の為さんとする所に払
乱せしむ。

「孟子」より

ホイットマンの精神

松田 福松著 『米英思想研究抄』より

ホイットマン著『草の葉』序文に、

「此れが君のやるべき事だ、他を愛せよ、太陽を、また動物をも。蔑め富を。乞ふ者には遍く^{あまね}与へよ。愚者と狂者との味方になれ。君の収入をも労力をも他人に献げよ、悪虐者を憎め。神について議論するな。民衆に対してはどんな無理をも忍びどんな欠点をも寛容せよ。既知未知を問はず如何なる物にも膝を屈する勿れ、如何なる人にも、また如何なる多数の人間にも。逞ましい無学の人達と隔て^{へだ}なく親しめ、青年とも、また大勢の子を持った母親達とも。此の『草の葉』を君の一生の一切の年、一切の季節に野外で読め、君が学校や教科書や又どんな本からでも学んだ事をもう一度検討せよ、そして棄て、しまへ、苟も^{いやしく}自身の魂に矛盾するものはどんなものでも！」

更さらにもう一つの箇処こゝに、

「最大なる詩人は其の深慮からこれだけの事は知つてゐる。従容己が生命を賭し且つこれを喪つた青年は、實に自己にとつて有意義な生涯を送つた者である。此れに反し、瓦全を喜んで富裕安樂に天寿を保つてゐる老人は恐らく自己にとつて全く無意義な生涯を送つた者であるといふこと。それから、人生の達人とは、真に滅びない物を選び取ることを知り、肉体と靈魂とを平等に愛し、遠き物の必ず近き物に随伴し来り、我が為す善悪の諸業は悉く我を跳び越えて進み我が行く手に我を待つて対決するの日有ることを悟つてをる人、自己の精神に於いて、何時如何なる危急の場合に遭遇しても、早まつた事をせず、また死を避けることもしない人だ、といふこと。』

(感想)

こゝにはキリストの説いた精神が脈々と流れてゐる。愛と勇気を謳歌し寛容を奨めてゐる。そして借り物でなく、ほんものを握めと訴へてゐる。

一番心を打つのは次の言葉だ。

「従容己が生命を賭し且つこれを喪つた青年は、実に自己にとって有意義な生涯を送つた者である。」

ホイットマンは南北戦争で散つた青年を心に描きつゝ語つたものと思ふが、私には今次の大東亜戦争で亡くなつた多くの若者への鎮魂の言葉として聞えてくる。

さらに、「瓦全を喜んで富裕安楽に天寿を保つてゐる老人は恐らく自己にとって全く無意義な生涯を送つた者である。」

全く戦後の日本人の理想とする生活は、これになり下がつてしまつた。多くの者が己れの生命を全うすべき場所を見失つて、たゞ生きてゐる。深く反省させられる言葉と思ふ。

ホイットマンの言葉は生命にあふれてゐる。生き生きしてゐる。真に滅びないものを指向し、そして擲んだ哲人の言葉として私の胸を打つて止まない。

(昭和五十九年三月十三日)

土肥慶蔵博士の言葉

平泉 澄著 『明治の光輝』より

大学数授としての私の講話は今日と二十四日とが最終である。此際何か学生諸君の為に一言しろと鉄門会長からの御勧めである。然し前申しした通り、私は変則な教育を受けた浅学菲才の人間で、とても諸君の益になるやうな話はできぬ。已むなくば只一言せん。若い学生時代と云ふものは兎角に煩悶はんもんがちである。卒業したらばどうしやう、何を専攻したら成功するだらうと。然しそれは一切無用である。私は諸君に勧めたい、学生としては只学生としての自分の最全を尽せ、学士となり助手となつては亦また、学士たり、助手たる自分の最善を尽せ。而して己れの好む所に向つて直往せよ。私は信ずる、「人間の運命の一寸先は闇である、然し努力の頭上にはいつも明星が光る」と。孔子は少うして家貧しく、出でて委吏まじとなつた。米倉の出納役のことである。而して何時も榘目まじが正しかつ

た。又嘗て司職かつとなつた。それは家畜の監守である。而して何時も羊豚が好く蕃殖した。只それ「職務に忠実」であれ、是が人間出世の最大要訣である」（中略）

かやうに述べて来られた先生は、次に極めて重大なる教訓を与へられた。曰く、

私は今の青年諸君の多くとは思想が隔絶して居よう。私は国家主義の男である。国興つて文化あり、国衰へて文化亡ぶ。今のスペインやポルトガルには名ある学者が出ぬのである。独逸、オーストリアや諸国の医学すら大戦後（第一次世界大戦）は戦前に比して著しく振はぬではないか。殷鑑イシカンは実に遠からぬ。我等は戦争を好まぬ。将来の戦争は国を挙げて焦土に化する。然し我等は戦争を怖れてならぬ。戦争を怖るる国は亡びる。さうした民族は奴隷となる。そこに何の文化が芽ばへよう。何の自由の花が咲かう。従つて国家は一日も国防を怠つてはいかぬ。敵国の侮を受けて然る後に戦争が起るのである。

注 皮膚科の権威土肥慶蔵博士は慶応二年（西曆一八六六）六月、福井県武生に出生、

明治十三年、十五歳にして上京、全二十四年、二十六歳にして東京帝国大学医学部を卒業、

全二十六年、欧州に留学、全三十一年、帰朝して東京帝国大学助教、教授を経て、大

正十五年、停年にて退官、昭和六年十一月、六十六歳にて歿した。

(感想)

特に後半のお言葉に心を打たれた。国を思ひ、国を憂ふる心に満ち溢れた明治の学者の言葉である。明治の精神の輝きがこゝにある。国が亡びて、何の文化、何の自由があらうか。国防こそ今日の日本が最も必要とするものであると信ずる。戦争を好む者は誰一人おらない。しかし止むを得ず戦つてきた国々、また現に戦つてゐる国々のある事に目を覆ふことは出来ない。国防を忘れて敵国の侮りを受ける状態は、裏をかへせば戦争を誘引することになりはすまいか。戦争を好まぬなら、しっかりと軍備を持ち、敵の侮りを受けない国にしなければならない。敵の恫喝どくわくにあつて戦争を怖れてはならない。それより以前にしっかりと国防を持つ事である。日本の文化、伝統を守る道はこれ以外にはない。まさに先生のお言葉は現代日本に与へられた頂門の一針であると思ふ。

(昭和五十九年四月二十三日)

獵師と老婆

友清 磐山著 『読春風遍路』より

広い深い暗い森の中で、道に迷った一人の獵師は全く困惑してしまった。どうにもすることが出来なくなつた。流れは浅いけれど向ふの岸が見えないほど霞かすんだ大きな川のところで、石に腰をかけて、もう何の希望も勇氣もなくなつて、つくぐくと少年時代からの無意味な努力を反省してみた。山林の動物の若干のものを殺しただけのこと、それが結局なんであらう。——獵師はサルトルを読みそこねた実存主義者みたいな絶望に取りまかれて、ぼんやり大きな川の流れを見入つて居た。すると誰か、うしろに人の来た気はひがするので、振り返つてみると、やつれ果てたよぼくのお婆さんである。

ぞつとしたけれど、どうせ今や絶望の淵の底に居て、恐ろしいものがないやうな気持ちの獵師だ。気分を静めて話し出した。ぼろぼろのきものを来たお婆あさんは、どこか

に昔の生活の気高さがあるやうにも思へないこともないが、何しろ高齢で、百歳以上かと思はれるほどで、わづかな風が吹いて来ても倒れさうに衰へてゐた。そのお婆あさんが云ふことには、自分は元来この川の向ふの国のものぢや。そこは常春とこはるの楽園で何ひとつ不自由のない平和な仙境ぢやが、自分の体力では此の川を渡ることが出来ない。お前は私を負ふてこの川を渡りなさい。さうすれがお前も幸福になれるといふのである。

獵師は考へた。このお婆あさんが、よしや狐や狸であるにもせよ、ともかくも衰弱し切つて居り、このままでは死んでしまひさうだ。かかり合つた因果だ、ひとつお婆あさんの希望通りに、やれるまでやつて見ようと決心して快諾した。お婆あさんをおんぶしてみると何と気もちの悪さ、それに驚くほど重いので、これをおんぶして対岸までに流れを横ぎつてあるけるかどうか確信はないが、まあ一たん引き受けた以上やれるまでやると覚悟して川を渡り始めた。すると不思議なことに段々とお婆あさんが軽くなつてどうやら向ふまで辿たどりつけさうになつたが、何しろ衰弱し切つてるお婆あさんがそれまで息を引きとらねばいいがと心配した。「お婆あさん、しっかりおしよ。この辺で、あんなの骨がばらばらになると、流れの中で骨を拾ひ集めるのが難儀だぜ。」獵師は冗談を言

ひながら、自分で自分に勇気づけつつ渡って行った。

やうやくにして対岸に辿りついて、肩からお婆あさんを地上においたとたん、それこそ獵師は大地へ尻餅をつくほどびっくりしてしまった。お婆あさんと思つたのは花のごとき、といふよりも、花よりも美しい少女で、目もさめるやうな美服をつけて居り、にこやかに一笑して獵師を案内して行った。それは言葉につくせない麗らかな仙境で、楼台から往来の人々、生活資材万端から総べてのものが美と善意とのかぎりがつくされたもので、むろん獵師はそのまゝその居住者になつてしまった。

(感想)

これは、ロシアの偉大なる哲学者ヴラジミル・ソロヴィエフの書いた随筆の中からとられた寓話であると著書に書かれてゐる。森の中をさまよつてゐる獵師こそ、我々人類であり、うしろに立つた老婆は、その国々の古き良き伝統を意味してゐる。

戦後の日本は、神話を忘れ、伝統をうとんじて、まさにさまよひ歩いてゐる。老婆——古い伝統・文化——こそは、その中に若くて、みづみづしい少女の如き生命を宿してゐる。

その国の精神を支へ、汲めども尽きぬ生成発展の生命はまさに伝統の中にある。そこに培はれた文化こそ子孫がうけ継ぎ守り抜かねばならぬものである。戦後日本は一日も早くそこにたちかへねばならぬと思ふ。

(昭和五十八年十一月三日)

上杉鷹山公。藩祖の命日に蜆を買へる家臣の妻あるを高台より望み見て心中に疾む。此の婦人は其れを買ひて河に流し、ひそかに藩祖の冥福を祈れるなりき。世間これに類すること少からず。

友清歆真著 「山姥乃穴」より

アインスタインの言葉

友清 歓真著 『古道神髓』より

近ごろ日本の発展ほど世界を驚かしたるものなし。その神秘的なる発展力の底には、何か他国と異なるものなからざるべからずと思ひしに、日本の歴史はそれなりき。その三千歳の歴史が一系の天子を戴くといふ、絶類の国体くにがらこそは日本を今日あらしめたるものなりき。余は、此の地上に於て、何処か一国だけはかかる尊き国体を有するもの無かるべからずと思惟し居たりき。世界は進み、且つ進み、戦ひ、且つ戦ひ、最後は疲労の時期に到達すべし。然る時に於て、地上人類は必然真実の正しき平和を要求して、地上の盟主を仰ぎ求むるならむ。その地上の盟主たる資格は、武力にあらざ、金力にあらざ、萬国の歴史を超越したる最も古くして、最も尊厳なるものたるを要す。

注 アインスタイン（一八七九—一九五五）ドイツ出身の理論物理学者、光量子論・相

対性理論の開拓者。

(感想)

これは昭和の初め頃の話と思はれるが、日本の事を日本人より外国人が客観的に正しく見てゐる場合がある。これもその一つと思ふ。灯台もと暗しの感がする。一系の日本の御皇室の存在を、心ある外国人がうらやましく思つてゐるといふ事も聞いた事がある。武力や金力によらず、たゞ国民を思ふ心でずっと皇位をつゞけてこられた事実を私達は忘れてはならないと思ふ。戦後、変つたのは国民の心であり、陛下のみ心は戦前も戦後も變つておられない。外国人に指摘されるまでもなく、ほんとに世界の盟主と仰がれてよい御存在と思ふ。私達はこの伝統を子孫のためにも守り抜かねばならない。真に世界の平和を願ふ人の言葉として、心に留めておきたい

(昭和五十九年五月三十日)

俗中の真

小林 秀雄著 『考へるヒント』より

彼（契沖）は、世間せけんから離れて、古い言葉の姿の吟味に没頭してゐた人だが、晩年、自分の家で、万葉の講義を開かうと思ひ立つた。世事多端で、残念ながら聴講出来ぬと言ひよこした人に、言ひ送った。「あはれ御用事等何とぞ他へ御たのみ候而、御聴聞候へかしと存事候。世事は俗中の俗、加様かやう之義のぎは俗中の真に御座候。」

（感想）

これは契沖が或る人へ書き送った手紙の一節であるが、冒頭の一句、「あはれ」（あゝ情ない）といふ一言に、契沖の万感こもる思念を感じる。自分の深い思ひが通じない情なさであらう。そして最後の「加様之義は俗中の真に御座候」と結んだ言葉に、我が思

ひを一気にこめた気迫を感じる。「俗中の真」に迫った契沖の感慨に圧倒される。契沖は人も知る近世国学の祖である。この万葉の講義に老の生命を賭けたに違ひない。この短い一節の中に契沖の全人格と、学問に対する並々ならぬ情熱を読みとる事が出来る。人は俗の中にあつて俗にあへいでゐる。さういふ暮しの姿に警鐘を鳴らして止まなかつた。

「石の火を放つは、石の中に火の性があるからだ。」といはれてゐる。しかし石と石との激しい触れあひがなければ、火は発しない。人の学問も魂と魂のふれあひがなければ、真の学問は成り立たない。まさに契沖の講義の中にはそのふれあひがあつたと思ふ。万葉の古い言葉の姿を通して、古人の魂とのふれあひがあつたに相違ない。真は真事であり信に通ずる。こゝに契沖の学問に対する大いなる信念があつたと思ふ。

(昭和五十八年十月二十四日)

平常心を失はぬ事

谷川 徹三著 『雨ニモマケズ』より

江戸時代の末に近い頃、朝鮮から幕府に使節が来るのを迎へるため、時の大学頭、林述齋が対馬まで出向いた時のこととあります。博多から対馬に行く途中嵐に遭つて、いまにも船が覆りさうになつた。船中の人たちは、うろたへたり、騒いだり、あるひは汚い物を吐いだり、さんざんのをいたらくであつた。さういふ中で、松崎慊堂——述齋の弟子で漢学者として後に名をなし、渡辺華山がその肖像を描いてゐる人——その松崎慊堂は、年少気鋭の時でありましたので、ひとり舳に立つて詩を吟じ、意気軒昂たるところを示してゐたのでありますが、ふと師匠の述齋はいまどんなにしてゐるだらうかと、その船室に行つて見ますと、述齋は室の中で一人静かに本を読んでゐた。慊堂は我が意を得たとばかり、先ほどからの意気軒昂たるところを見せて、

「先生、実に愉快ではありませんか、これでもしも、江南の地（現在の中国）にでも漂着したら、彼の地に於いて文人、学者と会談し、先生の学識を広く宇内に認めさせることもできるといふものです。」

船が唐土へでも漂着した時のことを想像して気焰きえんを揚げたのであります。すると述齋は、慊堂をジロリと見て、

「お前は少し気が変になってゐるな。事に臨んで強きに変ずるのは、弱きに変ずると五十歩百歩だ。自分はたゞ与へられた任務を完まつたことをのみ願つてゐるのだ。」

（感想）

最後の言葉「自分はたゞ与へられた任務を完まつたことをのみ願つてゐる。」この林述齋の言葉が深く心を打つ。嵐の中にあつて泰然自若、一人静かに書を読んでゐる述齋の姿が、映像の如くはつきりまぶたに浮んでくる。どんな環境にも動じない、内に気力充滿した人の姿だ。人はかくありたい。非常の際にも平常心へいじんしんを持もつ事ことの出来る人になりた
い。それには常日頃の修養努力が必要と思ふ。

（昭和五十八年十二月九日）

人間が一生涯とり守るべき言葉

諸橋 轍次著 『古典の叢知』より

宋の時代の大学者に司馬温公といふ人がをりました。この人の門人に劉安世りゆうあんせいといふ人がゐました。この人が司馬温公のところへ行きまして「人間が一生涯とり守るべきことばがあるならば教へてもらひたい。」と願ひ出た。すると、それに対して司馬温公は言下に答へた。「それは誠である。誠の一字こそは人間終生とり守つても一つもまちがひがない。」と、教へたのであります。そこで劉安世がさらに質問を發しまして「しからばその誠に入る道の第一歩はいかにすることか。」と言つたところが、「妄語せざるより始まる。」と教へました。妄語といふのは妄みだりのことばである。妄りのことばを言はない。でたつめを言はないことから始まる。とかう教へております。つまり誠に入る道は、うそを言はないことから始るといふのであります。うそを言ふといふことは人を偽ることでありま

す。人を偽らない、それが誠に入る道であると教へております。

(感想)

「うそを言はない」といふ事は三歳の童子も知つてゐるが、六十になつてなほかつ実行の難しい事である。昔より嘘は泥棒の始まりとさへ言はれてゐる。人のもつともきらつたものである。うそをつかぬことが誠への第一歩であるといふこの教へは実に尊い。人の一生の指針である。「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり。」(中庸)と説かれてゐる。たゞ平常うそやいつはりのない誠の世界に一步でも近づくべく努力したいと思ふ。

(昭和五十八年十二月十四日)

学問をする心得

平泉 澄著 『萬物流轉』より

某氏は明治三十五、六年頃、幼年学校在学中、日曜ごとに根本通明博士の門をたゞいて、その教を受けたのであったが、初めて門に入って漢学を習ひたしと願出た時の博士の言葉は左の通りであった。

「漢学を習ふつもりか。それならば第一に支那の思想と日本の精神との根本の相違を明かにしなければならぬ。それは何であるかといへば、支那に於ては「天下は万人の天下なり、一人の天下にあらざるなり。」といふ考へであり、之に反して我が国は「天下は一人の天下なり、万人の天下にあらざるなり。」といふのである。これが支那と日本との根本の相違である。相違が分ればよし、分らなければ漢学は百害あつて一利なし、むしろ学ばざるをよしとする。これから一週間の間、よく之を考へて来い。分れば漢学を教

へてやらう。」

是に於いて某氏は、深くこの問題を考へ、十分に之を理解して、一週間後、再び博士を訪ひ、

「先日の御話はよく分りました。どうか漢学を教へていただきたくござります。」と乞ふたところ、博士は之に対して、

「さうか、分つたか、それならば教へてやらう。ついては、学問をするのは、『朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。』この精神でやるんだぞ。」と云はれたさうである。

注 根本通明博士——号羽嶽、文政五年（西曆一八二二）二月十五日、秋田県に生る。

明治二十九年十月東京帝国大学教授に任ぜられ、漢学、支那語学を教授する。明治三十九年十月卒。享年八十五歳。

（感想）

此の根本博士の言葉はまさに学問の根本にかゝる言葉と思ふ。中国は古来、易姓革命の国であり、天下は万民のためにあつた。日本は昔より万世一系の天皇を上に仰ぐ国

であり、一君万民の国である。こゝをはき違へてはならない。戦後、占領軍の政策によりこの君民の關係が断ち切れやうとしてゐるのはまことに悲しい。主権在民の名のもとに、この伝統ある国柄が消えつゝある。本を失つた世の中となつてしまった。世の中の乱れの最大の原因はこゝにあると思ふ。本が立つて始めて末は成り立つ。学問も政治も教育もこゝを忘れてはならない。

なほ、「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」は有名な孔子の言葉であるが、学問を志す者の心構へは、この言葉に尽きる。生命がけて学べと云ふ事だ。云ふべくしてなかく、難しい。学問は一生の仕事と思ふが、これは人の心の中に永遠に生き続ける言葉と思ふ。

(昭和五十九年一月二十一日)

佐藤一斎ほどの老大家、幾百回となく講義せしものをさ
らに少年の為に講ずるにも、必ず其の前夜綿密に講義の
準備工夫を怠らざりき。

友清 歆真著 「山姥乃穴」より

鍋島平五郎の精忠

副島 蒼海講話 『精神教育』より

昔、肥前に、鍋島平五郎といふ偉い家老があつた。すこぶる豪傑の名のある人で、その家の宗旨は、日蓮宗であつた。一日、墓参した所が、その寺の和尚が「日蓮宗でなければ、極楽には往くことは出来ませぬ。他宗は地獄でござる。」と言つた。そこで平五郎曰く、「愈々其通りでござるか。」和尚曰く、「愈々その通りでござる。」平五郎曰く、「然らば我が鍋島の君公は禅宗であるによりて、地獄へ行つておられるであらう。よつて自分^{自分}は改宗をしたい。禅宗になりたい。」と云つた。そこで和尚は驚いて、「どういふ訳でそれに改宗すると仰せられるや。」と尋ねた。平五郎曰く「鍋島の君公の為に禅宗になつて、地獄へ行きて閻魔王^{えんま}に会つて、申し開きをせねばならぬ。自分ばかり極楽に行き、君公が地獄に往つて居られると救ひやうがない。」と言つた。忠義と云へばさういふやう

なものである。

(感想)

これは「葉隠」の中の一つの話である。鍋島武士の面目躍如たるものがある。鍋島武士の御奉公は「たゞ御家のため」であつた。寝てもさめても殿様への御奉公が使命であり、徹底した精忠であつた。そこに純粹無垢（まがら）の清らかさを覚える。全く功利を考へないところに現代人の心を引きつけて止まないものを感じる。「葉がくれ」は郷土佐賀の誇りである。時はうつつてもこの心は残していきたい。

(昭和五十八年十一月五日)

石田梅巖の心

大川 周明著 『日本精神の研究』より

元文三年夏（西暦一七三八年）のことである。大旱打続きで上下雨を乞ひ、石田梅巖も毎日齋戒沐浴して雨を祈って居た。然るに七月二十一日に至り、沛然として大雨が降つたので、貴賤の喜び言語に尽し難きものがあつた。その時、梅巖の諸門人は、師の宅に近き一門人の家に集り、梅巖を請待して祝宴を催したが、そのうち颯と風が吹起つた。すると梅巖は俄に顔色を変へ、暫時、我が家に帰り直ぐまた出直して来ると言ひ捨て、あつ氣にとられる門人どもを後にしてさっさと出て行つた。程なくして梅巖はまた門人の会に帰つて来た。諸門人は口々に火急のご帰宅は何のご用であつたかと問ふた。梅巖が云ふには、

「大雨の時に、もし大風吹き起つては、農作物は非常に害を受け、折角の喜雨も無駄

になるので、自分は心配に堪へ兼ね、家に帰へつて沐浴して祈りを凝らして来た。」と。

注 石田梅巖（西暦一六八五—一七四四）江戸中期の心学者。

（感想）

「真の人、石田梅巖」を身近に見る思ひがする。早天の時には庶民と共に憂ひて、雨あま禱ごひをし、ひどい風が吹けば農民と共に心を痛めるまことの心が実に尊い。世の中には己れ一身の利害のために神に祈る人は多い。しかし同胞のために神に祈る人は少ない。石田梅巖は人間のまことの祈りの念が必ず神明に通じる事を信じてゐた人と思ふ。そして瞬時も農民の事を忘れぬ心は、門人達の思ひもつかぬものであった。それ程思ひは深く、真剣であった。心の師とする人物と思ふ。

（昭和五十九年一月二十六日）

凶歳を救ふ道

福住 正兄筆記 『二宮翁夜話』より

翁曰く、天保四年（西暦一八三三年）同七年（一八三六年）もつとも甚し、早春より引続き、季候不順にして梅雨さみだれより土用に降り続き、季候甚寒冷にして、陰雨曇天のみ、晴日まれ稀なり、晴ると思へば曇り、曇ると思へば、雨降る、予、土用前より、之を憂ひ心を用ひしに、土用に差掛り空の気色何となく秋めき、草木に触るゝ風も、何となく秋風めきたり、折節かじ他より、新茄子なすび到来せるを、糠味ぬかみ噌そに漬て食せしに、自然秋茄子なすの味あり、是によりて意を決し、その夕より、凶歳の用意に心を配り、人々を諭さとして、その用意を為さしめ、その夜終夜書状を作りて諸方に使を発して、凶歳の用意一途に尽力したり、その方法は明き地空地はもちろん、木綿もめんの生立おひたる畑つぼを潰し、荒地廢地を起して、蕎麦そば・大根・蕉菁かぶら・菜な・人蔘にんじん等を、十分に蒔まき付させ、粟あわ・稗ひえ・大豆等すべて食料になる

べき物の耕作、培養、精細を尽くさせ、また穀物の売物ある時は、何品に限らず、皆之を買入れ、既に借入れの抵当なく貸金の證文を抵当に入れて、金を借用したり、この飢饉きんの用意を、諸方に通知したる内、厚く信じてよく取り行ひたるは、谷田部茂木領邑もてきなり、この通知を得るや、その使と同道にて、郡奉行みずから馬に鞭打むちちて来りて、その方法を問ひ、急ぎ帰りて郡奉行代官役等、属官をひきゐて、村里に臨み懇々説諭して、まづ木綿畑を潰し、荒地を起し廢地をあげて食料になるべき蕎麦そば・大根の類をまき付けたる事おびただしく、堂寺の庭迄も説諭して蕎麦・大根をまかせたりと云へり、下野国真岡近郷は、真岡木綿の出る土地なれば、木綿畑もつとも多し、その木綿畑をつぶして蕎麦をまき替ふるを愚民ことの外歎く者あり、また苦情をならす者あり、よつて愚民あきらめのため、所々に一畝せづつ、もつとも出来方のよろしき木綿畑を残し置たるに、綿の实み一つも結ばず、秋に至りて初めて予が説を信じたりと聞けり、愚民の論ぎとし難きにはほとんど困却せり、また秋の田を刈り取りたるに干田に、大麦を手の廻るだけ多くまかせ、それより畑にまきたる菜種の苗を、田に移うつし植ゑて、食料の助にせり、凶歳の時は油断なく、手配りして食物を多く作り出すべし、是予が飢饉を救ひし方法の大略なり。

(感想)

戦後は有難い事に、飢饉に餓死するといふやうな凶作の年もなく、平穩無事に過させていただいてゐる事に深く感謝したい。しかしいついかなる時に、この天保の年のやうな凶作の年が来るかも知れない。油断は禁物と思ふ。それにしても、夏に新茄子なすびの糠味ぬか噌漬を喰べて、秋茄子の味を見出し、ただちに凶歳の準備をした尊徳先生はまことに偉いと思ふ。「天地の不書の経文を読み、誠の道に徹する」とふだん述べられてゐる尊徳先生にして始めてなし得る事と思ふ。現代はビニール栽培で季節感もなく、さらに種々の調味料等で私達の舌の感覚は全くマヒしてゐる。その時々しゆんの旬のものを味はつて始めて季節感はある。尊徳先生の味の感覚、そして直ちに凶歳を予見する叡智は常人のものではない。常に天地自然と共に生き、その御恵を感謝して生きてゐる方にして始めてなし得る事と思ふ。この誠の人こそ私達の師であり、日本人の忘れてはならない人と思ふ。

(昭和五十九年五月十日)

一日接すれば一日の親愛生ず

幡掛 正浩著 『食國をすくに天下のまつりこと』より

明治十年（西曆一八七七年）の役にて、豊前（大分県）中津の藩士六十三人を率ゐて薩摩軍に加はつた増田宋太郎は、最後の城山籠城まで参加し、九月四日、貴島隊の米倉こめぐら進撃に加はり戦死してしまつた。それより以前、郷土の友達の某々等に告げてこのやうに話してゐた。

「君等は無事に生命を全うして故郷に帰り、我々の赤きま心を故郷の人々にはつきり伝へて欲しい。」と。

某々等はこの言葉をとがめてこのやうに言つた。

「生きて還ることが果たして出来れば、貴方もどうして一緒に帰らうとなさらないのですか。」と。

増田宗太郎は、志をふるひ起してこのやうに云った。

「自分は此処薩摩（鹿児島県）に来て、始めて親しく西郷先生と接することが出来るやうになつた。一日先生に接すれば、一日の親愛の情が生れます。三日先生に接すれば、三日親愛の情が生じます。親愛は日にくく加はり、此処を去ることがどうしても出来ません。今は善くても悪くても、たゞ先生と死生を共にするのみです。」と。

某々等はたゞ増田宗太郎のその志に感動し、共々に涙をはらはらと流し時を移したのであつた。

（感想）

中津隊の隊長、増田宗太郎烈士の面目躍如たる言葉である。師弟肝胆相照し、心情相打ち相磨す心地がする。南洲翁に会つたその喜び、その感激が増田宗太郎の死生を決してしまつた。己が進む道の覚悟が出来てしまつた。日々に増す親愛の情はどのにもならなかつたのだ。理屈の世界を超越してみた。それはあたかも電氣にうたれた如く、また鉄片の磁石にすひつけられるやうなものであつた。人をひきつけて止まぬ南洲翁の人格

をつくづく思ふ。西南の役後、城山に眠る何百何千といふ烈士の心もまたこのやうなものであったであらう。南洲翁の偉大さに頭が下がるばかりだ。そして至誠の人増田宗太郎烈士の功績を思慕して止まない。時に僅か二十八歳であった。

(昭和五十九年二月三日)

私は生かされている野の草と同じである
路傍の小石とも同じである

生かされているという宿命の中で

せいっぱいに生きるなどということとは

むずかしいことだが、生かされているという

認識によっていくらか救われる

東山 魁夷

結縁の功德

友清 歆真著 『靈の世界観』より

或る人が帰幽して冥界に行く途中で一僧に逢つた。その僧が云ふには、このさきで冥官の館へ辿りついて娑婆における善悪の業を問はれる時「私は法華經を書きかけておいた」と答へなさいといふ。それでその男はそんな嘘を冥官の前で云へば妄語の罪を重ねるばかりでせうと不安がった。僧が云ふには、お前は私が娑婆で法華經を写して居るとき硯の水を汲んで来たことがある、その功德は尽きぬから心配なく私の訓へたやうに申しなさいといふ。そこでその男は冥官の前に出たとき右の僧から訓へられた通りを申し立てると、それならば娑婆に帰つて書写を成就せよとて放免せられた。そして冥官の館から帰る途中でまた一人の冥界に赴くものに逢つた。そこでその男へ僧の教へたことを話して、君もそのやうに申し立ててみよと訓へた。そこで二番目のその男もそんな風に

冥官の前で申し立てたら、これもまた娑婆へ引き返すことを命ぜられた。この二人の男はほとんど前後して蘇生して、写経のために紙を買ひあるく折に町で出逢ひ、互ひにその不思議を語り合つたといふことである。

この話は「元享げんかうしやくよ釈書」に出て居るのだが、石平和尚せきへい（徳川初期の傑僧）はこの話を提起して門人に質問した。最初の男はとも角として、第二番目の男はまるで嘘を申し立てたのだが、幽顕洞察の冥官がどうしてそれを許したかといふ問題である。弟子僧等は、それは善根のことは虚妄のことをいふても功德があるものでせうと答へたが、石平は、さうではないのだ、これは結縁けちえんの功德といふものぢや、前の男は我が造つた功德によつたものだが、後の男は自分造作の功德はないけれど、法華経の功德を持った人に結縁した功德によつて蘇生したのぢや、結縁の功德の大神力を知れよと垂誨すゐくわいした。

（感想）

見方によれば、世の中のすべてのものが縁により成り立ってゐるとも云へる。因・縁・果と佛教では教へてゐるが、原因と結果の間の縁は見のがす事が出来ない。父と母があ

り、その縁により私は生れてゐる。縁ほど不可思議なものはない。神道では、むすび（産霊・結霊）と説いてゐる、たましひとたましひの結びであり、それより一切のものが生ずると教へてゐる。私達はこの縁を大切にし、常に感謝せねばならぬと思ふ。自分一人では生きてゆく事が出来ず、すべてまわりの人の助けにより生きてゆく己れと知れば、この他の人々との縁ほど有難いものはない。まして深い功德のある本や、人と結縁することに恵まれることほど有難い縁はないと思ふ。

（昭和五十八年十二月四日）

冬は年の余 夜は日の余 陰雨は時の余

西河堂 大樹

雪山童子の捨身

田中 忠雄著 『この古心の人』より

遙かなる昔、雪山童子は、雪山に住んで大修業中であつた。こゝはインドの西北から東につらなる大山脈ヒマラヤである。山は清浄の氣に満ち、澄んだ川や池があつて身を浄めることが出来た。木も草も生氣にあふれ、いろいろな果実がみのり、それを食べていのちを保ち、一心不乱に宇宙と人間とを貫く、眞実の法を求めて坐禪に明け暮れた。どれほどの歲月が流れたかわからないほどだった。それでも雪山童子はなお究極の道に徹することが出来なかつた。

ある日、いずこからともなく、不思議な声が響いて「諸行無常、是生滅法」と聞えた。これぞ覺者の偈げにちがいないと歡喜し、座を立ててあたりを見廻すとそこには恐ろしい形相ぎようそうの羅刹らせつ（悪魔）がいた。童子はひるまず近寄つて、

「そなたの今唱えた偈は覚者の偈と思うが、どこで得たのであるか。」

「おれは食にありつけず、飢えて今は答える力がない。」

「諸行無常、是生滅法は、偈の半分であらう。次の半偈を教えてください、教えてくださいたろ、私はそなたの弟子になろう。」

「そんなことより、おれは飢えて、それに答える元気がないのじやよ。」

「では聞くが、そなたの食物は何なのか。」

「おれの食うのは人間の肉、おれの飲むのは人間の血だ。」

この時、雪山童子が言った。

「そなたが残りの半偈を説いたら、私はそなたに私の身を供養するであらう。」

かくて、童子は身にまとう鹿の皮の衣を脱ぎ、これを敷いて法座とした。羅刹すなわち座について唱えていわく、

「生滅滅已 寂滅為楽」

聞きおわって童子は道の究極を得て、これを後の人にも伝えんと、みずからの血で今の四つの句を石に書き、樹に書き、道に書き、早や思い残すことなしと、高い木に登つ

て、その身を羅刹に与えるために身を投げた。

この一瞬、羅刹は天帝釈てんたいしやくの本性を現じ、地上すれすれに童子の身を手に受け、うやうやしく座につけ、童子が最高の真理を体得して、やがて仏陀となるべきことを予言して礼拝した。この雪山童子こそは、過去世に不惜身命ふじやくしんみんぎょうの大修業をした後、この世に出現した釈迦牟尼仏である。(大般涅槃經だいぱんねはんぎょうより)

注 諸行無常——万物は常に流転して少しの間も常住しないといふこと。

是生滅法——あらゆるものは変転して尽きないもので、これが生滅の法である。

生滅滅已——生と滅とがなくなつてもに存しないこと。

寂滅為樂——煩惱の境界を離れ、涅槃の境地を眞の樂とすること。

(新村 出編 広辞苑)

(感想)

眞実の法(佛法)を求めることの難しさを身にしみて感じる。「不惜身命」といふ言葉が生きてゐる。まさに修業の極地を説いた尊い話と思ふ。

(昭和五十九年一月二十三日)

ある偉い坊さんの話

田中 忠雄著 『この古心の人』より

この偉い坊さんは人から貰うお布施で世を渡るのは本当の仏法でないと思つて、寺を
とび出したそうである。とび出して商人になるほどの俗気はなかつたが、さればとてた
だの物乞いになるほど身をおとしたくもなかつた。そこであれこれ考えたすえ、草鞋わらじの
作り方を人に教えてもらつて、作つた草鞋を人通りの多い場所にぶらさげ、「代金は心持
ち次第」と書いて、そばに竹の筒を置いておいた。夕方になつて、坊さんは竹筒の中の
いくらかの錢を取り出して露命をつないでいた。

ところが、悪たれ小僧が竹筒の中の錢を失敬して、代りに馬の糞ふそを詰め込んだ。面白
がつて何度もそんないたずらをした。このとき、坊さんは、これを単に悪たれ小僧の悪わる
戯さとは受けとらず、「我が食尽きたり」と観じて、以後は草鞋を作らず、何も食べるもの

がなくて坐禅したまま寂然じやくねんとして餓死したと書いてあった。

(感想)

なんとも云へないこの邪念・妄念を截断した純粹無垢の境地がすばらしい。たゞ天命にまかせた、天地と合一の澄み切った世界に生きた人だ。心の欲するまゝに生き、天命を悟った時、坐禅しつゝ寂然として死んで行った姿はなんとしても壮嚴だ。近代の合理的知性では到底わからない世界だ。一見俗人の目には馬鹿げて見えるかもしれない。しかしこの坊さんは区々たる我欲・我見でなく永遠・悠久なもの、天地と一体のものを見つめていたのだ。この文を一読しまさに清涼の感を覚える。

(昭和五十九年一月二十四日)

独座観念

井伊 直弼著 『茶の湯一会集』より

主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出るに高声に咄さず、静かにあと見かへり出で行けば、亭主はなほさらのこと、客見えざるまでも見送るなり。さて、中潜り、猿戸、その他障子など、早々締立などいたすは不興千万、一日の饗応も無になる事なれば、決して客の帰路見えずとも、取りかた付け急ぐべからず、いかにも心静かに茶席に立戻り、此の時、にじり上りより這入り、炉前に独座して、今暫く御咄も有るべきに、もはや何方まで可^{まい}被^{せられ}参^ま哉、今日一期一会^え済みて、ふたたび返らざることを観念し、或は、独服をもいたす事、是一念^ご極意の習なり、此の時、寂莫として打語らふものとは釜一口のみにて、外に物なし、誠に自得せざれば、いたりがたき境界なり。

(感想)

茶の心の深さをしみじみと味ふすばらしい文章である。平面の世界でなく、まさに立体の、しかも奥行の深い世界である。大音楽、大絵画に接した後の、言ふに言はれぬ余韻^{じやう}嫋々たる世界である。主客共に一挙手一投足に深い慎しみが感ぜられ此上なく奥床しい。「寂莫として打語らふものとは釜一口のみ」の表現に、人もなく釜もない渾然^{こん}たる幽玄・静寂の気の室一面に漂ふを感じる。茶の極意の世界ではあるまいかと思ふ。

(昭和五十八年十一月一日)

一人の主相逢はず

森 鷗外著 『妄想』より

私（森鷗外）は、哲学や文学の書物を買ふことにした。（専門の書を寄付して）時間の得られる限り読んだのである。たゞその読み方が、初めハルトマンを読んだ時のやうに、飢ゑて食をむさぼるやうな読み方ではなくなつた。昔、世にもてはやされてゐた人。今、世にもてはやされてゐる人は、どんなことを言つてゐるか、たとへば道を行く人の顔を辻に立つて冷淡に見るやうに見たのである。冷淡には見てゐたが、自分は辻に立つてゐて、たびたび帽をぬいだ。昔の人にも、今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽はぬいだが、辻を離れてどの人かの後について行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、ひとりの主に逢はなかつたのである。

(感想)

この文をいくたびとなく読んで考へさせられた。人生といふ辻に一人しよんぼり立つてゐる孤高の鷗外を頭に思ひ浮かべた。私自身も何か寂しい思ひがした。また『自分以外はすべて師』といふ吉川英治の言葉を思ひ浮かべた。自分の身の廻りには敬意を表すべき人はたしかに多い。しかし、自分がこの人のためには生命を捧げやうと思ふ師——主と呼べる人——はきはめて少い。主との出遭ひを思ふとき、私は聖書の中のイエスキリストとその弟子達のあのガリラヤ湖の劇的な場面を思ひ浮かべる、湖の浜辺で漁をしてゐた兄弟は、あたかも鉄が磁石にひきつけられる如く、親兄弟も、漁をする網も、一切を捨て、主イエスキリストの下に従つた。私はこゝに人間の最高の生き方を見出す。一切を捨て、主と思ふ人に従ふ事が人間の此の上ない喜びであり生き甲斐と思ふ。神に格る道はこゝにあると思ふ。智慧分別、利害打算を捨てた生き方ほど美しいものはない。それは丁度、母親に一切をまかせきつた赤子の姿である。人の世で最も尊く、美しい姿と思ふ。

(昭和五十八年十二月十一日)

正岡子規の面目

正岡 子規編 『ホトトギス』 第四卷第一号より

「我々の希望は都会の腐敗した空気を一掃して、田舎の新鮮なる空気を入れたいのである。……流行は美でない。喝采は永久でない。我々は都会人士に媚びて新聞雑誌の上で賞められたくない。我々は斃れて後に已む決心を以て進むばかりである。……その時には第二の田舎者が出て来て必ず我々の志を継いでくれるであらうといふ事を信ずる。その第二の田舎者といふ奴は今頃何処かの山奥で高い木の上上つて椎の実をゆすぶり落して居るかも知れない。」

(感想)

草深き田舎、山奥の田舎に子規は人間のバイタリテイ——活力——を認識してゐる。

退廃した都会の空気には、もはやこの活力はない。たゞ田舎の新鮮にして素朴な生活の中に脈々と受け継がれてゐる。『斃れてのち止む決心を以て進むばかり』この言葉のひゞきのいかに強い事か、あの言語に絶する病と闘ひながら、短歌の革新を叫んだ子規の眞面目が実によくこゝにあらはれてゐる。伝統文化の生命を守らむとする力は都会にはない。草深き田舎に蓄へられてゐる。しかし子規の時代の田舎はもはや現代では都会化され、俗化されてゐる。この中であつて我々は第二の田舎者とならねばならない。そして新鮮な思ひで先人の守り抜いたものを受け継ぎ守らねばならない。そこには大君を慕ふ草芥そうちの心が脈々と生きてをらねばならぬと思ふ。

(昭和五十九年一月十九日)

たゞ一句の講演

池波 正太郎著 『いま修養のすゝめ』より

乃木將軍が、日露戦役（明治三十七・八年、西曆一九〇四―五年）の後、長野県師範学校の講堂に現われた。生徒達は、旅順攻囲軍の名將の講演を聴こうとして、満場水を打ったようになった。

カーキ色の軍服を着た將軍は、演壇下の椅子によつて、うつむいていた。真白な髭、ひげ、かがやく瞳、しかし將軍はどうしても顔をあげようとはしなかつた。

「閣下、どうぞ御登壇を御願ひ申します。」

鞠躬如として、校長が前にすすみ出ても、將軍はもじもじしていたが、ようやく、
「はい」

と立上つた。すらりと背の高い瘦せすぎの將軍は、直立不動の姿勢をとつて、

「皆さん、自分は、旅順において、皆さんの父兄をたくさん殺した乃木であります。」
たった一言、それだけ言つて、將軍は首をうなだれた。見ると、キラリと落ちて光つたものがあつた。涙だ。將軍の涙だつた。將軍はハンケチを出して拭いたが、この生徒達の中には、その父なり、その兄なり、その親戚なりのものが、旅順において戦死しているのかと思うと、至誠至純の將軍は、何の顔かんばせあつてこれらの子弟にまみえることが出来るようかと、自責の念にとられたものらしい。

だが、この一言には無限の情味がこもつていた。満場は寂として、將軍の顔を仰ぎ見る者は誰一人なかつた。

(感想)

まさに感動の一場面である。語る人も聞く人も涙なしには堪え得ない感激の瞬間である。ピンと張りつめた満堂の雰囲気が身に迫ってくる。この一句の中に將軍のすべての思ひは凝集されてゐる。悲痛極りなき將軍の心中を察する時、涙無きを得ない。至誠至純の人、乃木將軍にまぢかに接する思ひがする。(昭和五十九年一月二十七日)

月のうさぎ

田中 忠雄著 『こゝろの解放』より

石の上いそかみ

古にし美世ふるみよに

有と云ふありい

猿と兎ましうさぎと

狐とがきつに

友を結びて

朝にはあした

野山あそに遊び

夕にはゆふべ

林はやしに帰り

かくしつづ

年のへぬれば

久方のひさかた

天あめの帝みかどの

聴きまして

其それが実まことを

知らむとて

翁おきなとなりて

そが許もとに

よろほひ行き

まうすらく

汝等なむだちたぐひを

異にして

同じ心に

遊ぶてふ

まこと聞きしが

如ごとあらば

翁ういが飢うを

救へとて

杖を投じて

息いひしに

やすきこととて

ややありて

猿まじはうしろの

林より

菓このみを拾ひて

来きたりけり

狐きつは前の

かはらより

魚をくはへて

与へたり

兎うさぎはあたりに

飛べ飛べど

なにもものせで
ありければ

兎は心
異なりと

響りければののし
はかなしや

兎計りてはか
まうすらく

猿は柴を
かりてこよ

狐は之をきつにこれ
焼て給べやきた

言ふが如くに
為しければ

焔の中にけむり
身を投げて

しらぬ翁に
与へけり

翁は是をこれ
見るよりも

心もしぬに
久方の

天を仰ぎてあめ
うち泣きて

土に僵りて

ややありて

胸打叩き

まうすらく

汝らみたりの

友どちは

いづれ劣ると

なけれども

兎は殊に

やさしとて

骸を抱て

ひさかたの

月の宮にぞ

葬りける

今の世までも

語り継ぎ

月の兎と

いふことは

是が由にて

ありけると

聞く吾さへも

白栲の

衣の袂は

とほりてぬれぬ

(感想)

読むも悲しい長歌である。素材は「今昔物語」にとつてゐるが、良寛自身の慟哭の作である。か弱き兎の姿が良寛の生き写しとなつてゐる。良寛の無限に深い慈悲の心が兎にのりうつつてゐる。兎は良寛の身代りかも知れない。身を捨て、己が身そのまゝを他人に施与して止まぬ崇高な慈悲の心が云ひしれぬ程尊い。これ程、世に哀れな物語があらうか。生きとし生けるものゝ窮極最高至善の美を感じる。

(昭和五十九年一月三十日)

涙

山口 為次著 『照心録』より

子供にもなじみの深い良寛さんに、つぎのような話がある。

良寛の生家の相続人に馬之助というのがいた。良寛には甥にあたる。(もともと、良寛が生家を継いだのであるが、彼には世俗のことが堪えられず、早々に生家を譲ってしまった。)その馬之助が放蕩に身をもちくずして手におえぬので、母親が涙ながらに、良寛に意見をしてくれるよう頼んだ。良寛は承知して生家へ出かけ、三日三晩滞在したがそのことについては馬之助に何も言わず、平常と変りはなかった。

とうとう、そのまま帰えることになった。その立ち際に良寛は馬之助を呼んで、「すまぬが草鞋わらじの紐を結んで下され。」と頼んだ。馬之助は今日に限って妙なことを仰せられると思ったが、いいつけられた通り、かがんで草鞋の紐を結んだ。

すると、襟もとに冷たいものがぼとりと落ちた。びっくりした馬之助が顔を上げると良寛が涙を一杯ためて自分を見つめている……。馬之助はハッと感じ入った。

良寛は、やおら身を起こすと、無言のまま立ち去った。

(伊藤肇氏著書による)

(感想)

百万言の説教よりも、万感こもる一しづくの涙が人の心を動かして止まぬ。こゝで良寛が口やかましく説教しても、馬之助の心をひるがへすことは出来なかつたであらう。しかし甥の事を思ふまごころ溢れた一しづくの涙が馬之助の心を動かしたので。たゞ一片の良寛のま心が通じたのだ。吉田松陰先生の愛して止まなかつた孟子の「至誠にして動かざるもの未だあらざるなり」の言葉をこゝに思ひ出す。

無言のまゝ立ち去って行く良寛の後ろ姿を馬之助は心の中で拝んだことであらう。

(昭和五十九年三月五日)

一粒の豆

鈴木 健二著 『氣くばりのすゝめ』より

私（鈴木健二）は一粒の豆を生きがいにしている奥さんを知っている。その奥さんには二人の息子さんがいて、ご主人はすでに亡くなっているから、正しくは妻の役割はすでになく、母親としての役割だけの立場だが、母親がどう振舞うことがこどもにとって最高の教育であるかということをもつて示した方なのである。

この一家に悲劇が訪れたのは上の子が小学三年、次男が小学一年のときである。ご主人が交通事故で亡くなられたのだ。とても微妙な事故だったが、最後には、亡くなられた上に加害者にされてしまった。そのため、土地も家も売り払わねばならず、残された母親とこども二人は文字どおり路頭に迷うことになった。

各地を転々とした後、やっとある家の好意にすがって、その家の納屋の一部分を借り

た。三畳ぐらゐの広さの場所にムシロを敷き、裸電球を引き込んで七輪を一個、それに食卓とこどもの勉強机をかねたミカン箱一つ、粗末なフトンと若干の衣服……これが全財産であった。まさに極貧の生活である。

お母さんは生活を支えるために、朝六時に家を出て、まず近くのビル掃除をし、昼は学校給食の手伝い、夜は料理屋で皿洗い、一日の仕事を終えて帰ってくると、もう十一時、十二時だから、一家の主婦としての役割は、上のお兄ちゃんの肩にすべてがかかっていた。

そんな生活が半年、八ヶ月、十ヶ月と続いていくうち母親はさすがに疲れ果ててしまった。ロクに寝る間もない。生活は相変わらず苦しい。こどもたちも可哀想だ、……申し訳ないけれど、もう死ぬしかない。二人のこどもといっしょに死んだお父さんのいる天国へ行こうとそればかり考えるようになった。

ある日、お母さんは鍋の中に豆を一ぱいひたして、朝出かけにお兄ちゃんに置き手紙をした。

「お兄ちゃん、おなべに豆がひたしてあります。これをにて、こんばんのおかずにし

なさい。豆がやわらかくなったら、おしょうゆを少し入れなさい。」

その日も一日働いて本当にくたびれ切ってしまった母親は、今日こそ死んでしまおうと、こっそり睡眠薬を買って帰ってきた。二人の息子はムシロの上に敷いた粗末なフトンで枕を並べて眠っていた。

お兄ちゃんの枕元に一通の手紙が置いてあるのに気がついた。「お母さんへ。」お母さんはなにげなしに手紙を取り上げた。そこにこう書いてあった。

「お母さん、ボクはお母さんの手紙にあつたように、一生けんめい豆をにました。豆がやわらかくなつたとき、おしょうゆを入れました。でも夕方それをごはんのときに出してやったら、お兄ちゃん、しょっぱくて食べられないよといって、つめたいごはんに水をかけてそれを食べただけでねてしまいました。」

お母さん、ほんとうにごめんなさい。でもお母さん、ボクをしんじてください。ボクはほんとうに一生けんめいに豆をにたのです。お母さん、おねがいです。ボクのにた豆を一つぶだけ食べてみてください。そしてあしたの朝、ボクにもういちど、豆のかたをおしえてください。だからお母さん、あしたの朝はどんなに早くてもかまわないから、

出かける前にならずボクをおこしてください。お母さんこんやもつかれているんですよ、ボクにわかります。お母さん、ボクたちのためにはたらいているのですね、お母さんありがとう、でもお母さん、どうか、からだをだいじにしてください。ボク先にねます。お母さん、おやすみなさい。」

母親の目からどつと涙があふれた。

「ああ、申しわけない。お兄ちゃんはあんなに小さいのに、こんなに一生懸命に生きてくれたんだ。」

そしてお母さんは、こどもたちの枕元に坐つて、お兄ちゃんの煮てくれたしょっぱい豆を涙とともに一粒一粒おしいただいて食べた。

たまたま袋の中に煮てない豆が一粒残っていた。お母さんはそれを取り出して、お兄ちゃんを書いてくれた手紙に包んで、それから四六時中、肌身離さずお守りとして持つようになった。

自然と目がしらが熱くなり、涙にうるんでくる。世の中にこんなに苦しんでゐる人があるかと思ふと、平凡な自分の日々を一しほ有難く思ふ。母親とその子の間の思ひやりの心のなんと美しい事であらうか。そこに人間のうるほひがあり、生き甲斐があると思ふ。毎日の痛ましい新聞記事にもなれて、心がマヒしつゝある時、この話は私に涙と共に、一生懸命生きる人の心の崇高さを教へてくれる。一粒の豆がお母さんはもとより読者の私達に、どれほどのはかりしれない教へを与へてくれたか知れない。

(昭和五十九年五月五日)

此の秋は雨か風か知らねども今日のつとめの田の草をと
る

二宮 尊徳

栄西禅師の教え

田中 忠雄著 『こころの原点』より

ある日、一人の困窮者が建仁寺（京都）にやってきて、どうかお助けくださいと手を合わせた。聞けば夫婦と子供の三人が幾日も食べものがなくて飢え死にしそうになって
いるという。

ところが建仁寺も貧しいなかで修行していることゆえ、余分の衣料も食糧もたくわえ
がない。何かやるものはないかと、衆僧がいくから見渡しても、本当になんにもないので
あった。

このとき栄西禅師が、寺院に保管されてあった銅箔どうぱくに気がつかれて、それを自分でた
ばねて、「これ売って食べものに代えて、一時の飢えをしのぐがよい」と言つて、困窮
者にぜんぶお渡しになった。

この銅箔は、薬師如来の像をつくるための塗装用の銅であった。銅を打ちのばして箔にしたものだったのである。

仏道に身も心も打ちこんでいた弟子たちは、禅師のなされかたは間違っていると云って鋭く批判した。そもそも、あの銅箔は仏像を壮嚴しょうげんするための貴い資材である。いわば仏の光明となるべきものである。これを惜しげもなく世俗の人に与えることは第一義を忘れたことになり、且つは仏に属するものを私用に使ったという罪を犯されたのであると。

このとき禅師は言われた。そなたたちの批判は正しい。まことにその通りである。しかし、仏のみこころを深く思うと、經典にあるように、仏は自分の身を割きいて飢えた虎の親子を助けられたではないか。これをもつて思うに、現に目の前に餓死しようとする衆生がいるからには、たとい仏の全身を与えてもよいと私は思う。

「我は此の罪に依よて悪趣あくしゅに墮おすべくとも、只ただ衆生の飢を救ふべし」……貴い仏さまのものを私情で勝手に使ってしまったという罪によって悪趣（地獄）に落ち、ながく苦しむとしても、私はそれを悔いしないであらう。あの餓死寸前の人を助けるよりほかは仕方

がないではないか。――

榮西はこのように心のなかを打ちあけた。道元は末席にあつてこれを親しく聞いて、いかばかり感動したことであらう。純一に道を求めつづけてきた道元にとって、これこそは魂の打ちふるえる感動だったのである。(道元著 『しょうぼうげんごうずいもんき』 『正法眼蔵随聞記』)

注 榮西禪師、平安時代末から鎌倉時代初期の僧、臨済宗開祖。

(感想)

生きたみ仏の教へが活きくと述べられ私の心を救つてくれる。仏の教義に枯死的解釋をほどこして、眼前の善良な人を殺してしまつてゐるのが間違つた現代の宗教ではなからうか。やれ規則だ、習慣だ、といふ事に縛られて生きた物を見殺しにしてしまふ事例があまりに多い。一見、仏の教へにそむき、軌道にはずれたやうに見えても、眞の仏の教えは、生きた人を救ふ事にある。そこは理論、理屈を越えた世界であり、たとひ地獄におちても悔いない信の世界であらう。

(昭和五十九年四月三十日)

堀尾金助の母

保田 与重 著 『天降言』あもりごと より

名古屋熱田町を流れてゐる精進川に架せられた裁断橋は、もう昔のあとをとどめないが、その橋の青銅擬宝珠ぎぼしは今も初めのまゝのものを残し、その一つに美しい銘文が鏤はられてゐるのである。和文と漢文とで同様の意味のことが誌しされてゐるが、漢文の方はしばらく措おき、その和文の方は本邦金石文中でも名文の第一と語りたいほどに日頃愛誦に耐へないものである。

てんしやう十八ねん二月十八日に、をたはらへの御ぢん、ほりをきん助と申、十八になりたる子をたゝせてより、又ふためともみざるかなしきのあまりに、いまこのはしをかける成、はゝの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、いつかんせいしゅんと、後のよの又のちまで、此このかきつけを見る人は、念佛申給へや、

卅三年のくやう也。

銘文はこれだけの短いものである。小田原陣に豊臣秀吉に従つて出陣戦歿した堀尾金助といふ若武者の三十三回忌の供養のために、母が架けたといふ意味をかき誌したものである。

(感想)

銘文を解りやすく書き改めると次のやうになる。

天正十八年（西暦一五九一）二月十八日に、小田原への御陣、堀尾金助と申して、十八歳になる子を戦陣にたゞせてから、またふた目とわが子の顔を見ない悲しさのあまりに、今、此の橋をわが子の供養として架けた。母の身には落涙限りなく、どうぞ即身成佛して下さい。逸岩世俊（我が子の戒名）と、後の世のまた後まで、此の書き付けたものを見る人は、どうぞ念佛申して下さい。これはわが子の三十三年の供養でござります。

これはわが子を僅か十八才のときに、戦陣に亡くした老いたる母の切々たる文である。「母の身には落涙ともなり」の言葉には胸がつまる。涙にむせび身をかゞめ肩をおとし

た小さな母の姿が目には浮かぶ。深くたよりにしてみたわが子を失った悲しみは、この母以外にはなかくわからぬものであらう。

橋はこの世とあの世の橋わたしをしてくれる。あの世の子に遭ひたさのあまり悲しみをこめこの橋をかけたのであらう。そして、橋を渡り道行く見知らぬ人々にも、この書き付を読んでもらって、念佛を頼み、わが子の成佛を母なきあとも未来永劫えいごうにひたすら願ったのであらう。言葉に尽くせぬ母の深き思ひを偲ぶとき涙なしにはこの文は読めない。

(昭和五十八年十月三十日)

歡喜の碑



歡喜の碑（貞包哲朗氏撮影）

佐賀新聞 『碑のある風景』より

松浦なる千代をゆかりに三つわくむ、そめて
ふ人は若きより、言の葉くさの十あまり、七つ
の文字にこころよせ、悠々老の門に入。

俳諧の寂を探り、老て猶わすれず、もの裁たうわ
さを多くの乙女に教る事とし積る。ふと眼をや
む、友人驚て観世音にねかひをこめしに、忽たちまち、

大悲の光を恵ませぬ。ひまなこすこしく成ければ、歡喜の涙なみだ拭あへも敢ず、教子か其御光の
すえの世も曇らぬためしを、石に今きさみて残す、滝川のたきの流に真心を、うつす事
こそいみしけれ。

「月花や 水は心の 置どころ」
そめ

碑の内容の大訳

「松浦の里にそめという女性がいて、小さいころから、俳句に親しんでいた。年を取ってもさらに俳句の道に精進し、かたわら女の子に裁縫等を教えて月日を送っていた。がある時、眼病にかかった。友人が滝の観音に願をかけたところ、すっかりよくなった。教え子たちはこの観音さまの御利益を永久に石に刻み残すことにした。」

(此の碑は、佐賀県東松浦郡七山村、玉島川上流の瀑布げくの上に位置した滝の観音の境内にある。高さ二メートル余り、直径五十センチ足らず、六角形をなしている。碑文は美文調でかかれ、変体仮名が使われている。前記の文は、山崎猛夫氏の読解である。建立月日は「明治戊戌暮秋（明治三十一年秋）」となっている。)

(感想)

『歡喜の碑』といふ言葉が素晴らしい。観音さまよりみ光をいただいた人、そして共

に喜びをわかちあふ人々のま心が結晶された碑であり、観音さまに感謝し、歓喜躍動した人々の姿が眼の前に浮かぶやうだ。

闇より光を回復した人の喜びは、一切の持ち物を捨て、も、かへがたい悦びであらう。人生は悩み、苦しみに満ちた苦難慟哭の歴史とも云へるが、こゝにあるやうな光明燦然たる歓喜の世界がある事も忘れてはならないと思ふ。常に心に光明を灯し、光を求めてゐる人には、やがてきつと歓喜の世界が訪れてくると信ずる。その時には神佛に感謝し、周りの人々と手を取りあつて躍りたい。それが実人生と思ふ。

俳句を愛する人々の奥床しい心のふれあひ、そして明治の人々の清き明るき心をなんとしても受けついでゆきたい。

(昭和五十九年五月五日)

神道のあらまし

幡掛 正浩著 『食國天下のまつりこと』より

「おそれある御事なれど、神道のあらましを申したてまつらば、水を一つ汲むといふても、水の神霊がましますゆゑ、あれあそこに水の神ミヅハメ様が御座被^{なま}成^れて、あだおろそかならぬ事と思ひ、火を一つ焼くといふても、あれあそこに火の神カグツチ様が御座被^れ成^れ故、大事のことと思ひ、わづかに木一本用ふるも、ククノチ様が御座被^れ成^れ、草一本でもカヤヌヒメ様が御座被^れ成^れものをと、何につけ角に付け、触るる所まじはる所、あれあそこに在^あますと、戴きたてまつり、崇^{あが}めたてまつりて、やれ大事とおそれつしむが神道にて、かういふなりが即ち常住の功夫^{くふう}ともなりたるものなり。」

（若林強齋著 『神道大意』）

注 若林強齋（西暦一六七九—一七三二）江戸中期の儒者・神道家。

(感想)

目の前の森羅万象、一切のものに神靈の宿る事を感じし、慎み敬ふ心こそ神道のあらましとの教へだと思ふ。これが日本に佛教、基督教キリスト渡来以前の日本古来の思想だと思ふ。謙虚に一木一草の中に神を拝する心がなんとしても尊い。理屈を遙に越えた世界だと思ふ。人間も含め一切が大神靈界の中に活いき活いきと躍動してゐる世界だと思ふ。神と人と感応、感格の境地である。そこには何物もおろそかに扱ふ事は出来ない。物質万能主義におぼれ、心の貧困を救ってくれるのはこの思想の他にはないと思ふ。たとひ物に恵れなくとも、一つ一つの物の中に有難い神の恵みを感じ感謝の気持を持って、心豊かに過ごしたいものである。

(昭和五十九年二月二日)

黒住宗忠翁の敬神

『友清歛真全集』 第二卷より



大元・宗忠神社
(日新誌より)

黒住教々祖の黒住宗忠翁が、まだ社会に知られない頃のこと、旅行先の旅宿で同職の知人と同じ室に寝て四方山よもの囃はなしの末、「時に黒住さん、あなたの奉仕せられる神社の御祭神はどなたでしたかね。」と訊ききましたが、宗忠翁はそれには答へずに、世間雑ざでまぎらさうとして居られました。宗忠翁は田舎の神社ではあるが、天照大御神様を主斎神とする神社の神職でありました。

しかるに同職の人は、しきりにまた重ねて御祭神をたづねますので、宗忠翁は蒲団ふとんから出て衣服ころもを改め、袴はかまを着けて正坐されて、「拙者せじやの奉仕する神社の御祭神は天照大御神様

で御座る。」と、答へられたといふことであります。

まことにさもあるべきことで、本当に神々の威霊を信ずる者には、寝まきのまゝで神名を談ずるといふやうなことは出来ることではないので、天照大御神様に限らず、他の神々の御上のことでも同様であります。

(感想)

全く頭の下がるお話である。畏敬すべきものを忘れ、ぞんざいに扱ってゐるのが現代でないかと思ふ。尊いものを畏れ慎むことから人の礼儀は始る。近代文明の名の下に人間が神を忘れ、神を畏れないのが現代社会の欠陥であり、今日ほど人間が傲慢な時はない。或る人は、現代日本を評して、「天皇忘却、国家喪失の時代」と云つてゐる。核心をついた言葉と思ふ。天皇陛下・師・親を畏敬する心を一日も早く取りもどさなければならぬ。この宗忠翁の心を心として、大切にうけとめ生きていきたいと思ふ。

(昭和五十八年十一月六日)

自他一如

五井 昌久著 『日本の心』より

日本の神道界最高の人といはれる黒住宗忠公につきのやうな話がある。

ある日、一人の修験者がきて法論（宗教問答）を吹きかけた。宗忠はただでいいねいに、「はいはい」と相槌を打つだけで、ひとことの反論もしなかった。相手はカサにかかり、果ては聞くに堪へない暴言を浴びせたが、宗忠は沈黙を守つてゐるだけだった。相手は、いささか拍子抜けして、

「わしにひとことの返答もできないやうな者が、今後、説教などと、惑はせることをするにおいては、その分にはさしおかぬぞ。」と捨てぜりふを残して立ち去つた。

側にゐた宗忠の妻が、あまり口惜しさに、

「せめてひとことぐらいいおっしゃらねば、門人衆に対しても顔向けがなりませぬこと

と存じますが……。』といふと、宗忠は静かに笑つて、

「わしが、ののしられたとて大事なことが、神様をのしるやうなことになる、その罪は軽くないから一心にそのやうなことがないやうに心中で祈つてみた。議論をして、よし、わしが勝つたとて、何も世に益はないばかりか、あの人が天からもらつた、おいきもの（御活物）——みたま——を傷めるだけのこと。それでは神様に対して申訳がない。それよりも、それ、あの人のうしろ姿を見るがよい。見事うち勝つたと思ふ満足の心が見えて、いかにも勇ましいではないか。神様はあのやうな人間のいさぎよい姿をばお喜びなさるさうな。」と言つて、遠ざかりゆく修験者の後姿を拜んだ。

(感想)

宗忠公の心の中には己れといふものがなかつた。あるものはたゞ神のみ心、を思ふ心であり、いかに神のみ心にそひたてまつるかであつた。自他を分つものはなく、他人の中にも同じく神のみ心の存在を認め、神と共に歩んだ神人と思ふ。

(昭和五十九年三月八日)

一対の足跡

小室 正樹著 『アメリカの標的』より

私（現アメリカ大統領・レーガン氏）はかつてこんな話を聞いた。

一人の信仰深い男が、年老いて余命いくばくもないことを悟った。そこで一生を通じて常に神と共に歩んできた彼は、生涯をふり返つてみた。人生の砂浜には、彼の足あとと、共に歩んできた神の足あとの二対が残されているはずだった。ところがどうだろう。一対の足あとしか見当らない所があちこちにあるのだ。そこで、彼は驚いて神に問うた。「一生涯神を絶対的に信仰し、共に歩んできたと信じておりましたのに、ところどころであなたは私を見棄てられたのですね。」と。神答えていうには、「実はお前がいくたびとなく、人生上の大きな困難に出会い、どうしようもなくなった時、お前を抱きかかえて歩いてやったのだ。一対しかないのは、私の足あとだ。」と。

レーガンは一呼吸おいて、最後にこう云った。

「私はこの話を信ずる。そうでないとすれば、このきわめて困難な四年間、私は合衆国大統領として責任を全うすることが出来ないだろう。」

(感想)

信仰のある人は強い。さすがレーガン大統領と思ふ。「私はこの話を信ずる」の云ひ切った一言に、千鈞ちんけんの重みがある。この信仰を持った人にしてあの大国をかゝへ、その国民を指導して行く事が出来るのであらう。人は自分の力で生き、一人の力で歩いてゐると思つてゐる。これは大きな間違ひだ。実際はいつも神に護られ、神に助けられて生かされてゐる。人が神をおんぶしてゐるのではなく、神におんぶされて生きてゐるのだ。まゝごと神にかゝへられた私である事を悟らねばならない。たゞおまかせするのだ。そこに我といふとらはれが無くなり、充分な自分の力も發揮出来る事になる。まことに示唆しそくに富んだ話だと思ふ。

(昭和五十八年十二月二日)

佐藤定吉博士の学問

佐藤 定吉著 『みくに信仰』より

「此処に、我らが常日頃、化学研究の道程に於いて、虎の巻のように大事にしている一つの研究法を述べておきたい。……化学研究に生涯をささげてから、早やもう四十数年を過ぎた。毎日朝から晩まで研究に没頭しているうちに、丁度物の言えない赤子と母親との間に、自然と「あゝしてほしい、こうしてもらいたい」と、思いが無言のうちに通じてくるように、取り組んでいる研究対象物と互に親しく語り合う様な心境が開けてくる。特に、前人未踏の未知の研究問題と対して、幾日も幾日も、昼夜の区別なく、三昧の境地に沈潜していると、それがそのまま、密室の祈禱と同一の心境に引き入れられてくる。こうした時に、屢々豁然と未開の扉は開け、思わざる発見や発明の生れる事が甚だ多い。自力で為すのでなしに、させられるのである。

この状態を、静かに省みると、二つの場合があるかのようである。その一つは、雨降りの暗夜、野辺を手さぐりに辿り行く時、電光一闪、あたりの野も山も森も、忽ちに明るく出される。次の一瞬大自然は、またもとの闇黒に帰る。けれどもその閃光による新しい光景は、闇黒に帰った後も、いつも眼底に強く残る。かくして「光に歩むが如き心境」で闇夜を目標に向って歩み出す。そして遂に目的の地点に着く。この心境である。最も大切な呼吸が此処にある。こうした心境に立って、数多の発明と発見は私の前に生れて来た。数学の理論で導き出したり、また試験管を振ったり、顕微鏡にかじりついて実験をくり返すのは、それからの仕事である。

第三者が見ていると、外形は科学者自らが頭脳を働かせ、研究工夫をし、実験しているかの如く見えるであらうが、実は、その真相に入り込んで見ると、私自身は藁人形にすぎない。私の背後に、黒頭巾をかぶった一人の「使い手」の立っている事を知る。智慧だけで工夫したものは極めて小さい浅いものであった。世界の学界に多少でも永く価値づけられるようなもの凡ては、みな藁人形にさせられた時のものばかりである。

そして以上のような無我の三昧境に導入される状態を更に反省すると、二つの場合が

あるかに見える。その一つは、静かに祈りつゝ試験管とにらみくらしていると、おのづから大自然に没入し、そこに波打つリズムの中に融け込んで了う。その時、霊の響の如くに私の心の中に無声の声として手渡されるものがある。

終日思いつめ、考え込んで未解決の問題を、求めに求め祈りつゝ静かに夜の睡眠に入る。多くの場合は未明払暁の時である。半睡半覚の時、私の心は丁度山上の湖面が、小波一つ立てないで鏡のように澄みきる場合がある。この時、周囲の山々の景色が、あざやかに湖面にその姿を映し出すにも似て、問題の真相があざやかに私の心の中に映し出されてくる。これは、まことに鮮かな霊的経験であり、幾度も幾度も繰り返し、その適確さが実証される。こうした靈魂の鮮明な体験を与えられる時は、夜中でも、また未明の中でも飛び起きて、研究室に走り行き、その光明の中に明示されたものを直ぐ実験に移し、客観化する。そしてその真实性の真否を実証するのが常である。

未だ嘗つて一度も間違つた事はない。かゝる最初の体験は、明治四十五年春、帝大卒業の当時であった。爾来、今日四十年の歳月をくり返しくり返し同一の体験を重ねて参り一度も狂つたことがない。

靈的啓示が「先き」であつて、研究室に於ける実証が「後」である。すなわち、靈界の事象が「先在」であつて、物質界の事象は「後在」であるという事実を、私は科学的研究室に於いて、自らの体験として保証し得たものである。実に有難い恩寵だと感謝している。これが第一の場合である。

第二の場合は、研究者として堂々たる正攻法の陣を張る時である。正攻法というのは、凡ての科学研究に採用される道であり、きちんと定まった一般的な研究の型があるのである。学校で講演をしたり学習させるのは、この一律に定つた正攻法の型についてである。……無我の境に入つて直面する化学現象に引きつけられ、吸い込まれている時の実験振りを横からじつと見ている人があつたら「まるで何ものかの手先に使われているかのようなだ」と言うであろう。ほんとに自らもそう思う。人間の目に見えない原子と原子の位置転換をやらせたり、亀甲型のベンジン核に水酸基をくつつけて、ベンダールを石炭酸に変化させたり、また同じベンジン核にアミド基をくつつけて染料の母体であるアニリンを創り出したりする。これらはまだ簡単であるから素人にもわかり易いが、複雑な染料や合成樹脂や香料などを合成するときなどは、人間の能力をよくも此処まで発達

したものだ、その神秘さにつくづくわれながら感激することがある。特に合成化学の奥深い集合離散の「則」の世界に這入り込んでみると、実験者の頭脳と手先とが創造者の意志のままに、一体につながれて働いておるのが、よく自らに於いても感得される。人間というものは何と不思議な位置を、宇宙の中に占めているのであろうか！とつくづくわれとわが身を不思議に思うのである。自らの手先に「宇宙の創造を行うなどの事は毛頭夢想だにもしたことのなかつた身が、たゞ化学の原理の中に生き、その道と偕ともに働かさえすれば、こんなにも容易に、簡単に自らの手にて、神の創造を「現実」に行い得るのだということを発見する。得も言えぬ深い黙示である。」

注 佐藤定吉先生は、明治四十五年東京帝国大学工科大学学校（工学部）を恩賜の銀時計で卒業。九州帝国大学教授を経て、東北帝国大学教授を歴任、工学博士、国際特許一
二八種、殊にプラスチックの発明の創始者である。昭和三十六年十二月歿。

（感想）

こゝに深く教へられる事は、世の中のもの一切が大いなる神霊の力に生かされてゐる

といふ事実である。自分の判断と意志でおこなつてゐると思ふ事も、実はある目に見えない大いなる神秘的力により行動させられてゐるのである。一切が受身である。近代の自我の思想の発達と共に、神は忘れられ人間が神の座についた。人間は己れが主で、一切行動の主体は我であると思つてゐる。自分の力で生き、生活してゐると思つてゐるがまさに逆である。目に見えぬ神靈の力に導かれ生かされてゐる。佐藤博士は学問研究を通してこの境地に達せられた。

『我が生くるは我がちからならず天地を貫きて生くる御祖みおやのいのち』と谷口雅春先生（生長の家総裁）は歌はれておられる。意識すると意識しないにかゝはず、私達が神靈のみ力に生かされ、み光に守られてゐる事は厳肅なる事実と思ふ。日々神を仰ぎ、敬虔なる毎日を過ごした先人に心から学びたい。

（昭和五十九年四月二十三日）

老 と 死

小林 秀雄著 『考へるヒント』より

何処かのある名高い上人が参内する姿を見て、ある人が、「あな、たふとのけしきや」と感歎したところが、それを見てゐた日野資朝すけともが、「年のよりたるに候」と言った、といふ話が「徒然草」にある。資朝は別段意地の悪い見方をしたのであるまい。老年は老年でさつぱりと健全に過すといふ事は、容易な事ではないらしい。「徒然草」のことを言つたからついでに言ふと、兼好は、かういふ事を言つてゐる。死は向うからこちらへやつて来るものと皆思っているが、さうではない、実は背後からやつて来る。沖の干潟にいつ潮が満ちるかとは皆ながめてゐるが、実は潮は磯の方から満ちるものだ。

この鋭い観察を、現代風に翻訳すると、かういふ事になるだらう。自然は、生物の成長の準備をするが、ある時期が来れば死の準備をするであらう。この着々と持続的に営

まれる準備は、自然の準備たる点で同質のものである、と。生物学の知識をしこたま抱へてみたところで、兼好の気づいてゐたところに気が附くとは限るまい。死は向うから私をにらんで歩いて来るのではない。私のうちに怠りなく準備されてゐるものだ。私が進んでこの準備に協力しなければ、私の足は大地から離れるより他はあるまい。死は、私の生に反した他人ではない。やはり私の生の智慧であらう。兼好が考へてゐたところも、恐らくさういう意味合ひの事だ。でなければ、あれほど世の無常を説きながら、現世を生きる味ひがよく出た文章が書けたはずもない。

(感想)

こゝに吉田兼好といふすばらしい人の深い生と老と死の洞察を観る。私も六十の年を迎へると、そして死といふ事を時々考へる。死はどうしても突然向うからやってくる気がする。しかるに、死を自分の内に内包し、かねがねそれを育てゝゐるといふ言葉には驚かされる。人はいつも遠くより死がやってくるまでは生きてゐると思つてゐる。あにはからんや、死はいつも同居し、自分が背負つて歩いてゐるといふのだ。生は則ち死

といふてもよい。表と裏の違いのやうだ。たゞその間に時間といふ媒介物があり、長い短いの神の操作があるに過ぎない。若死も長命もあひひとしく、たゞその質が問題だ。良く生きる人はまた良き死を内蔵してゐると云へるかも知れない。人は誰でも年をとる。「六十にして六十化する。」(六十歳までに六十回変化するといふ意味)と云ふが、五十九年の非を悟つて、心を新にして、新生の第一歩を踏み出さねばならぬと思ふ。その生きざまの中に、価値ある死を刻んで行きたい。

(昭和五十八年十月二十六日)

人間の寿命

田中 忠雄著 『こゝろの原点』より

ある山寺に、ある学者が一夜の宿を乞うた。翌朝出発しようとして、見送りのため出てきた小僧を見て、学者はびっくりした。小僧の顔を穴のあくほど見て言うには、

そなたは昨夜見たときには死相が現われていた。三日のうちには死ぬ運命であった。それを言ってもそなたにとって何の益にもならぬので、わしは黙っていたのじゃ。ところが今そなたを見ると、不思議なことに、八十まで生きる顔になっている。そなたは昨夜から今朝にかけて、何か途方もなく善い事をしたのではないか、つつまず話をしなさい。」

すると小僧は驚いて

「いゝえ、いゝえ、私は何も善いことはありません。」と言う。

「いや、何か善いことをしたに相違ない。さあ、是非とも話しなさい。」

「申しあげます。昨夜便所に行きましたら、便器がうんこでひどくよごれていました。ああ、汚いと思いましたとき、ふと母の顔が浮んできました。私が赤ん坊のとき、母はきたないとも思わず、よごれを浄めてくださったのだなと思いました。それで、私は便所を掃除しておきました。それよりはほかに善い事をした覚えはありません。お許し下さい。先生さま。」学者は膝を打って、

「それだ。そのためにそなたは八十までも生きることになったぞ。」と言って、合掌し、小僧を拜んだというのである。

(感想)

人間には天寿といふものが確かにある。天の定めた命数でどうにもならぬと思ひがちである。しかしこの寿命と云へども、人間自身の行為によって変へ得るものだといふことを教へてくれる。人間のま・心のあるところ、そこには人間の智慧ではわからない深い神の摂理があるやうに思へる。味ひ深い話と思ふ。(昭和五十九年一月二十七日)

山火事と鸚鵡おうむ

高田 好胤述 『不東の人・玄装三蔵を語る』より

ヒマラヤ山の中腹に、太い竹がたくさんおいしげっている大きな森がありました。その森にはたくさんさんの獣や鳥がみんな仲よく暮していました。ある激しい風の日でした。風の為にすれあつた竹の摩擦がもとで火が出ました。折からの強い風のため、みるみるうちに火は四方八方に燃えひろがり、たちまち大変な山火事になりました。あまりに俄にわかな事でありましたので、獣達はたゞ慌てふためくばかりでした。

この時、一羽の鸚鵡が急に飛び立ちました。そして山の麓の池まで飛んで行きました。その池で体を水に濡ぬらして、またもとの道を飛び帰り、燃えている山火事の上から一心に羽を振って水の滴しずくをたらしめました。そしてまた、山の麓の池に飛んでゆき、濡ぬらした体で水を運んでは、羽を振って山火事の上から滴を落としました。それを何十回、何百

回と繰返し続けました。息は切れ、目は血走って、疲れ果てますが、鸚鵡はそれをやめようとはしませんでした。

この様子をごらんになられて仏さまが、鸚鵡にやさしく「お前さんの羽で運んできたぐらいの水で、この山火事の火を消せると思うのかね」とおたずねになりました。鸚鵡は「消えるか消えないかは私には分かりません。けれどもこれをしなければ仲間達は、みんな焼け死んでしまいます。何もしないで仲間を見殺しにすることなどとてもできません。何とかして助けてあげねばなりません。私にできる事はこれしかありません。また私達仲間を仲良く住まわせてくれた森への、私のできる精一杯の恩返しはこれしかありません。愚かな事と思われるかもしれませんが、どうかこれを続けさせて下さい。」と、仏さまの前を飛び立って、池に向かって山の麓へ飛んでゆきました。

その姿と鸚鵡の言葉に仏さまは深く深く、大きくうなずかれました。そして不思議な力をあらわされました。するとどうでしょうか、黒い雲がもくもくとあらわれてきて、雨を降らし始めました。それが大雨になりました。さしもの山火事たちまも忽ちのうちに消え
ました。

（『雑宝蔵経』より）

(感想)

一つの寓話であるが、鸚鵡の己れを無にしたひたむきな行動が私の心を打つ。事の成否を思慮する前に、止むに止まれぬそのま心が何よりも尊い。計算してこのやうな行動が出来るはずがない。結果は二の次と思ふ。この無駄とも思へる行為が人の世には本当に必要ではなからうか。第三者には愚かな仕草に思へるかも知れない。しかしこの危機を救ふものは、この止むに止まれぬま心以外にない。教へられるところが非常に多い。戦後は忘れられた言葉となつてゐるが、天皇陛下のため、国のために尽くすといふ祖先から受けついで日本人のま心を一日も早く回復したい。道義的に乱れ、退廃しつつある戦後日本の精神的復興はそこから始まると思ふ。

(昭和五十九年四月十日)

無 駄 石

『友清歛真全集』第三卷より

むかし周防（現山口県）の徳山附近の海岸を或る旅僧が行脚あんぎゃしてゐた。ところが毎年のやうに高潮で崩れる防波堤の修繕工事をやつてる浦人の沢山働いてゐるところへ通りかゝつて眺めて居たが「そんな工事ではまた崩れるぞ。」と言ひ出した。「この坊主め。」と腹を立てた青年もあつたが、浦の老人が辞を低うしてそのわけを聞いてみた。するとそれは格別奇妙な意見でもないが、要するに無駄石が足らぬといふのである。岸の外郭へさらに沢山の無駄石を投げ込まねば、この岸は保てぬといふのである。少し厄介な意見ではあつたけれどさらに沢山の無駄石を運んで来て捨てたので、その後は長年間崩れなかつたといふのである。

(感想)

世の中では無駄と思はれてゐる石が本当は立派な働きをしてゐる。水面の下にかくれて目に見えないが、実はその石のおかげで堤防は保たれてゐる。

人の世も同じであらう。表面には人の目にたゞず、隠れて見えない人が世の中をしつかり支へてゐる。むしろ自ら無駄石となつて頑張るやうな人こそ、立派な人と云へるのではあるまいか。自分の職場にあつて与へられた仕事を黙々としてつとめ、己れの責任を果してゐる人こそ尊ばれねばならない。あの明治維新の大偉業も、このやうな目に見えない無名の志士達の支へによつて成し遂げられたと思ふ。私はこのやうな人を尊敬して止ま^やない。

(昭和五十九年一月二十二日)

カーネギーと或る職工の話

下村 湖人著 『人生を語る』より

この職工は素晴らしい腕前を持ち、その職工が居たために、Yの工場の製作品が世界的に有名になった。この会社の恩人といへる職工だった。社長のカーネギーは早くからこの職工に眼をかけて居た。そしてその職工が相当の老齢に達すると、ある日自分の室に其の職工を呼んで、「君も随分永い間私の工場のために働いて呉れて、お蔭で工場もこの通り立派なものになったが、私の君に対する責務は、まだ充分果されて居ない。實は、今日今からそれを果さうと思つてゐる。」と云つて、一枚の厚い紙片をその職工に差出した。職工は不思議に思つて、それを開いて見ると、それは重役任命の辞令だった。

ところが、その職工は喜ぶどころか非常に落膽した。そして彼は社長のカーネギーに對しかう云つた。「私は人間らしい生き方をしたいと思ひます。私は物や、物の奴隷に成

りたくはありません。そして私が職工として勤めさせて戴く限りは、私は人です。死ぬまで人であることが出来ます。と云ふのは、私は職工として働いてこそ、私の生命を自由悦びに充ちて供用することが出来、同時に、人生に役立つことが出来ると思ふからです。しかし、もし私が重役にならなければ成らないとしますと、私は今日から物です。少くとも物の奴隷です。私は重役としては経験もなく、無論自信もありません。私は無為にして暮すより外に方法が無くなります。私は生命の自由と悦びとを失ひ、しかも人生に何の貢献もせずに、今日から暮らさねば成らないでせうか、社長さん、お願いです、もしこの辞令をお返しすることが、工場のために、又アメリカと世界のために、非常な害悪でなければ、どうか、私の生命のために、これをお返しすることをお許し下さい。」

——さう云つて、彼はカーネギーの前に跪ひざまづいた。

流石さすがのカーネギーも、これにはすつかり頭が上らなかつた。そしてその職工の手を執つて、叫んでかう云つた。「許してくれ。私の人生に対する今日までの考へは、すつかり間違つて居た。私は、人と物とを取りちがへないつもりで、實は取りちがへて居たんだ。私が物の奴隷であつたればこそ、君までも物の奴隷に陥おとしれやうとした。だが、悪意は無

かつたんだ。たゞ君をそれほど立派な人と知らず、また、私自身、これほど無智な人間と自覚しなかつたために、起つた間違ひなんだ、君の職工としてのこれまでの立派な働きが、何処から力を引き出して居たかも、今はよくわかつた。どうか今後もその精神で快よく工場にて働いてくれ、さう云つて、カーネギーは、秘書を呼んで、即座に辞令を書き代へさせた。新しい辞令には、単に職工の俸給だけが記入されて居たが、それは大統領と同一の俸給だつた。

(感想)

働く人の生きがひとは何であるかを強く教へられた。「人が物の奴隷となることでなく、人間らしく生きること、すなはち自分のいのちを自由に悦びに満ちて活いき／＼と生かすこと」こゝが最も大切なところだ。たとひ職工の身分で衣服は汚れ、給料は安からうとも、世のため、人のため、会社のために働いてゐる自覚と悦びに満ちた時、働く生き甲斐があり、生きる喜びがあると思ふ。

(昭和五十九年五月一日)

塚原卜伝と三人の息子

天野直弘氏の話より

かつて剣の名人塚原卜伝に三人の息子がゐた。所用のために三人を一人づつ我が部屋に呼んだ。部屋のふすまを開ける時、その鴨居のところに木の枕をかくしておいた。不用意に入れば木の枕の頭上に落ちる仕掛があつた。先づ三男の息子が最初に呼ばれて入つて来た。息子はふすまを開き部屋の中に足をふみ入れるとすぐに、さつと持つてゐた剣を抜き見事にその落ちてきた木の枕を真二つに切り割つて見せた。父塚原卜伝がその腕前を激賞するかと思ひきや、さにあらずして激怒し破門してしまつた。二男の息子が次に呼ばれた。彼は、はやくも木枕のある事に気付き、木枕を取り除いて、あらためて部屋の中に入り、手をついて挨拶した。次に長男が呼ばれた。彼は部屋の中に入らず、部屋の手前で手をついて挨拶した。父はこの長男の態度に満足し、自分の跡を継ぐ

事を許したと云ふ。

(感想)

この息子三人三様の対処の仕方の中に、人生を生きてゆく術を教へてくれてあると思ふ。最初の三男はよく切れる人だ。当座の役には一番役に立つ人だ。しかしなんとなく深みがない。洞察力に欠ける思ひがする。あまりさばけるが故に、多くの敵をつくり、その敵を倒すかもしれぬが、己れ自身も傷つき倒れ、生命がはてるかもしれない。二番目の息子は落着きもあり、物の見通しもきき、巧みに物を処理する人物である。たしかに無難な道を歩むであらう。しかし機前に危険を知り、それに近づかぬ慎重さにくらぶればまだ一步足りない。家督を継ぐ人物にはまだ器に不足がある。長男にして十全である。機先を制する人であり、目に見えぬものを心眼で見抜く人物である。百事危からずの思ひがする。安心して何事もまかせ得る人である。さすが父の眼はきびしい。極めて示唆にとんだ話である。

(昭和五十九年二月五日)

天知る、地知る、君知る、我知る

諸橋 轍次著 『大学新講』より

昔、漢に楊震ようしんといふ人があつた。或る時楊のところへ、暮夜人が訪ねて贈物をしたものがあつた。さて、その贈物をした人がいふには、今暗夜の事であるから知る者もない。どうぞ取り納めて貰ひたいと言つた。さうすると楊震は、お前は知る者が無いと云ふけれども、天知る、地知る、君知る、我知る、して見れば、知る者が無いと言ふことは出来ないと言つたといふ話が傳つてゐる。

(感想)

『天知る、地知る、人が知る。』とも云はれる。誰も見てをらぬと思ふ時、つい人は悪いと思ふ事をしがちなものである。その時この言葉はほんとうに生きてくると思ふ。幼

い時に、母より「悪い事をすればお天道様が見てをられる」とか、物を粗末にした時には、「お天道様の罰があたる」とか教へられて来た。そして、「正直な生活」「物を大切に
する生活」への心の規範としてきた。また人は自分の良心をどうしてもごまかす事は出
来ない。一番恐ろしいのは自分の良心と思ふ。自分の良心に恥ぢない生活を一生の道し
るべとしたい。

(昭和五十九年一月二十六日)

せんずるところ たゞ学問は 年月長く 怠ることなく
学びようはさのみかゝわるまじきことなり いかほど学
び方良けれど 怠れば功なし

本居 宣長

植木屋「橐駝」の話

小柳陽太郎著 『戦後教育の中で』より

せむしの橐駝は植樹の名人であった。凡そ長安の都の富豪で庭園をつくる者はすべて橐駝に命じて木を植ゑさせたといふ。

人あつて橐駝に聞く。「自分はあなたのやり方をひそかにならつて木を育てやうとするが、誰一人あなたに及ぶものはゐない。是非ともあなたの秘訣を伝授していただきたい。」この時橐駝は答へて言った。「自分には木が長く生きのびたり、繁茂したりするやうに仕向けることなど到底出来るわけではない。——橐駝は能く木をして寿且つ孳じならしむるにあらざるなり。——たゞ木の天しながに順つて以て其の性を致すのみである。」木の天といふのは木として天から与へられたもの、自分はその天性に順つて木がもつてゐる本性を發揮させてゐるだけだ。橐駝はさらにつづけていふ。「木の性は元來伸びることを欲し、その

根は適当な土で覆はれたいと思ひ、しかもたびたび土を変へられては困るといふ性質をもつてゐる。さらにその根もとはずきまなく地固めされなければならぬ。このやうな、木が本来もつてゐるねがひにかなふやうに、細心に、あたかも自分の子供に心を配るやうに植ゑなければならぬ。だが、ひとたび植ゑ終つたあとは、一切すてて顧みてはならぬのである。——その蒔まうるや子の如くし、其の置くや棄つるがごとくせば——天から与へられた本性は必ず全うせられるであらう。——すなはち其の天なる者全くして其の性や得ん。——私には秘訣といふものはないが、強しひていへばこのやうなことになるかもしれない。」それが橐駝の答であつた。

(柳宗元『種樹郭橐駝伝』)

(感想)

「その蒔まうるや子の如く、其の置くや棄つるが如し」の言葉が生きてゐる。木を育てることも、人を育てる事も同じだ。天から与へられた本性を生かすことに全精力は傾注される。しかも生きる力はそれ自身の内にある。こゝが大切だ。

(昭和五十八年十一月九日)

「木」のいのち

小柳陽太郎著 『戦後教育の中で』より

昭和における最高の宮大工みやだいくと言はれ、祖父から三代にわたって法隆寺の修復にたづさきたといふ。例へば樹齡二千年の山の木が切り出されて、お堂やお宮に第二の生の場所を得た場合、その木はおなじ二千年、あるいはそれ以上の年月にわたって建物を支へて生き続けてくれる、さう信じてきた。

勿論もちろんそのためには切り出された立木について、細心の心配りが要るのは当然だが、木にはそれにこたへてくれるいのちがある。そのいのちを信じ、それを守ることが宮大工の唯一のつとめだといふ。

現に法隆寺のヒノキは建立こんりゆうされて千三百年、いまだに生きてゐる。それは昭和大修理

の時わかつたのだが、隅垂木すみたるきや尾垂木など、軒を支へてゐるヒノキが、屋根の重みでかなり曲つて垂れ下つてゐた。ところが瓦や屋根土を降ろしたところ、その曲つた垂木が二、三日の中に曲りがもどつて元の姿になつたといふ。或は建物の柱など、たしかにその表面は長い間の風化によつて灰色になり、いくらか朽ちて腐蝕したやうに見えるが、その表面をカンナで二、三ミリ削つてみると驚くことに、ヒノキ特有の芳香がたゞよふといふ。

ヒノキは生きてゐる。しかも西岡さんの言によれば、「人間なら壮年の働き盛りの姿で生きてゐる。」西岡さんはその経験から次のやうに書いてゐる。

「わたしは法隆寺の解体修理のとき、樹齡二千年のヒノキが千三百年もの間、法隆寺を支えて来ていまもなおそれぞれの持ち場で役割りを果しているのを見て木のいのちの尊厳にうたれました。それは神としか思えません。

台湾で、二千年ものヒノキを並木で見たときもそうでした。ときの流れを枯れた色に変えて、樹齡にふさわしい風格と重味が、枝にも葉にもにじみ出ていました。わたしはこういう木に向かうときは一心に拝みます。

「宮大工の良心に誓って、そのいのちを殺すようなことはいたしません。」と。そのあとでわたしはノミやカンナをあてることにしております。」

（「法隆寺を支えた木」NHKブックス）

（感想）

木のいのちを知る人は、いのちに見覚めた人だ。いのちに目ざめた人にして始めて木のいのちを知ることが出来る。まさに宮大工の西岡常一さんは、いのちに目ざめた人だ。ヒノキの木に敬けんな祈りを捧げる西岡さんの姿を想像して、美しさを感じる。自分の対象とする物のいのちにふれてこそ、その物の持つ本性を最高に発揮できるものと思ふ。目には見えないけれど、心にふれ、生きている何かをはつきり感ずるに違ひない。

「木は二度生きる」といふ言葉は実に強い。人もかくありたいものだ。御国のために殉じた人々は、二度生れかはり、まさに死してなほ永遠の生命を保つ人と信ずる。それらの人々のいのちを生き残った人は大切にせねばならない。『良心に誓ってその人々の生命を殺すやうな事はしません。』と云へる人になりたい。（昭和五十八年十一月九日）

薬師寺西塔再建の心



薬師寺西塔（ヤマケイガイドより）

宮大工 西岡 常一述

ヒノキの南限は阿里山（台湾）で、その北方にある標高二千メートルの北丹大山へ何度かかよった。宮大工の口伝くでん「木を買わず、山を買え」を守って、用材の育っておる原生林をしっかりと見届けておくためだった。その木が尾根にあるか谷にあるか、日当たり、風当りはどうか、

といった自然条件によって、同種同樹齢でも育ち方がずいぶん違う。

「人間と同じで、木も一本一本性格が異なります。木のくせをのみこむためには、山

を買わなあかんですわ。そのくせをうまく組み合わせるのが宮大工の腕でしょうな。塔にも、重みのかかるところ、風に吹きつけられるところ、湿気の多いところがあります。その場所に適した用材を使うわけです。適材適所ですな。」

「見えないところにこそ、構造の大切な部分がかくされているんですよ。人間社会にもあてはまることやないですか。」

「東塔の裳層もこしの柱を見て下さい。北の柱には節ふしがないのに、南の柱には節だらけ。山の北側で育った木は北に使ってるんです。太陽に訓練されていない北側育ちの木を南に使うとヒビが入ります。峠の木は堅いので柱や梁はりに使いますし、やわらかい谷間育ちは、天井とか、長押ながしとかに使いたい。育った環境を大事にしようとするとう材はいくら多くてもよい。私は用材としての木の寿命は樹齢とほぼ同じだと見てますから、二千年先を考えると、いよいよ欲が出るんです。」

仕事、西岡さんは働くことを仕事と云う。西塔工事に全国から集まった十七人の大工に、

「あんたたちには心をこめた仕事を頼みたい。労働やなくて仕事や。」

とやかましくいったものだ。

「仕事というのは、力を出し切ってつっこんでいくことやと思います。塔づくりには仕える。自分自身が仕事になる。塔になる。それは信仰というてもええでしょうな。」

「労働やと思えば働く時間が優先します。時間があっても棟梁の命令を待つでしょう。そうではなくて仕事なら、大工一人々々の心の中にできあがった塔があり、自分はまどの部分を受持っているかがわかっている。だから一つの仕事が終れば、命令されなくてもつぎの仕事に没入できる。予定より早く西塔ができたのは、このためやと思います。」

西岡さんは法隆寺の小堂を修理していた若いころ、祖父に、

「お堂ではなしに、伽藍がらんを建てらんやで。」といわれている。

全体の伽藍配置の中の堂である事を忘れるな、という意味だ。

(昭和五十六年三月二十四日発行、毎日新聞より)

(感想)

宮大工西岡常一さんは本当に木を知った人と思ふ。表面の目に見える形や美しさを知

る事は誰にでも出来る。しかし目に見えない木の性格を知る事は簡単には出来ない。それを成し、木を活かした人こそ西岡さんであり偉いと思ふ。一本の木を活かすためには、その木の育った環境を重視し、『木を買はず、山を買へ』の口伝は真理を含んでゐる。適材適所といふ言葉が西岡さんにはほんとに生きてゐる。人を育て活かす教育もこゝにあると思ふ。人を知り尽くすことは至難である。しかし教育の第一歩は人を知ることにある。あとは誠意をもつて育てるのみ。西岡さんの何気ないこの話はまことに示唆に富んだ尊い話と思ふ。

(昭和五十九年五月十日)

馬を見る名人の伯楽の話

安岡 正篤述 月刊誌『師と友』より

これは『列子』や『淮南子』という老荘系の書物に出ておりました、昔から有名であります。秦の穆公ぼくという殿様の家来に、馬を相する名人の伯楽はくらくがおります、だんだん年をとったので達者なうちに子供たちに馬を観ることの秘訣を傳えておくようにと、主君から話がありました。ところが伯楽が答えて曰く、「私の子供は皆凡人であります。単に馬の良し悪しだけでなく形や筋骨でわかりますが、千里の名馬というようなものになつてくると、面構つらえや姿・恰好かっこうではわかりません。わからないところに神秘的なものがあるのです。それには私の子供たちのような凡物ではだめで、私の友だちに九方臯きゅうほうこうという者がおります。これなら私に勝るとも劣らぬ者であります。」というので、非常に喜んで、その者を召して馬を探しにやりました。

すると、ある日、千里の名馬を発見したという報告が参りましたので、早速それを取りにやりました。その報告には、牝の黄毛とあつたのですが、取りに行ったものが見ますと、その指定の馬は牝の黄毛ではなくて牡の黒毛である。牝・牡が反対、毛色も違つておる。どういたしましたでしょうかというので、その報告を聞かれた公が、伯楽を呼び出されて、「けしからんことじゃ。とんだ馬鹿者を君は推挙した。彼は馬の牝牡も毛色の区別もつかぬ。こんな者にどうして本當の馬の善悪がわかるか。」という詰問であります。そうすると伯楽、恐縮するかと思ひのほか、感嘆久しうして曰く、「彼はそこまで達しておりましたか。それでは到底私など及びもつかぬものであります。」と言ひ出しました。何のことだかわかりません。ところが伯楽の曰く、「大抵の者は馬の毛色とか形容とかを見て、本當に大事なところはわからぬものであります。彼はそんなものは観ておりません。彼は内を観て外を忘れ、その精を観てその粗なるものを問題としていないのです。彼は馬などというものを見ておるではありません。馬よりもつと大事なもの、すなわち天機というものを観ておるのです。試みに取り寄せて御覧なさい。」というので取り寄せてみると、果して千里の名馬であつたということであります。

そういう物の枝葉末節に捕われて、本質を失うということは俗人のことで、達人になるほど形骸や枝葉末節に捕われずに、真生命を把握する。そこに東洋文化のねらいがあるのであります。最も念とするところがあるのであります。

(感想)

馬をあつかふ伯樂が「馬を見ずして、その天機（天から授かった生れつきの才能）を観る」といふ事が眼目と思ふ。人を観る場合も同じではないだらうか。表面を見るのではなく、ものの本質を洞察する心の眼の働きこそ観である。どうしても私達は表面の目に見ゆる姿にとらはれ、あまり必要のないもの（粗）に気がつき、反面、その奥にひそむもの、根源的にして大いなるもの（精）を見失ひがちである。人を育てる教育の場において、特にこの必要を痛感する。口では簡単に云へるが、この天機を知る事は至難な事と思ふ。日頃の心構への大切さをつくづくと感じる。老荘の思想に含まれた東洋の教への深さをしみじみと思ふ。

(昭和五十八年十一月二十三日)

「木鶏」の話

安岡 正篤著 『童心残筆』より

昔、王の為に闘鶏を養ふ名人がゐた。ある日、王は彼に尋ねた。

「どうだ、もう闘たたかはせても好いか。」

「いや、まだいけません。今は丁度、から威張りして気を恃たもむ悪い時です。」

しばらくして王は彼に催促した。しかし彼は答へた。

「まだいけません。他の鶏の姿を見たり鳴声を聞くと昂奮して駄目です。」

しばらくして王はまた催促した。彼はなほ許さない。

「まだです。やっぱり傲然と構へて居って、客気が盛んでいけません。」

その後、王が重ねて催促した時、彼はやつとのことで承知した。

「まあ好いでせう。もう他の鶏の鳴声を聞いても平気なものです。ちよつと見るとま

るで木で作った鶏としか思はれません。含徳が充実したのです。これでどんな鶏がやつて来ても到底ものになりません。みんな戦はずして走るでせう。」
(莊子・達生篇)

(感想)

これはかつての不出世の力士、双葉山が修養の目標とした有名な話である。勝負士の窮極の境地をのべた味ひ深き話と思ふ。『含徳が充実したものです。』の言葉に深く考へさせられる。人生も見方によれば勝負である。人に負けまいと思ひ悪戦苦闘してゐるのがありのまゝの姿である。その戦ひの世界の奥に、ものに動じない静の世界、人を感化して止まない徳の力のある事をこの話により教へられる。そこはたくみのない無為自然の境で、東洋思想の理想とする世界である。不敗の境であり人生に処してゆく時深く味ふべきことばと思ふ。

(昭和五十八年十二月十一日)

優游自適といふこと

安岡 正篤述 月刊『師と友』より

昔、漢民族が、黄河の流域に定住しました時、一番問題になったのは黄河の氾濫はんらんで、これをどう治めるかといふ治水のこと、これが一番悩まされた民族の大問題でありました。何しろ文字通り千里を越へる長江でありますから、その途中に紆餘曲折うよきよくせつが甚だしい。へたにどこかで治水をやりますと、その反動がとんでもないところに起る。これは大きな難問題で、あらゆる方策、あらゆる経験をつんだ結果が、いかにも漢人らしい結論に達しまして、結局、水にさからはぬこと、言ひかへれば、水をしておもむくがまゝにおもむかせる、すなはち自由に流すことである。それでやうやく解決がついたといふわけです。水が抵抗を受けないで自由にゆつたりと自らおのづかにゆく、これが優游自適であります。適はゆくといふ意味の文字で、無抵抗でゆつたりと行きますから、これは気持が好いに

相違ないんで、したがって適するといふ普通つかはれる意味も出てくるのであります。

(感想)

東洋人は自然にさからはぬ自然と共なる生活を愛する。この優游自適といふ言葉には自然を愛した古人の悠々たる時の流れを思はせる。私達東洋人の好んで用ひる言葉であり、人の道に適した人生の在り方と思ふ。人間はいくらじたばたしても自然の中の一存在に過ぎない。自然を征服するといふ言葉ほど傲慢な言葉はない。天災地変に神意をくみとつた古人の心がとても尊く思はれる。自然をまろか拝み、自然を畏敬した先人の行き方の中に真実があるやうな気がする。人は自然の流れになつた生活をし、自然と共に生きることが一番幸せな道ではなからうか。

(昭和五十八年十一月二十二日)

い さ み

友清 磐山著 『続春風遍路』より

仁徳天皇十一年。大計画の耕地修理工事が行はれたが、その時の茨田まむたが二箇所崩れて、どうしても水を防ぐことが出来ず官民一同、弱り抜いた。時に神ありて天皇の夢に現はれ、武蔵の人強頸こほくびといふものと、河内の人疹子こえものこといふものをして、河伯かはのかみを祭らしめられたならば必ず水を防ぐことが出来るとのことで、さがしもとめてその二人を連れて来た。河の神の要求だからやむを得ず強頸こほくびは泣き悲しみつつも水に没いつて死んだ。それで一つの堤の工事は出来た。

ところが疹子こえものこは匏ひきい一つをもつて来て、塞ふさぎ難がたき水に臨まんで水中に投げ入れ、ウケヒて曰いはく、「河の神崇たたりて吾を以て幣まひと為す。これを以て今吾れ来れり。必ず吾を得んと欲おもはば此の匏ひきいを沈しめて泛うかがないやうにせば、吾は真まことの神と知てみづから水中に入らむ。若もし

匏を沈むることを得ずば、おのづから偽りの神と知らむ。いかにぞ徒らに吾身を亡はむや。」と。すると忽ち飄風が起つて匏を水中に引入れたが匏は浮んで浪の上を舞ひながら流れた。そこで衿子は死なずに防水工事を成功させた。これを日本書記の記者は「是れ衿子の幹に因りて其の身亡せざるのみ。」と註記した。

(感想)

書記の記者は「幹」を「いさみ」と読ませてゐるが、これは「勇み」と同じ意味である。この衿子の「勇氣」が己れの生命を救つた。人の世には、身内の人の病気とか、仕ることとかで、色々と神、佛に祈願せねばならぬ場面に遭遇する。その時は、真心をこめ、真剣に、威勢よく、いさみを持って祈願することが大切と思ふ。そこに必ずや神の感応があると信ずる。教師として教壇に立つのは一つの祈りでもある。このいさみが大切だと思ふ。そこに始めて人の心を動かす力が發揮されると思ふ。

(昭和五十八年十一月三日)

菊池武時の快挙

平泉 澄著 『菊池勤王史』より

菊池入道(武時)、櫛田宮の前を打過ぎける時、軍の凶をや示されけん、又乗打にしたるをや御咎めありけん、菊池が乗りたる馬、俄にはかにすくみて一足も前へ進み得ず、入道大に腹を立て、如何なる神にてもおはせよ、寂阿(武時)が戦場へ向はんずる道にて、騎打を尤とがめ給ふべき様やある、其義ならば矢一つ進らせん、受けて御覽ぜよとて上差の鎧を拔出し、神殿の扉を二矢までぞ射たりける、矢を放つと均しく、馬のすくみ直りければ、さぞとよとあざ笑て則ち打通りける、其後社壇を見ければ、二丈許ばかりなる大蛇(約六メートル)、菊池が鎧あたに中つて、死したりけるこそ不思議なれ。」とある。

(太平記より)

(感想)

これは元弘三年三月十一日(西曆一三三三年、今より丁度六百五十年前)、菊池武時は、九州探題の北條英時を打つべく、櫛田神社(博多区)の前を通つた時の出来事である。当時櫛田神社の前は馬を降りて通らねばならなかつた。しかるに菊池武時は戦ひの火急の事なので、馬に乗つたまゝ通り過ぎやうとした。ところが社前で乗馬が急に立ちすくんで一步も進み得なかつた。武時大いに立腹し、勅命を蒙つて、賊を討つのに神といへども乗打を咎めらるべきいはれないと叫んで、神殿の扉に鎗矢を二筋射込んだのである。かくて邪気を払ひ、一路馬を敵陣に進め勇戦奮闘し、最後は壮烈な戦死を遂げる。

この武時の戦陣に臨み、勅命とあれば何ものをも恐れぬ古武士武時の勇武に深い感銘を覚えずにはおかない。この勇みのまへには鬼神もこれを避け、邪神も降伏してしまふ。武士の靈氣を感じると共に、純忠の勇士の真面目を見る思ひがする。

(昭和五十九年二月十一日)

武士は相見互ひ

長谷川 伸著 『日本捕虜志』より

日露戦争が始つて間もない明治三十七年（西曆一九〇四年）五月の戦地のできごとである。

歩兵第三聯隊第八中隊の守永弥惣次大尉は、聯隊本部から将校、兵各一名の捕虜が来てゐるので見学するなら来いと連絡を受けて、中隊のもの、ことに兵卒たちが捕虜をどのやうに考へてゐるかを知りたく、全員を集合し希望の賛否を求めた。半数あまりが手を挙げ、残りは希望しなかつた。そこで中隊長はゆきたくない兵に対し理由を尋ねたところ、いづれ近いうちに戦場で見参するから、別段見たくないと言へがあつた。何人目かにわけを聞かれた一等卒の金子亀作は「氣の毒でありますから」と答へ、なぜ氣の毒なのかとの重ねての問ひに対して、

金子は、「武士は相見互ひであります。参りたくありません。」と答へた。

「武士は相見互ひとは」と再び中隊長の反問に、金子は答へた。

「自分は在郷のとき職人であります。軍服を着たからは、日本の武士であります。何処のどういふ人か知りませんが、敵ながら武士であるものが、運拙く捕虜となつて彼方かなた此方こなたと引廻され、見世物にされること、さだめて残念至極でありませうと察せられ、気の毒で耐りませんから自分は捕虜を辱しめたくありません。」と。

この答へは中隊長、守永大尉をこよなく喜ばせたのみでなく、前に見学希望の手をあげたものたちが、みるみる金子の説に同感の色を著るしく無言のうちに見せた。

金子一等卒は口先だけの職人でなかったのは、その後の相次ぐ戦闘で「八中隊の四天王」と謳うたはれ、数々の手柄を挙げてゐる。

(感想)

明治三十七、八年の日露戦争の頃までは、まだく江戸時代に培はれた武士の心が残つてゐた。葉隠の四誓願の中に述べられた大慈悲心といふものが残つてゐたやうに思ふ。

一職人といへども、一たび軍服を着たら武士の魂がこもつてゐた。だから敵の将兵も武士として尊敬した。捕虜のあはれな姿に慈悲の心が働いた。しかも表面やさしい慈悲の心を持ちながらも、戦場においては敵を倒して止まぬ真の勇氣を持つてゐた。そこが偉いと思ふ。この一兵卒、金子亀作も立派だが、その心を重んじた中隊長もさすがだと思ふ。

(昭和五十九年二月四日)

春は天地が元気に笑ひ、夏は天地が元気に大活動を為し、
秋は天地が厳肅に考へ、冬は天地が安らかに休養する。

友清 歡真著 「靈学筌蹄」より

大沢勘大夫の活学問

安岡 正篤著 『論語読みの論語知らず』より

酒井藩士の中に大沢勘大夫という奉行で立派な学問求道の士がいた。この人に名高い政治上の功績がある。それは或る年のことであつた。この地方は非常な旱魃で、もうすっかり水が涸れて、折角植えた苗が全滅の危機にさらされたことがある。その時大沢勘大夫は直接藩侯から「何か対策はないか」と質問があつた。すると勘大夫は「一策ありません。それは赤城山上の湖から水を引くより外に救う道はありません」と答えた。これは大変なことである。と言うのは、今日もその湖が赤城神社の近くに残っておりますが、ここには昔から湖の主が住んでおつて、これを汚すと大崇たかりがあるという伝説があつたからである。

迷信深い百姓達はこれを聞いて、みな怖れをなしていきり立つた。神主までが一緒に

なつて、[〃]取り止めて貰いたい[〃]と奉行に申し出る始末である。処が勘大夫は一向そんなことには頓著しない。神主に向かつて[〃]愚昧な百姓共が言うのなら話もわかるが、神官迄左様なことを言うとは以ての外である。いやしくも神というものは、正しい神であればある程、その土地・住民を救い給うのが本来である。従つてこの早魃に湖の水を引いて、百姓や作物を救うというのに、神や湖の主が喜びこそすれ、崇るなどということはあるべき筈がない。それを怒る様な神は邪神であるから、早速退治しなければならん[〃]と諄々と説き聞かせた。

そこで神主も理の前に屈して、[〃]それでは一つでできるだけ真心を以てお祈りでもさせて頂きましょう[〃]というわけで、遂に湖からの取水が決行されたのである。それによつて赤城山下一帯の土地が一つぺんに蘇生して、凶作・飢饉がふつ飛んでしまつたばかりでなく、もとより湖の主の崇りなど何事も起こらなかつた。そのために住民から非常な感謝を得たということがあります。なかなかこれではできないことでもあります。

その大沢勘大夫と三輪執齋先生に、或る日藩侯からお召しがあつて、[〃]今日は勉強会をやりたいと思うから、[〃]大学・朱子章句（朱子の書いた序文）の講義をして欲しい[〃]と言

う。処がまかり出た勘大夫が、「私共が講義をお耳に入れたところで、別にどうということもありませんから、一つ、殿が私共に講義してお聞かせ下さっては如何でしょうか」とお答えしたので、もとより学問自慢の藩侯のことでありますから、早速この言を容れて、得々として序文の中の「聡明叡智」について講義を始められた。曰く、「聡とは耳がさといふことで、言を聞き誤らぬこと、明とは目が利いて、見誤らぬこと、叡智とは、心がさとして、よくすべてに通じて物がわかることである云々」といった調子であります。

そうすると勘大夫がやお膝を進めて申しますには、「殿、しばらくお待ち下さい。聡というのはどういう意味であるか、などというような講釈なら誰でもできる。われわれは左様なことは聞きたくありません。例えば聡明叡智にしても、殿が藩を治められる上に於て、どんなにお聞き誤りがなかったか、或はどんなに物事の見誤りがなかったか、といった殿ご自身についての講釈を承わりたいのです」と。処がこれ聞いた藩侯は、「そこは名君でありますから、さすがにお前達と一緒に学問すると、実に善いことを教えられる」と言つて感激されたということです。

(感想)

正しい信仰と真の活きた学問の在り方を教へてくれた話と思ふ。「正しい神であればある程、その土地、住民を救ひ給ふのが本来である」といふ強い信念が、あらゆる迷信、邪教を打破し、真の幸をもたらすものと思ふ。これがなければ人間は魔霊の奴隸と化してしまふ。正神なればならず、その土地・住民に幸せをかかぶらせ給ふと信じ邁進すべく、多少の災難、さはり等にたぢろいではならない。この信仰の「勇み」が大切であり、尊いものだ。

また学問が字句の解釋にとゞまつてゐては、人の世に裨益するところはほとんどない。二宮尊徳先生の説かれた如く、字句の註釋は水の氷つて、つららになつたものであり、胸中の温気で溶かし、水として生かさねばならない。つららではものの役にたたない。万物を潤ほし、育て、止まぬ水こそ活きたものであり、世の中に役に立つものである。字句の解釈でなく、その意味を活かして日常生活に用ひるところに真の学問がある。「この藩主にしてこの奉行あり」の感がある。

(昭和五十九年五月四日)

最後の授業

小柳陽太郎述 『言葉のいのち』より

一八七一年、普佛戦争に敗れたフランスは、アルサス・ローレンをドイツに割譲することになった。フランスの作家ドーデーはその著「月曜物語」の中で、この領土を奪はれるといふ深刻な悲劇を背景にした一少年の体験を、「最後の授業」といふ有名な短編で描いてゐる。

いよく祖国と別れなければいけないといふその朝、村の小学校のアメル先生はフランス語の最後の授業に立った。

「みなさん、私が授業をするのはこれが最後です。アルザスとローレーヌの学校では、ドイツ語しか教へていけないといふ命令が、ベルリンから来ました。……新しい先生が明日見えます。今日はフランス語の最後のおけいこです。どうか注意して下さい。」

先生の言葉に愕然がくぜんとして、いつもとは全く違った真剣なまなざしで、耳を傾ける子供達の前で、先生はフランス語について、つきからつきへと話を始める。その中で「フランス語が、世界中でいちばん美しく、いちばんはつきりした、いちばん力強い言葉であること」や、「ある民族が奴隷となつても、その国語を保つてゐる限りは、その牢獄の鍵を握つてゐるやうなものだから、私たちの間で、フランス語をよく守つて決して忘れてはならないこと」などを話していった。

突然教会の時計が十二時を打ち、続いてアンジェリュスの鐘が鳴つた。と同時に、調練から帰るプロシヤ兵のラツパが私たちのゐる窓の下で鳴り響いた。……アメル先生は青い顔をして教壇に立ちあがつた。これほど先生が大きく見えたことはなかつた。

「みなさん」と彼は言つた。

「みなさん、私は……私は……」

しかし何か彼の息をつまらせた。彼は言葉を終へることができなかつた。そこで彼は黒板の方へ向きなほると、白墨を一つ手にとって、ありつただけの力で、しっかりと、できるだけ大きな字で書いた。

「フランス萬歳！」

さうして、頭を壁に押しあてたまゝ、そこを動かなかった。

そして、手で合図した。

「もうおしまひだ……お帰り。」

〔「高校と教育」 昭和五十八年十二月号〕

（感想）

最後に、頭を壁に押しあて、肩をふるはせ心の中で泣いてゐるであらうアメル先生の後姿が目に見えかぶやうだ。母国語を失った民族の悲しみである。最後の言葉は「フランス萬歳！」であり、永遠のフランスの生命を祈り、称へてゐる。国語はその国の生命であり、国語の盛衰は民族の存亡につながると云へる。現代日本の国語の活力の衰へはまさに亡国の兆しと云つても過言でないかも知れない。言霊の幸ふ国と云はれ、言葉を大切にしたい国である。日本語を正しく用ひ守ることは、国を守ることであり、大切にしていきたいと思ふ。

（昭和五十九年五月十四日）

河村幹雄博士と学生

榎本隆一郎編 『河村幹雄博士の生涯とその思想』より

先生は一見蒲柳の質かと思われる様な体格の方で、胃もお弱いようであった。併しかしその精神力たるや極めて旺盛で、雨が降ろうが雪が降ろうが、決して野外調査を休むなどと言ふことはなく、藪でも河でも調査すべき所はどんな所でもどどん踏破され、若い学生の我々をして啞然たらしむるの概があつた。そして朝から晩まで黙々として自ら歩測して地形図をつくり、岩石の走向傾斜を計り、サンプルを採集し、要所要所をスケッチして地質図を作り、無言の中に我々を指導されるという風であつた。(中略)

こんな地質旅行をつづけながら、飛驒川の清流峡谷を遡さかのぼり、民謡で名高い木曾の御岳さんを右手に仰ぎ、乗鞍岳等の北アルプスの諸連峰の頂に輝く残雪を望んで、わずかに涼をいれつつ、やがて高山の町も過ぎ、神通川を下り、左手に加賀の白山を望見して愈々

最後のコースに入った。そして午^{ひる}より強行して七里の行程を踏破し、今宵こそ終着地の富山に着かんと疲れた足に鞭打ちながら、遙かに越中の平野を望む庵谷の峠にさしかかったのは夕陽がようやく西の山にうすずき初める頃であつた。

一行は峠の頂の僅かばかりの平地に腰うちおろし、汗を拭いつつ一息いれた。これより先私共は先生の胃のお弱いことを知っていたので、途中高山の町で平野水を手に入れ、代る代る担つて来たのであつた。ふと見ると先生は、夕陽を背にうけて如何にも感銘深げに、遠く越中平野を望んでおられる。この時学生の一人在平野水をあけて先生におすすめすると、先生には意外とも感極まつたとも言ひ知れぬ面もちで、この炭酸水をうやうやしく受けられたのである。この時私共は、黙として夕風の中に立つておられる先生の種類高なる風姿に心打たれ、何となく平素の御苦勞の一端をつぐない得たような気安さを感じたのである。先生はこのときの感懐を一連の和歌に托され当時の雑誌『日本及日本人』に寄せていられる。私は今も昨日の如くこれを心に銘し、時折誦して先生の高風を偲んでいる。その一連の和歌とは次のようなものである。

今宵こそ富山につかむ急げやと午ひるよりはやも七里あゆみぬ

庵谷の峠のほればしかすがに長き夏の日たそがれそめぬ

みはるかす北の方には谷のひまゆ越中の野のみゆるがうれし

十日あまり五日の旅も今日終ふと思へばなつかし過ぎにし日々の

夕映ゆうばえの空をながめてもの思ふ折しもわれよぶ学生の声す

みかへれば学生達はほゝゑみて炭酸水をさゝげて立てり

いかにしてかゝる処にさるものを手に入れたるといぶかりたづぬ

師の君の好みたまへば飛驒の国高山町ゆ購ひ来ぬと

さるものをわがたしなむと心こめになひて来しか飛驒の山路を

高き山深きはざまのたゝむ中ひとり行くだに苦しきものを

われ一人うくるに堪へずこの水は世の師てふ師の名によりてうけむ

二十里の山路はるけく若人がはこびし情の水の味よ

若人の情の水を庵谷の峠にくみし喜びわすれじ

今宵しも旅は終りて西東身はわかるとも心はわかれじ

注 河村幹雄博士、明治十九年（西曆一八八六年）北海道札幌に生れる。同四十一年東京帝国大学理学部地質学科卒業。恩賜の銀時計下賜される。卒業後九州帝国大学助教。大正八年教授。三十四歳の若さで工学部長に就任。昭和五年「斯道塾」を設置。昭和六年十二月永眠。享年四十六歳。

（感想）

先生と生徒の清らかな、真心の世界をこゝに見る思ひがする。先生は生徒を思ひ、生徒は先生を思ふ、このまごころの交流が教育と思ふ。「この水は世の師てふ師の名によりてうけむ」のお言葉にジーンと私は目がしらが熱くなった。まことにもつたいないお言葉である。教師の道を歩んだ私の幸せをつくづくと思ふ。制度を変へることによる教育改革も悪くはないが、教育の正しい姿は、この先生と生徒の心の問題にあると思ふ。こゝがしっかりとをればきつと立派な教育は成り立つものと信ずる。この師弟交流の心の回復こそが今一番望まれてゐるものと思ふ。

（昭和五十九年五月二十日）

仁^に
戸^え
田^だ
巧^{たくみ}
教諭の最期

—— 先祖の墓前に壮烈な自刃 ——



学校奉職中の写真(昭和20年)

その日(昭和二十年八月十八日)の朝、佐賀市伊勢屋町曹洞宗大覚寺住職村山良淳の母静江は、日頃の習慣どほり、夜明けと共に寝所を離れ、まず本堂をきよめ、庭におり立った。ほうきをもち、ひと掃きして、本堂のカギの手に当たる庫裡くらり、その二階の仁戸田先生の部屋を見上げた。

妙な予感が走った。いつもならその時間、開けっ放した窓からは、つるされた虹帳かやが見えるのにそれがない。ハツと思つた彼女は二階へ駆けあがった。そこに見たものは、きちんと整理された部屋の隅に置かれた机の上にある一枚の紙片であつた。それには、きちんとした字で、

「精金寺ニオイデヲ乞フ」とだけあつた。

娘タツ江を呼び、直に精金寺へ走つた。そこは仁戸田家の菩提寺である。わずか二キロの道のりがとても長いものに思へた。駆けに駆け佐賀市大財町臨濟宗精金寺境内に飛び込んだ。足は自然と境内の西の隅に近い仁戸田家墓地へと向つた。そこで見たものは



仁戸田教諭が自刃した
佐賀市精金寺の墓前

壮絶なる日本男子の死の光景であった。真夏の朝の太陽に照らしだされてゐる白と赤との鮮烈な印象が二人の眼に焼き付いた。

墓石一面に鮮やかな血しぶきでぬれてゐた。

墓前に白装束しろぢゆうそくの下着の上に白がすりの着物、袴はかまをつけて正座し、真新しい桐の下駄が、キチンとかたはらに揃へられ、左手は、命絶へたその

ときも膝上に正しくおかれ、右手に握った日本刀は、やや膝前をすべった形で上体をわづかに右斜めに傾けただけで、ほとんど姿勢が崩れてゐない。その日、昭和二十年八月十八日、旭実科女学校（現在旭学園佐賀女子高等学校）教諭仁戸田巧はかうして葉隠武士の

「武士道トイフハ死ヌ事ト見付ケタリ」

そのままの姿をもって、終戦といふ祖国非常の大難と運命を共にしたのであった。検死に立会った富永春樹医師が、

「実に見事な自刃であり、言語に絶するものだ。」

と語ったその死の様は、右手にタオルを巻いて持った日本刀で、右頸部を二度まで突き、三度目に右頸動脈を見事に断ち切つてゐるのである。余程すさまじい気魄力を持つた人にしてはじめてなし得ることである。

精金寺は、このとき、まだ家族は全員疎開先から戻つてなく、住職ひとりだった。やがて駆けつけた成松憲造住職はじめ、警官、友人らは、余りの見事さに、我を忘れたゞしばし茫然自失した。やがて嗚咽おえうの声とかはつた。

墓前には親しいものに宛てた遺書が五通、それにまだ墨の香も匂ふやうな「武士道トイフハ死ヌ事ト見付ケタリ」の「葉隠」の言々十章があつた。

遺 書

昭和貳拾年八月拾四日、大詔渙發さる。日本國民ひとしく頭を垂れ號泣す。我れも又日本人なり。戦争終了の報を聞き、思慮一日悶々たり。茲に一文をなし、参拾老年我を慈くしみ育てくれし親、兄弟、且周圍の人々に對し、御別れの言葉とせん。又老年有餘自己の魂を注ぎ育てた組の生徒には、我れ無き後の教とせん。日本人たる者、承諾必謹

は古來からの信念なるも、敵米に對し一撃も加へ得て生を絶つは、日本男子としては是にまさる口惜しさはなし。幼い頃よりの夢、兵學校入學を健康のため果し得ざりしは、残念此の上無きも、娑婆に於て、兵學校精神を生かす事不可能な事にはあらずと、凡夫なる事を知りつゝも、其の精神の把握に是れ勉めしなり。教育界に身を投じてからは、此の精神を生徒へ受け継がせる事が、我れの勤めと考へ、健康の許す範圍に於て努力せしも、意志の弱さと徳の足らざるか、充分の訓育を爲し得ず今日に至る。敵機頻々と皇土を襲ふ。其の度我れは他の同胞と同じく、敵撃滅の闘魂をいやが上にも燃やし、原子爆弾出現にも全員玉碎の肚を決め居りしなり。しかるに、陛下、大詔を降し給へり。戦は終了せり。不忠なる我が身の此の戦局へ持ち來たる罪、真に大なるべし。こゝに於て、不忠なることを充分に承知の上、肉體の終焉を告げたく考ふる次第なり。君、辱しめを受ければ、臣、死す。只日本の大勝利の實現せざりし事のみ胸をかきむしりたき思ひなり。戦争に増す今後の苦難の道を残る人々に任せ先に立つは、陛下の御言葉にも叛くとも考へられ、心苦しく感じられるなり。人一倍世話をかけし私、再び親に先き立つ罪を犯すか、父よ、母よ、自己の事のみ處理し、生を絶つわが子を御許しあれ。

辭 世

すめらぎに身も心をも捧げてぞ大和男子の甲斐はありける

昭和貳拾年八月拾七日

仁戸田 丂

時に数へ年三十一歳。戒名は 泰嶽清風居士。

仁戸田にえだたくみ丂は大正四年十一月十三日、佐賀県佐賀郡東与賀町からみ搦に、父隆次、母ハマの間

に次男として生まれた。父の勤務の都合で、少年時代は福岡市ですごし、大名小学校卒業後、福岡県立修猷館中学に進み、海軍兵学校を目指したのだが、身体が弱かったため断念、早稲田大学政経科に学んだ。だが、健康がすぐれずに中退、帰郷して、療養にとめてゐるうち、父君は実業のため朝鮮の京城に赴き、母君もまた渡鮮し、まもなく仁戸田は、一人縁故を頼って佐賀市伊勢屋町の大覚寺に寄宿しながら、旭実科女学校教諭

としての朝夕をすごしてゐたのだつた。

ちなみに、最初の発見者であつた大覚寺住職夫人の母静江は、かつて、ハルピン原頭に散華した有名な明治の志士沖禎介（長崎県平戸出身）の姪にあたる。また仁戸田が旭実科女学校に奉職したのは、同校に勤めてゐた友人田中則道教諭の推せんであり、昭和十八年から数学と商業を教へてゐた。

砂川といふ教へ子は當時を回想し、

「先生はとても背が高く、お顔が色白かつた。私たち女学生には、ちよつと外人をみるやうな感じでした。ご性格は、非常に几帳面きようめんで厳きんしいお方でしたが、時々ユーモラスな事も言はれる一面ももつておいででした。厳きんしい戦ひのことに話がいくと、『日本は決して負けない。負けたら私は切腹して死ぬ。』とおっしゃつてゐたお言葉が、今も忘れられません。」

と語つてゐる。また、田中教諭は、

「先生は熱血漢だつた。正義のあるところ、いかなるものも恐れない、といふふうであり、また、生徒のため学校のため、と思ふ時には、自分のことはいっさい顧みずに堂々

と正論を吐いて屈せず、あるときのことだが、真夜中に教頭宅にのりこんで大喧嘩に及んだこともあった。」

と、その一面を伝へてゐる。なほ、大覚寺には、仁戸田教諭のほか、十数人の生徒も寄宿してゐた関係上、日夜、仁戸田教諭の薰陶くんとうを受けてゐた。

戦局いよ／＼厳しさを増しつゝあつた昭和十九年八月、己れの心境を次のやうに綴つてゐる。

「私の心の中にある醜みにくきは、自己の力で矯正せねばならぬ。その力は自己のみにある。弁解をするな、意志を強く、この二つの困難ではあるが今の私にとり、最大の緊急事を完成しなければならぬ。毎日の常事の中にこの二つの弱さが顔を出す時、私は断じて退けねばならぬ。強きものこそ美である。弱さには美はない。すべからず強く生きねばならぬ。そこにはじめて死の意味がある。死こそ強く生き抜く最高の原理と信ずる。朝刊には、我が小笠原列島父島へ、敵が触手を伸ばしはじめると報じてゐる。時局ますます多端、果して私はこのまゝでいいのであらうか。皇国第二の母性を教育する美名にかくれて、安逸をむさぼつてゐるのではないか。我々は常に瞬間々々米英的自由思想と戦つ

てゐる。この思想を完全に抜け得たとき、私は真の幸福を把握出来ると確信してゐる。そしてこの思想との戦ひは日常の戦ひなのだ。何年来、患^{わづ}つた肋膜の癒着がまだ大きく残つてゐるらしい。しかし休職したとて所詮しかたはない。体は休まっても、精神に多くの雑音を招くに違ひない。一途に生徒を愛し、生徒の善導に心を傾けることこそ、精神と健康の浄化である。」

大戦の局面が刻々と凄惨さを増すにつれ、中学・女学校の生徒らも、会社や工場に勤労働員され、仁戸田教諭も担任クラス商業科四年の生徒を引率、市内神野町の大和紡績佐賀工場に通つた。

昭和二十年八月二日付の福岡の姉洋子への最後の手紙には次のやうに書かれてゐた。

「先日は小生等の働きをる工場を醜^{みにく}き敵機、機銃掃射を加へきた。生れて始めての敵弾の音を耳近く聞く体験を得候。生徒の身を案ずる責任にて恐怖と云つた気持は別にこれ無く、たゞたゞ敵機を腹の底からにくくしく感じ、石が目前にあれば投げつけてやりたき衝動にかられ候。今後も生徒の生命を守るためには、自己の身は露と消えぬとも、頑張る覚悟に候。此の頃、毎日の空襲に日本人の血をたぎらせをり候。

辞世の歌

すめらぎに身も心をも捧げてぞ大和男子の甲斐はありける

日本人であればまさかの時には、恥ぢない身の処置をとり得るとの確信をかち得たことは、此の度の空襲の尊き体験に御座候。」

そこには己が一身を顧みず、生徒の上をたゞ思ふ心が溢れてゐる。

さらに、当時その同じ工場に通つてゐた石橋弥作氏は、仁戸田教諭の日常をかう語つた。

「私は、大和紡績工場裏の自分の家の近くにあつた、藩祖鍋島直茂公の銅像台下に横穴式の待避壕を掘り、それを先生と一緒に避難してくる女学生に提供し、仁戸田先生と二人でいつも監視の立番をしました。機銃掃射を何度も受けましたが、一度も壕の中にはお入りにならなかつた。昭和二十年八月十二日、最後の敵機来襲のときは忘れられませんが、低空ではげしく襲ってくる敵機の機銃掃射に、先生は、いささかも臆することなく、銅像台座の周囲をかけ廻り、敵弾をさけながら、敵機の数と進入方向を、近くに待避中の人々に大声で指示してをられた。その剛胆さと沈着な態度には、皆、ど胆きまを抜か

れる思ひでした。」

海軍兵学校を志してならず、さらに、病軀のゆゑに、戦陣に敵兵とまみえる機会もな
いまま、今、無手で敵機の前に立つてゐる。愛する教へ子は、われなきあとも、かなら
ずこの国を護りつづけてくれるであらう。この子らを一人でも殺さしてはならぬ。一人
でも多く同胞を守らねばならない。本土決戦の日が、日々近づいてくる事がひしひしと
身を感じた。わが一身がなんであらう。

かうして、一億の日本人がひとしく泣いたあの八月十五日、終戦の日を迎へたのであ
る。その日は、工場はたま／＼休みだった。仁戸田教諭は、大覚寺で、寄宿中の女学生
らと一緒に、天皇陛下の玉音放送を聴いた。皇国の必勝を信じてゐた若き乙女らは、感
極まり、身もだえしてみんなが泣いた。

しばらくしてから彼は、少女たちに、将来の心がけを懇々とさとし、翌十六日朝から、
受持生徒の家庭を歴訪し、戦ひは敗れたが、決して気持までもが敗けてはならないこと、
日本は必ず再び起ちあがるときがくること、国民として、しっかり覚悟をかためておく
ことが大切で、そのためには勉学を怠らず、健康にもくれぐれも気をつけることなど、

実に懇切に行き届いた言葉を一人一人に遺していった。そして、自分の蔵書を一冊づつ与へていくのである。それが生徒たちへの遺言であり、遺書であり、この世の別れであったのだが、余りの淡々さと、平常と少しも変はらぬ恩師の姿や声に、誰一人それを感じとることができなかつた。

翌十七日、市中では、朝からアメリカ兵上陸のデマや婦女子避難指示、といった誤報があつたりして混乱と動揺のうちに、日が没した。仁戸田教諭は、そんななかをも、知人や、ふだん世話になつた人々を訪れ、それとなく今生最後の別れをしていった。

この日、つまり八月十七日の夕方、仁戸田教諭は住職夫人の母、村山静江に風呂をたいて欲しいと頼んだ。静江はこゝろよく引き受けたが、避難する近所の世話などに追はれて用意がおくれた。仁戸田教諭は、待ちきれなかつたのか、大覚寺に近い多布施川に出かけ、清流で水浴して帰り、「さっぱりした」と晴れやかな表情であつた。その夜、仁戸田のやうすに変つたことはなく、「いざといふときは一緒に死ぬ」と云ふ静江らと、仁戸田はおそくまで話し、ときには腹をかかへて笑つた。

当時、大覚寺の門前に前山達次といふ友人が住んでゐた。仁戸田教諭が自刃に使つた

刀は、その前山家に代々伝はつた無銘の古刀だった。それが仁戸田の手に渡つたいきさつは、前に仁戸田がアメリカ兵の本土上陸にそなへてぜひ入手したいと住職夫人の母静江に、その実家の平戸から日本刀が入手できさうだったため頼んでゐたが、交通事情の悪化で実現をみず、その代りとして、静江さんから、大覚寺にあつた槍一筋を貰つてゐたのを前山の刀と交換したのである。

その友人前山達次にも数々の思ひ出があつた。

「先生は、ふだん、かすり 緋はかまに袴はかまをつけられ、武士のやうな風格を備へてゐられた。万葉集にも造詣が深く、陶器にも趣味がおありで、鍋島焼を差上げたこともある。よく“死”といふことについて語つてくださったが、一面、なかなかユーモアのある人だった。亡くなられる前は、アメリカ進駐軍を見たくない、とはつきり云つてをられた。」

と語つてゐる。当時、この仁戸田教諭自刃のことは、アメリカ軍の駐留といふこともあつて、できるかぎり内密にされ、新聞・ラジオ等ではいっさい報道されないままに終り、わづかに旭実科女学校が、その急死を学校で生徒に知らせるとどまつた。通夜がしめやかに大覚寺で行なはれた。参集した教へ子や、生前親しいつきあひをしてゐた人々

は、自ら生命を絶ち、一皇民としての責を全うした先生の死の意味する深き尊き教へを胸にひめ、たゞ御霊の安からむ事を祈った。ふだんこれまでに垂れた行ひ、み教へを思ひ浮かべ、心にかみしめ、涙ながらにその死を惜しんだ。

仁戸田教諭と起居を共にした大覚寺住職村山良淳氏は後にかう語った。

「先生は、誠に、几帳面で潔白、やさしく、また親思ひで、教へ子の世話は、あまでもできるものか、と思ふほどされた。かねがね、*「葉隠論語」*を研究されてゐたが、暇さへあれば読書に親しみ、吉田松陰先生を最も崇拜してをられた。」

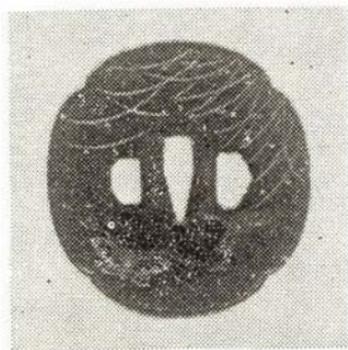
ここに於て思ふ。仁戸田教諭がひとすじに求め、踏みつつあつたもの、その教育道がどこにあつたかを。戦後すでに四十年にならむとしてゐる。戦前も戦後もこの道に変わりのあるはずがない。先生の「一死もつて皇国の運命に殉じた心は、遺書の中の「君辱しめを受ければ臣死す」のこの言葉に尽きると思ふ。自ら日本を戦勝に導き得なかつた自責の念に殉じたのである。大君を憶ひ、國を思ふ心、これ程深く、厚きものはない。まさに教育道の根源はこのまごころにある。これは親を思ふ心に通じ、教へ子を思ふ心に通じる。この真心の教育——魂の教育——が今最も必要としてゐる。戦後教育の困乱は

この根幹にあるもの、喪失にあると思ふ。

終戦の時、死すべき時を失ひ、戦後生き残つてゐる私には仁戸田先生の行為を思ふと、慙愧の念で胸がしめつけられる思ひがする。まさにこの日本人の生きるべき道を実践した仁戸田先生は教師の鑑かがみであり、郷土佐賀の誇るべき烈士と思ふ。残された日本人としてこの先人の遺徳を顕彰し、後の世に伝へ残すことが今なすべき私達のつとめと思ふ。

(参考資料、毎日新聞佐賀版「佐賀県の戦後史」及び「激動の二十年」より)

昭和四十六年二月発行「殉国の教育者」掲載



自刃に用ゐた日本刀の鍔

嗚呼六士先生

——
今顧みる芝山巖精神
——



中島長吉先生 井原願之助先生 平井関口先生 数馬先生
 桂金太郎先生 榎取道明先生 長太郎先生

はじめに

今を去る八十八年前、明治二十九年（一八九六）七月一日、台湾台北市の郊外北へ十二軒、八芝蘭士林の街の小高い芝山巖しざんがんといふ丘の上に、折しも高さ一丈三尺（約三米九〇糖）、幅二尺（約六〇糎）、厚さ一尺六寸（約四十八糎）の安山岩よりなる一基の碑が建てられた。表には、

「学務官僚遭難之碑」の八大文字が、裏に

は、「台湾全島、我が版図に帰す。故を革め新しきに鼎す。声教を先と為す。正五位榎取道明等六人、学務を帯び、八芝蘭士林街に派す。其事に専従す。土匪の蜂起に会ひ、道明等之に死す。時明治二十九年一月一日也」（原漢文）

といふ文字が刻まれてゐた。

内閣総理大臣大勲位侯爵 伊藤博文書

明治二十九年七月一日は、後に六士先生と称讃された六人の先生方——楫取道明・関口長太郎・中島長吉・桂 金太郎・井原順之助・平井数馬の諸先生方——の壮烈なる遭難半周年に当る。此の日に台湾総督府主催による盛大な慰霊の式典と共に、この建碑がなされたのである。

芝山巖遭難事件

明治二十七・八年の日清戦役後、台湾領有初期に私達日本人の忘れ得ぬ二つの悲劇的出来事があった。その一つは未だ帰順せぬ匪賊を打払ふため、当時の近衛師団が台湾征討軍となつて、風土病や悪疫の多い現地に、島北部より南部へと転戦中、明治二十八年十月二十八日、台南の地で近衛師団長 北白川宮能久親王殿下の御戦病死といふまことに御いたましい出来事であつた。(五年後の明治三十三年台湾の鎮めとして、台湾神社が台北市の北、靈峰劍潭けんたんの峰に創建された時、御祭神の一柱として御霊は齋きまつられ、その後永く御遺徳を偲びまつると共に、台湾統治の精神的拠より所として全島民にひとしく仰がれた。なほ毎年十月二十八日は台湾神社の大祭日として、台湾全島をあげて終戦の

年まで盛大に奉祝された。

その二は、明治二十九年一月一日、芝山巖の地における前記六人の先生方（学務官僚）の遭難事件であった。当時、台北を中心とする台湾北部地方一帯は表面平穏に見えてゐたが、暗雲低迷、明治二十八年暮頃は、土匪襲来の流言しきりに起り、物情騒然として、住民は安き日として一日もない有様であった。

果然十二月三十一日夜半、匪徒は峰起し、台北附近一帯は大混乱を来たした。明けて一月元旦早朝、六人の先生方は芝山巖学堂より南へ十二軒ばかり離れた台湾総督府正庁に、新年の拝賀式参列のため山を降りてゐた。途中匪徒に遭遇しその襲撃を受けた。かねてこの事あるを予期してゐた六人の先生は、来襲者あれば諄々としてその行動の順逆と、大義明分を説き聞かせ、よく話し合ふ覚悟を固めてゐた。にもかかはらず、暴徒はその説得にもがえんぜず、槍をもつて襲ひかゝり、やむなく先生方は応戦し、白兵戦となり奪戦これつとめたが、多勢の前にはいかんとするすべもなく、全員壮烈なる死を芝山巖の地に遂げた。（その後半年後——明治二十九年七月一日——前記建碑祭が行はれ、つづいて十年祭の行はれた明治三十八年には招魂碑が同じ土地に建設された。また昭和

五年一月三十一日にこの地に芝山巖神社が創建され、六士先生始め、台湾の教育に殉ぜられた数多くの御霊が合祀された。その英霊の数は三百三十七柱であった。毎年二月一日例大祭が斎行され、各学校の児童生徒は言ふに及ばず、各種官民団体の参拝は日没におよんだ。

伊沢修二と台湾領有初期の教育

明治二十八年（西曆一八九五）四月十七日、

時の内閣総理大臣・伊藤博文、外務大臣・陸奥宗光と、清国の代表李鴻章との間に、いはゆる下関条約が締結され、台湾の日本領有は決定せられた。

日本国内では新領土の住民に対する教育が重



伊 沢 修 二 氏

大なる関心事となった。時の政府は初代台湾総督に、海軍大将男爵・樺山資紀を任じ、ついで教育推進の中心人物として、初代学務部長心得に伊沢修二を任じた。

伊沢修二は嘉永四年（一八五二）しなの信濃国（長野県）伊那郡高遠たかとほの生れで、貧乏な家庭

に育てられながらも、刻苦勉励して明治八年（一八七五）アメリカに官費生として留学し、ブリッジウォーター師範学校を卒業した。ついでハーバード大学で教育学と理学を研究し、さらに地質研究のため各州の視察をした。この間にグラハム・ベル氏から視話法を、またメーソン氏から音楽を学んだ。

明治十一年（西暦一八七八）アメリカより帰国後、東京師範学校長補に任ぜられた。翌明治十二年には二十九歳の若さで、同校の校長に任ぜられた。また同時に「音楽取調御用係」を兼ね、本格的に音楽教育に取組んだ。ちなみに、明治以降、永らく国民の間に親しまれた四大節奉祝歌のうち、「紀元節の歌」は伊沢の作曲したものである。また今もなほよく歌はれてゐる「螢の光」はスコットランドの民謡の曲をとり入れたものであるが、この選曲は伊沢によってなされたものである。

その後、明治二十年文部省編集局長として国定教科書の編集に従事すると共に、東京音楽学校長を兼任した。明治二十四年、四十一歳で文部省を非職で辞任するまで「国家教育社」の創立、東京盲啞学校長の兼任など、我が国文教の各方面にわたって、多角的な活動を展開した。アメリカ帰国後の伊沢は、まさに西洋における初等・中等教育の諸

方式を我が国に移し植ゑるため、日夜多方面に精力的活動を続け、特に音楽教育を児童に教へるため、我が国文教政策の大綱を整へたのである。(なほ、晩年における吃音矯正の功績は余りにも有名である。)

かくて、明治二十七年、日清戦役を迎へ、その終末とともに下関条約が結ばれた後、みづから台湾の教育に当らんとする熱意に燃え、広島の本営(だいほんえい)(戦時に天皇のもとに置かれた最高の統帥部、当時、明治天皇は御親しよしく広島に御滞留になられてをられた。)に初代総督・樺山資紀を訪ね、台湾における教育に率直な意見具申を行った。その後、学務部長心得を拝命、戦雲いまだをさまらぬ台湾に、明治二十八年六月、樺山総督に従ひ勇躍赴任した。まさに四十五歳の最も円熟した年齢であつた。

始めより激しい敵の抵抗にあひながら、台北北部の要港・基隆(きりうん)南方の三貂角に上陸、その後平定作戦をつづけながら南下、六月十七日に台北に入り、台湾総督府が開庁され、統治活動が開始された。(この日を始政記念日として、終戦の日まで毎年お祝ひした。)

未だ戦火のおさまらない中であつて、翌十八日伊沢ら学務部員一行は、台北市内の大稲埕(とうけい)の町の一民家を借りて学務部を設け、そこで教育業務を開始した。しかるに、住民

の多くは難を避けてその地に居らず、子弟を集めることが出来ず学校開設の見込がたなかつた。

ところが台北より北へおよそ十二軒ばかり離れた八芝蘭士林といふ町は、昔より学問の町と言はれ、学者を多数出した町であることが分かつた。この地こそは後に伊沢が「佳なる哉その風景、宛然京都の観あり、すなは即ち台北城は皇城にして、基隆川は鴨川の如く、

けんたんざん劍潭山は東山に似たり。」と称讚した山紫水明の

地であつた。この町の北部の小高い丘、すなはち芝山巖の丘の上にある一廟をびやう学堂と定め、七月二十二日頃に学務部を大稻埕よりこゝに移転し、本格的な教育活動を開始した。これが芝山巖学堂の始まりであり、また我が国の台湾における教育活動の発祥であつた。

しかし、なほ附近のそうざん草山・ほくざん北山には匪賊の根拠地があり、不穏な状態であつたが、大胆な伊



芝 山 巖 学 堂

沢学務部長は敢然として楯取道明等随員と共に、廟に泊り込み、文字通り献身的教育活動が続けた。その内、僅かながらも台湾人子弟も序々に集り、順調なスタートに見えた教育活動も、その後五ヵ月後の明治二十九年一月一日、前述の芝山巖遭難事件といふ世にも痛ましい大事件に遭遇したのである。折しも伊沢学務部長は、前年十月二十八日に台湾南部に転戦中、台南の地において御薨去遊ばされた台湾征討軍の近衛師団長 北白川宮能久親王殿下の御霊柩をお伴を申し上げて日本内地に帰国中であった。

芝山巖精神の発祥

日本内地で悲報を受けとった伊沢修二の悲歎は言語に絶した。彼は自分の限りない悲しみをいやすべく、また得難い腹心の部下六名の志をむなしくしないために、台湾に帰るとすぐに、芝山巖上に遺骨を合葬し、こゝを台湾教育の守護のために永く神霊鎮座の聖地と定めた。

伊沢修二学務部長は、明治二十九年七月一日、始めに記した建碑祭と同時に執行された六士先生の慰霊祭において、涙をのみつゝ次のやうな祭文を霊前に捧げた。その間、

感極まって、声の絶える事数回、聞く者のうち泣かざる者は無かつたと云ふ。

「嗚呼、楫取道明、関口長太郎、中島長吉、桂金太郎、井原順之助、平井数馬の諸君よ。余が諸君と手を携へて此地に來りしは今より僅一年の昔なり。凶らざりき今日幽現相隔りて互に相見ることあらんとは。ある時、諸君の植ゑ賜ひし庭の草木は、いつしか花咲き実を結べり。千々に心を砕かれて建てさせ賜ひし学の舎には、数多の生員を養成せられ、今こそ台湾全島に教の種時く時なれとて、おのゝく任地に向ひて旅立たんとす。また諸君が精神をこめられし言霊の真を伝へ賜ひし若干の学生等は、はやくも我国ことばを曉り得て、今日しも先師の為に尽さばやとて、この祭の場には、かしづきつゝあるなり。

あはれ芝蘭の野は長に緑に、芝山の巖は千古に涉りて動かざらん。こゝなる樟の一本の辺に墳を築き碑を建てて、諸君の遺蹟を後の世に語りつぐべきしとはしぬ。あはれ英霊よ天翔り來て永くこゝに留り賜ひ、本島の文化を導きたまへ。

伊沢修二
謹白

かくて、六士先生の英霊は、永く風光絶佳の境に安んじて、全台湾教化の守護神とな

られたのであった。

明治三十年二月一日に執行された一周忌祭は、「泣かざる人は、人に非ず」といはれる程の泣祭りとなり、伊沢修二学務部長の人心をえぐる弔ひ演説に、列席した講習員達は感奮興起し、こゝより芝山巖精神は生れ育った。六人の先生方の死を超越した教育精神は、その後永く台湾教育の指針として継承され、確固不動の教育魂の原点となった。

六 士 先生 の 略 歴

楫取^{かとり} 道明先生

先生は旧萩藩儒、小田村伊之助（のち楫取素彦と改名）の二男として、安政五年（一八五八）五月萩城下、松本村清水口に生まれた。母は吉田松陰の妹、寿子である。

父楫取素彦が、道明の死後、旧藩主毛利家の菩提寺東光寺の境内に、明治二十九年夏五月に建立した「楫取道明遺骨碑」に名文にてその経歴が刻まれてゐる。（山本勉弥著「萩碑文鐘名集」より）

「道明は余が第二子、小字桑次郎、甫はめて七歳久坂氏に養はる。元治元年甲子（一八六四）、義父義助（玄瑞）京師に殉じ、道明は母に従つて萩より山口に移り、始めて学に就く、明治五年、余足柄県（神奈川県）七等出仕に補せられ、道明を携へて任に赴く。英学を修めしむ。

既にして大学に進入せんと欲するも、賦質孱弱せんなるを以て聴ゆるされず、年十八司法省に出で熊谷、栃木、茨城の諸衙を経て、内閣に転任し、出でて愛媛県属となる。幾ばくもなくして、農商務省に遷り、後宮内省に任ず。

疾を以て職を辞し郷に帰り、地を阿武郡椿東村に卜し、耕稼に従事す。
会々なまなま征清の役あり、慨然として蹶起げつきし従軍を請ふ。

而して媾和已に成る以て果さず、ついで台湾総督府民生局員に補せられ、兼て学務を掌る。

道明任地に至り施政の方を按じ自ら謂ふ、新付の民をして皇化に服せしむるには、邦語を授くる急なるはなしと、乃ち僚友と謀り、地を八芝林すなは（芝山巖）に相し仮に僧房を以て校舎となす。校内に起居し、土人の子弟を教ふ。而して士林は阜丘に倚り淡水河を

帯び、舟楫しゅうしゅうを具するに非ざれば、即ち府城に至るべからず。

明治二十九年一月一日土匪蜂起し、総督府の南門に薄せまり勢猖獗転じて士林を襲ふ。道明等結束して山を下る。賊已に麓に在り格闘数合、衆寡敵せず遂に賊数人を斃たはして死す。

賊屍を奪ひて去る。後、数日府員遺体を搜索して火化し、諸これを郷里に函致かんちす。督府状を具し、天子近臣を遣り、戦地を検し、其職に死するを恤あはれ、位階を進め、金を遺族に賜ふ。

初め、道明久坂氏を嗣ぎ、後、義弟秀次郎に譲り復籍す。余が家、平日他の嗜好なく、好んで国詩を作る。御歌所参候となり、歌会講師に列す。為人義侠ひと、なり、難を救ひ、困を賑にぎはして、己の有無を顧みず、是を以て家計屢々空し。

余本年六十八、忽ち此憂情にあたる。忍ぶべからざるものあり。然れども処おもを慮しり度かを失ふは、蓋し丈夫の恥るところにして、能く節を全うして職を辱はかしめざるは、父たる者亦以て自ら慰むべきなり。

道明安政五年五月を以て萩に生る。享年三十九、遺骨を椿東村東光寺に埋む。法諡ほうしを純正壮烈と曰ふ。

配千種氏、三男二女を生む、長は三郎、次は公弼、季は倉之丞、女は皆幼、骨を埋むるの後数ヶ月にして石を建つ。銘を刻して曰く、

泰山鴻毛 死亦難哉 死而得_レ所 傑士人魁 芝山劇闘 賊衆排_レ厖 彈尽刀折

碧血作堆 結纓致命 忠孝兼該 竹帛紀事 英烈不灰 遺孤拜_レ賻 天恩是推

松水清徹 韓岳崔嵬 茲卜二兆域 魂其歸來

明治二十九年夏五月

父正三位男爵 楫取素彦撰文

実に先生は天資温厚にして気品高く、恵まれた境遇にありながら栄達を求めず、生来蒲柳の体質にもかゝはらず、よく吉田松陰の殉国的思想と、父楫取素彦の国士的行動の影響を受けて、自ら死を以て国の教育に殉じたたと云へる。「松下陋村と雖も、誓つて神国の幹と為らむ」と吉田松陰がかつて予言した如く、この地より輩出した明治維新の功臣に劣らぬ偉業をなして、台湾の地に散華したのである。

正五位に叙せられ、墓地は萩の東光寺境内にある。戒名は「純正院積芝巖壯烈居士」。享年三十九歳。

(なほ、昭和五十七年五月、元台湾教育関係者一同(蓬萊会)により「芝山巖六氏先生之碑」が楫取道明先生の墓の側に建てられた。)

先生の御歌

かれのこるあしの葉末に霜おきて下ゆく水もうすこほりせり

松陰神社祭日に

いとまなき身にはあれども今年こそ梅見にゆかめ月ヶ瀬のさと

置く露に枝もたわみてゆく水をせかんとすなり岸の秋萩

郭公声ほしきすもあはれに聞ゆなりなれも昔を偲びてやなく

大君の恵の露はおくつきの苔の下にもかゝりける哉

関口長太郎先生

先生は旧西尾藩士関口宇左衛門の第二子として、安政六年(一八五九)十一月、愛知県幡豆郡西尾町に誕生、母は安丸氏、幼少より学を好み、慶応二年八歳にして藩費西尾修道館に入学、明治五年まで七年間秋山恬道先生、佐藤楚材先生について漢学を修めた。

明治九年愛知県立尋常師範学校開設と同時に入学、生涯を教育に捧げる決意をされた。同校で学ぶ事一年、二等准訓導を拝命し、県下の各学校で名声噴々たるものがあり、明治二十一年六月には錦城小学校訓導兼校長、二十五年八月には郡下第一の西尾尋常高等小学校長を拝命、郷党子弟の訓育に全力を尽くした。

特に、当時早くも幼童教育に目を着けられ、西尾幼稚園を創設された卓見は、世の称讃の的となった。

明治二十八年六月休職となるまで、前後十有八年の長きにわたり初等教育に尽瘁されたが、二十八年五月、台湾が我が版図となるや、新領土台湾教育の重要性を痛感され、当時四歳の一人娘（名は浪）を残して、挺身その任に当らんことを心に期し、当時京都在住の伊沢修二を尋ね、その衷情をのべ、やがて学務部員の内命を受けた。芝山巖学堂にあつては、生徒の教育の便を図るため、「新日本言葉集」を出されてゐる。

明治二十九年一月元旦の土匪襲撃の際には、大喝一声、長い鬚をひるがへして、三尺の剣を抜き応戦された姿はまさに古武士の風格であった。明治三十八年五月、（殉難十年後）先生の遺徳を顕彰して、「関口長太郎之碑」が幡豆郡教員協会の手により、西尾城趾

の一角に建てられた。その碑文（伊沢修二撰文）の中に「国風一章を賦し旧僚に寄す」として、先生の和歌が一首しるされてゐる。

遠之辺許乃 宇辺遠和須留 比麻毛奈之 麻奈比乃美知遠 於毛比也留仁毛

墓は郷里の妙満寺境内にある。戒名「透関院有道長安居士」。享年三十八歳。

中島 長吉先生

先生は、父中島菊松の二男として、明治四年一月元旦、群馬県碓氷郡白井町字五料に生れた。幼少の頃から学問を好まれ、明治十年八歳の春、五料小学校に入学され、学ぶこと僅か一年半にしてその初級を卒業、さらにその後は一ヶ年に四級、つつ飛んで、十一歳の時には早くも小学全課程を終へてしまった。

卒業後、山村の小学校の助教員を二年半ほど勤めたが、奮起一番、松井田新堀の岡田先生のもとに走り、英語の研究を始められた。明治十九年三月、十五歳で上京、二年間苦学後、二十一年九月、遂に念願の東京府立師範学校に入学された。螢雪四年、明治二十五年四月、各級中最優秀生として、同校卒業の栄冠を得、同時に東京富士見小学校の

訓導を命ぜられた。

先生は氣宇剛壯闊達、氣力勇邁にして霸氣満々、第二の豊臣秀吉たらんとその志を述べてゐた。常に修養と研究を怠らず、特に音楽を歌人小山作之助に師事し、語学は既に英語、中国語に通じて居られ、さらに独逸語、仏蘭西語の二語をも研究して、他日に備へるべく努力した。

やがて日清戦役に従軍、陸軍通訳官となり、俘虜の通訳などに従事せられたが、明治二十七年十二月、近衛師団歩兵第四連隊付となり遼東半島に渡られた。金州、蓋平、奉天に通訳官の勞をとられたが、翌二十八年五月、近衛師団の南進と共にそれに従ひ、勇躍台湾に向はれた。途中病魔におかされ、陸軍省雇のまゝ、台湾総督府学務部勤務を命ぜられた。

先生はその年七月十五日辞令を受けられると直ちに、芝山巖学堂に赴任されたが、この日の先生の服装は、和服に袴を着け、弁護士風の帽子をかぶり、日本刀を腰に、下駄ばきにて、意気揚々として芝山巖に登られ、生徒達はびっくりしたといふ事である。

先生は教育にあたって全身全霊を打込み、その教授ぶりは真剣そのものであった。ま

た深く、つねに音楽教育を正科とするやうに進言してゐた。ある時、怠けた生徒に「特別教育するから日曜日に出て来い。」と云ひつけたが、一人も出て来なかつた。翌日先生は鞭を取つてビシビシたゝいた上、大筆を墨汁にひたし、四人の額ひたしに一人一字づつ、此・鞭・汝・玉と書いて戒められたといふ逸話が残つてゐる。

明治二十九年一月元旦、土匪が襲ひ来つた時、先生は剣を手でおさへて大声にて、「退いても死、進んでも死、死一つのみ。」と叫び遂に山を下り、殺氣満々たる土匪軍の中に敢然と飛び入り、諄々道を説きたるも、彼等はいよいよ聞き入れずして毒刃よるを揮つた。早やこれまでと遂に剣を抜き二人の土匪をたほし、力闘奮戦土匪軍の心胆を寒からしめたが、終に敵刃にたほれた。その日は奇しくも先生の満二十五歳の誕生日であつた。

明治三十年一月一日、頌徳記念碑が郷里に建てられた。伊沢修二先生の篆額、揮毫撰文は音楽学校教授旗塾士郎先生のものである。その碑の末尾に中島長吉先生の遺韻一首が銘に代り刻まれてゐる。

故郷能空乎幾千里 ふるさとをいくせんり 離連天武須夫草枕 はなれてむすぶくさまくら

散留登毛与止夜 ちるともよしや 君能多每 きみのため

消由流毛与止夜 国能多毎

葉末迺露登母路登毛爾

戒名は「徳隣院蘭台長香居士」。享年二十六歳。

桂 金太郎先生

先生は、父桂 信行の長男として、明治二年八月、東京府南葛飾郡綾瀬村に生れた。父は千葉県庁に勤めてをられたが、後、十有餘年にわたり、東京府会議員として府政のために尽くされた。

明治十年一月、八歳にして郷里足立郡千寿小学校に入学されたが、十三年十月、東京麹町の番町小学校に転じ、十五年夏にはその全科を終了された。後、叔父を頼り、東京府立尋常中学、福岡県立中学、前橋幽谷義塾等、中学を屢々転校、初め士官学校志願であったが、後教育者たらんと志し、明治二十年九月、十九歳にして東京府立師範学校に入学された。

明治二十四年四月同校卒業と同時に、郷里瑞穂小学校に赴任された。後、番町小学校

に転勤、そのかたはら、夜間専修大学に通ひ、理財学を修め、又英語の研究に励み、他日に備へるところがあつた。

先生は台湾教化の第一線に立つべく、その志を同窓の友人中島長吉先生へ伝へ、中島先生を通じて伊沢修二学務部長の快諾を得、明治二十八年七月二十八日、台湾総督府学務部員としての渡台が決定された。

出発にあたり宇品（広島県）の港より父母宛に、長さ四尺二寸の巻紙に細かくその心境をのべてゐる。最後の一節はまさに意気当るべからざるものがあり、先生の気概にふれる思ひがする。

「終りに臨み一筆す。海外の事情を知らざる人々には実に贅沢ぜいたくを始め、何心なく消光すれども、四千万同胞の一部は、実に恐るべく一身を犠牲にして運動するなり、本日朝、兵站部（戦時軍隊の食糧その他軍用品を調達する所）に至れば、台湾よりの兵士・人夫等の遺骨皆箱に入り、およそ百五、六十送り届けらる。思はずその人士の霊前に感涙したり。宇品の平站部はあたかも火事場の如し、筆舌に尽くす能はず、小生身体健康にして一死を恐れず、勇気勃々台湾を呑まんとす。委細は後便に譲る。」

同年八月八日、台北に進み、同僚の中島長吉先生の出迎へを受け、芝山巖学堂に到着した。

先生の教授ふりはあくまでも親切丁寧であつたが、時間を守ることは極めて厳格で、一分一秒の遅刻、一日の欠席も許さなかつた。或る日、貧しい一生徒が家事の手伝ひをし家計をたすけるため欠席した事が判明した時、先生は早速翌日より毎日その生徒のために鎌を刈り、鉋なたをふるつて薪を採つてやつた。その後、父親に懇々と教育の必要を説き聞かせ、学業を継続させた。生徒の名を施錫文と云ひ、その後この事を常に人に語り、お慕して止まなかつた。

先生はまたすばらしい努力家で、「台湾実業地誌」が遺稿として後に出版された。

芝山巖事件後、一ヶ月余り経過した明治二十九年二月八日、東京府立師範学校同志会では、芝増上寺に於て、桂、中島両先生の合同追悼会が盛大に執行された。伊沢修二学務部長も列席し、声涙ともに下る弔辞が述べられた。

墓は東京都足立区五兵衛町、龍慶寺にある。戒名は「台崇院武徳金峰居士」。享年二十八歳。

井原順之助先生

先生は、旧岩国藩士、井原右左助の長男として、明治五年三月、珂玖郡川下町に生まれた。母は藤兼家からである。

神童の評高く、尋常科から高等科までを四年間で卒業した。(普通八年を要する。)明治二十三年、岩国公立学校卒業後、山口高等中学に入学したが、時勢に感じ身を陸軍に投ぜんとして退学した。周到な準備の後試験を受けたが、視力に故障がありその目的を達することが出来なかった。

後に、私立岩国学校に学び、特に語学が堪能で、独逸語、英語、ロシア語などを独学で覚えられた。台湾が日本の領有となるに及んで渡台し、初め内務部庶務課に勤務したが、後日自ら望んで学務部に転じ、芝山巖学堂に入られた。先生の語学力は台湾人の教育に極めて役に立った。

先生の墓は通称「車墓地」、山陽線の南側にあつて、御影石の立派なものである。その裏面に、

「台湾総督府学務部員兼日本語学校職員在職中明治二十九年一月一日土匪蜂起其際於

八芝蘭芝山巖下士林街戦死行年二十五年」と刻まれてゐる。享年二十五歳。

平井 数馬先生

先生は、父平井新平の四男として、明治十一年七月二十六日、熊本県益城郡松橋町で生まれた。母は広瀬家からである。父は非常な敬神家で、熊本の神風連に加はり、西南戦争の時には薩摩軍に加はつて活躍した。

幼時より学を好み、俊才の誉高く、尋常小学、高等小学の課程を一般の人の半分で修了した。後、濟々巒に入学、武術を好み、擊劍、柔道、游泳にすぐれ、なかでも柔道が得意であつた。後日、海外に雄飛せんとの大望を抱き、北京語と英語の勉強に没頭した。さらに九州学院にすゝみ、支那語の研鑽を深めた。台湾總督府が学務部員の募集をするや、熊本県を通じて応募、僅か数へ年十八歳の若さで總督府通訳官に採用された。明治二十八年八月九日、佐世保港を出帆、台湾へ向つた。

芝山巖学堂に於ては、藁わらを敷いて起居し、寢食を忘れて専心島民の教育に當つた。特に言葉による日本人と台湾人の意志の疎通が緊急の課題と悟つた時、先生は生徒に日本

語を教へるかたはら、自分は台湾語の修得に心掛け、日台会話の本の編集を担当し、日夜精励された。(此の本は後に、平井先生の形見として、戦死後熊本県より台湾への渡航者に対し一冊づつ平井数馬先生の名前入りで、警察より与へる事になった。)

明治二十九年一月一日、芝山巖が匪徒に包囲された日、先生は止むなく剣を抜き、頃の腕だめしとばかり切つて切つて切りまくり、一旦は重囲を切り抜けて士林街に向ひ、急を総督府に知らせんとしたが、追撃する匪徒に雨霰あられと銃弾あびを浴せられ、足に一弾を受けた。迫り来る敵を二人まで切り倒したが、敵の鋒先にかゝり最期を遂げた。

二年後、明治三十一年二月、熊本高等小学校同窓生は、この殉国の行動に感動し、その義烈を後世に伝へんとし、同志百二十三名をもつて、熊本市横手町安国禅寺境内に石碑を建立した。

「殉国士平井数馬君」と大きく刻まれてゐる。

先生の墓は、熊本市竜田山麓小峰墓地にある。享年十九歳。

(なほ、昭和四十六年は時あたかも芝山巖祭七十五周年に当り、地元の台湾教育関係者の組織である蓬萊会の主催により、平井数馬先生顕彰慰霊が發議され、平井先生の眠

る小峰墓地の正面に新しく碑が建設された。）

芝山巖精神の継承

あの国民ひとしく悲涙にむせんだ終戦の年以來早や三十九年の歳月が流れた。かつて外地にあつて祖国日本の為に働き生命を捧げた人々の勲は、年々忘れ去られつゝある。

台湾の統治にあつては、終戦の年まで五十年の間、諸外国の新領土統治に対比して、全く類を見ない立派な業績を日本人は遺した。これひとへに、一視同仁の大御心のもと、教育は全島を潤ほし、幾多の犠牲をはらひながらも、献身的に働いた日本人の血と汗の賜物である。特に八十八年前、芝山巖事件を契機として、「六士先生に続け」の相言葉のもと、文字どほり生命を投げうって、その生涯を台湾教育に捧げた諸先生方、今は亡き在天の英霊のお蔭である。今その英霊は何処に眠り給ふや、偲びて暗涙にむせぶばかりである。筆者は小学生の頃より毎年二月一日先生に引率されて、芝山巖神社に長い列をなして参拝した事を憶えてゐる。例年雨の日が多く、田舎道のぬかるみの中をお詣りした光景が、今もすっかり脳裏にやきつけられ、地のぬくもりを体内に感じる。

終戦と共に、「学務官僚遭難之碑」も、六士先生始め教育関係諸英霊を祀る「芝山巖神社」も中国人のために破壊された。たとへ、形はくずれても、その魂は永遠に護国の御霊として生きてゐると信ずる。芝山巖精神を思ふ人々の心の中に、必ずやよみがへつてくると思ふ。民族の魂は一旦失はれたら再びとりもどしは出来ない。民族の生命にかへ守りぬかねばならない。

昨今の教育の退廃を思ふ時、芝山巖学堂に於ける、生命を賭けた師弟相愛の教育とはまさに隔世の感がある。教育者ひとしく一刻も早くこの先人の志を学び、教育の原点に立ち帰らねばならぬ。この魂の継承こそ我ら生き残りし日本人の責務である。明治・大正・昭和と終戦まで受け継いだ御祖の魂を、これからも語りつぎ言ひ継ぎ、日本文化の伝統として守り継がねばならない。こゝに日本の生命の不断の活力があると信ずる。

最後に、伊沢修二先生の招魂歌を伝へ、結びとしたい。

招魂歌（大正五年五月十四日、於芝山巖、伊沢修二作）

なきがらは いづこの土となりぬとも

みたまはこゝにとゞまりたまへ

永遠こゝにとゞまりたまへ

(参考資料) 小田村寅二郎編「新輯日本思想の系譜」

見上 保著 『六士先生の功績』

(昭和五十九年一月 「不二」誌掲載)

あとがき

私がこれまで受持った卒業生の中で、昭和三十年三月県立佐賀工業高等学校建築科卒業の諸君は、二年に一度同窓会を開いてゐる。今まで何回招待されてお世話になったかわからない。今年（昭和五十九年）が開催の年にあたり、お盆休みの八月には各地より集ることになってゐる。これまでにお世話になったお礼のお返しに何かと思ひ、この本の出版を昨年ごろから思ひ立った。

幸ひ、十年程前から、雑記帳に「話の屑籠」といふ名をつけて、暇をみては読んだ本の中から、私の心を打った話や、深く考へさせられる譬へ話等書き留めてゐた。やがて三冊程になったが、私一人でしまっておくには惜しい気持がしてきた。卒業してから離れくくなった多くの教へ子達に読んでもらへたら有難いと思ふやうになった。そして

拙い感想を後につけて、私の心の声を聞いてもらへれば、なほ一層有難いと思った。

多くの中から七十篇ばかりの文をこゝに選ばして頂いたが、いづれも諸先生の珠玉の如きお言葉ばかりだ。たゞ有難いと思ふ。私が一貫して求めたのは、人の真心と、古き良き日本の伝統とその継承とであった。いくらかでも意を汲んでいただければ望外の喜びである。皆様方の御叱正、御指導をこの上とも願ひしたいと思ふ。

尚、最後の二篇は、祖国のために生命を絶つた先生方への鎮魂の思ひをこめて、先に書いたものを加筆訂正して掲載した。

引用文はなるべく原文のまゝとした。たゞし旧漢字は遺書等を除き、当用漢字に変へさせていただいた。仮名づかひは、歴史的仮名づかひを使用させていただいた事をお許し願ひたい。

最後に、古賀秀男先生には、お忙しき中に心よく序文をお引受けいただき、身に余るお言葉を賜り、恐縮この上なく衷心より厚くお礼の言葉を申し上げます。また美しい写真で巻頭を飾って下さった武藤太喜雄先生、題字の揮毫を賜った彌富徳太先生、立派な写真を撮影して下さい下さった貞包哲朗先生、御助言、校正をいただいた野本水哉先生、菖蒲

正明先生に深甚の謝意を表します。この本の出版に労をとっていただいた佐賀印刷社の方々に厚く御礼申し上げます。

たまゆらのいのちにはあれど笹の葉の葉末にむすぶ露ぞ美し

昭和五十九年六月十日

末次祐司

〈著者略歴〉

末次 祐司（すえつぐゆうじ）

大正13年（1924）台湾台北市に生れる。

昭和20年（1945）12月台北経済専門学校卒業

佐賀工業・佐賀西高（定時）・佐賀東・佐賀商業高等学校勤務

昭和59年（1984）3月退職

（現住所）

〒840 佐賀市北川副町大字木原四本柳160-48

電話 0952-23-9782

発行	昭和59年8月10日
著者	末次祐司 佐賀市北川副町大字 木原四本柳160-48
印刷	佐賀印刷社 佐賀市高木瀬町長瀬

（非売品）

